ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 94

富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書

くろ せ おお や

－宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2018

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 94

富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書

くろ せ おお や

－宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査－

２０１８

富山市教育委員会

調査区　全景（北西から・後方に蛇行する土川と立山方面を望む）

調査区　全景（南東から・後方に呉羽丘陵を望む）

巻頭図版2

調査区　全景（東から・後方に北陸自動車道を望む）

墨書土器「中田」（SP142・SK31・SI03）

例　　言

1　本書は、富山県富山市黒瀬139番地外に所在する黒瀬大屋（くろせおおや）遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、株式会社OSCAR J.Jが行う宅地開発に伴う発掘調査である。

3　調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理のもと株式会社OSCAR J.Jから株式会社アーキジオに発注し、実施した。

4　本書で報告する調査の概要は次のとおりである。

調査面積　432.57㎡
発掘調査期間　平成29年7月19日～9月27日
整理作業期間　平成29年9月28日～平成30年3月31日
監理担当者　中本八穂（富山市教育委員会　埋蔵文化財センター　専門学芸員）
　　細辻嘉門（富山市教育委員会　埋蔵文化財センター　主査学芸員）
発掘作業担当者　基峰修、村上佳（株式会社アーキジオ）
整理作業担当者　中村恭子、基峰修、村上佳（株式会社アーキジオ）

5　調査及び出土品整理にあたり、次の方々よりご協力・ご助言を賜った。また、地元黒瀬町内のご協力を得た。記して謝意を表します。（五十音順、敬称略）
相沢学、柏木健司（富山大学大学院理工学研究部）、北陸コンサルタント株式会社、北陸電力株式会社

6　自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を本書第４章に掲載した。

7　UAVによる空中撮影については平成29年5月15日付け阪空運第1055号で許可及び承認を得た。

8　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

9　本書の執筆は、第１章・第２章を細辻、第３章・第５章を基峰・村上が行った。文責は文末に記した。

凡　　例

1　本書で用いた座標は世界測地系Ⅶ系である。挿図の方位は真北、水平基準は海抜高である。

2　層序および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1995年版』に拠る。

3　遺構記号は、掘立柱建物：SB、竪穴建物：SI、溝：SD、土坑：SK、ピット：SP、その他の遺構：SXを用いた。

4　遺物実測図の縮尺は、原則1/3である。

5　挿図中の網掛けは、次のとおりである。

□：地山　■：須恵器の断面　▨：黒色処理　■・□：墨書　□：煤・油煙

目　　次

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯 …… 1
第２節　発掘作業及び整理等作業の経過 …… 1
第３節　発掘調査日誌抄 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法 …… 7
第２節　層序 …… 7
第３節　遺構 …… 7
第４節　遺物 …… 32

第４章　自然科学分析 …… 63

第５章　総括

第１節　調査遺構について …… 74
第２節　出土遺物について …… 74
第３節　まとめ …… 79

引用・参考文献…… 79
報告書抄録

挿　図　目　次

図 1　調査区位置図 …… 3
図 2　調査区周辺の地形分類図 …… 3
図 3　周辺の遺跡分布図 …… 6
図 4　調査区配置図 …… 8
図 5　基本層序図（A区南壁・B区南壁）…… 8
図 6　調査区（A区・B区）遺構全体図 …… 9・10
図 7　A区遺構全体図 …… 11・12
図 8　SB01・SD16　遺構平面・断面図 …… 15・16
図 9　SI01　遺構平面・断面図 …… 17
図10　SI03　遺構平面・断面図 …… 18
図11　SD09・10・11・15　遺構平面・断面図 …… 19
図12　SK17・19・27他　遺構平面・断面図 …… 21

図13　SX03・06・09・10・18　遺構平面・断面図 …… 23
図14　SX11・17　遺構平面・断面図 …… 24
図15　SX21　遺構平面・断面図 …… 25
図16　B区遺構全体図 …… 27
図17　SI05・SD32他　遺構平面・断面図 …… 29
図18　SD23・SX12・13・14他　遺構平面・断面図 …… 31
図19　遺物実測図1 …… 33
図20　遺物実測図2 …… 35
図21　遺物実測図3 …… 37
図22　遺物実測図4 …… 39
図23　遺物実測図5 …… 40
図24　遺物実測図6 …… 42
図25　遺物実測図7 …… 44
図26　遺物実測図8 …… 45
図27　遺物実測図9 …… 47
図28　遺物実測図10 …… 49
図29　植物珪酸体含量 …… 67
図30　珪藻化石 …… 70
図31　花粉化石 …… 71
図32　植物珪酸体 …… 72
図33　9c後半～末頃の椀類底面に書かれた「中田」 …… 76
図34　土錘の分類・重量比率 …… 78

表　目　次

表 1　調査遺構一覧表 …… 51
表 2　土器等観察表 …… 58
表 3　墨書土器・刻書土器一覧表 …… 61
表 4　土錘観察・計測表 …… 61
表 5　石製品観察・計測表 …… 62
表 6　放射性炭素年代測定結果 …… 64
表 7　珪藻分析結果 …… 66
表 8　花粉分析結果 …… 66
表 9　植物珪酸体含量 …… 67
表10　ガラスビード作成条件 …… 69
表11　蛍光Ｘ線装置条件 …… 69
表12　蛍光Ｘ線定量測定 …… 69
表13　蛍光Ｘ線分析結果（化学組成） …… 69
表14　出土した施釉陶器の構成一覧 …… 78

写真図版目次

巻頭図版１　調査区 全景（北西から・後方に蛇行する土川と立山方面を望む）
調査区 全景（南東から・後方に呉羽丘陵を望む）
巻頭図版２　調査区 全景（東から・後方に北陸自動車道を望む）
墨書土器「中田」(SP142・SK31・SI03)
図版 1　調査区全景
調査区 全景（南から・A区［手前］B区［後方］）
調査区 全景（上から・A区［下］B区［上］）
図版 2　調査区遺構検出・基本層序
調査区 遺構検出全景（上から・A区［下］B区［上］）
A区 遺構検出全景（西から）　B区 遺構検出全景（西から）
A区 南壁基本層序（北から）　B区 南壁基本層序（北から）
図版 3　A区 調査遺構・遺物出土状況（1）
A区 全景（東から）　A区 全景（西から）
A区 SP124遺物（2・3）出土状況［SB01］(南から）
A区 SP117全景［SB01］(南から）　A区 SB01・SD16全景（北から）
図版 4　A区 調査遺構・遺物出土状況（2）
A区 SI03全景（上から）
A区 SI03遺物（26）出土状況（東から）　A区 SI01全景（南西から）
A区 SP177遺物（44）・SK31遺物（37～39）出土状況（北から）
A区 SX11遺物（56・57・60・61）出土状況（西から）
図版 5　A区 調査遺構・遺物出土状況（3）
A区 SX11全景（南から）
A区 SX17全景（西から）　A区 SX21土層堆積状況（南から）
A区 SX21全景（北から）　A区 SX21遺物（79）出土状況（東から）
図版 6　B区 調査遺構・遺物出土状況
B区 全景（東から）　B区 全景（西から）
B区 SI05全景（南から）　B区 SI05遺物（110）出土状況（東から）
B区 SD23全景（南から）　B区 SD32全景（北から）
B区 SD32土層堆積状況（北から）　B区 SD32遺物（129）出土状況（東から）
図版 7　A区出土遺物（1）
図版 8　A区出土遺物（2）
図版 9　A区出土遺物（3）
図版10　A区出土遺物（4）
図版11　A区出土遺物（5）
図版12　A区出土遺物（6）・B区出土遺物（1）
図版13　B区出土遺物（2）
図版14　B区出土遺物（3）

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

黒瀬大屋遺跡（遺跡番号2010549）は、昭和63年度～平成3年度に富山市教育委員会（以下:市教委）が実施した市内遺跡分布調査により新たに確認した遺跡である。平成5年に市教委が刊行した『富山市遺跡地図（改訂版）』には、遺跡番号201479として登載・周知され、平成25年度刊行の『富山市遺跡地図』では現在の遺跡番号となった。

本遺跡内では各種開発に伴う試掘調査及び発掘調査が行われており、その調査成果を踏まえこれまでに少なくとも2回遺跡範囲の見直しが行われた。現在の埋蔵文化財包蔵地面積は180,377㎡である。

平成29年2月15日、富山市黒瀬地内において、宅地開発について埋蔵文化財包蔵地の所在確認依頼があった。開発予定地の全域（15,179.82㎡）が黒瀬大屋遺跡に含まれていたため、平成29年2月28日～3月3日に市教委で試掘調査を実施したところ、調査対象地の中央部4,722㎡で、奈良・平安時代の遺物包含層と土坑・溝・ピットを検出し、須恵器・土師器が出土した。埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、開発事業者と埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。協議の結果、開発計画のうち道路部分と擁壁部分については工事の計画が遺構検出面よりも深く、埋蔵文化財を現地で保存できないため、工事部分432.57㎡について発掘調査による記録保存を行い、宅地部分と公園部分は現地保存、下水道工事など狭小な掘削工事については随時工事立会を行うことで合意した。

文化財保護法93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、開発事業者から平成29年10月10日付けで市教委へ提出され、市教委の副申を付けて平成29年10月11日付け埋文第60号で富山県教育委員会へ提出した。文化財保護法99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、市教委から平成29年7月19日付け埋文第60号により富山県教育委員会へ提出した。

第２節　発掘作業及び整理等作業の経過

発掘調査は開発事業者である株式会社OSCAR J.Jから株式会社アーキジオに業務を発注し、埋蔵文化財センター職員が発掘調査の監理にあたった。発掘調査業務契約締結後、市教委・開発事業者・調査受注者の三者で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を平成29年7月14日付けで締結した。

調査着手前の平成29年7月14日に三者立会いの下、調査範囲について確認を行った。発掘調査は平成29年7月19日から同年9月30日まで行った。表土掘削はバックホウを用いて平成29年7月19日から平成29年7月20日まで行った。排土は発掘調査区外の敷地内に横置きした。引き続き表土除去完了後の7月21日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を開始した。

試掘調査結果では、奈良・平安時代の遺物包含層と遺構面が堆積することが想定されており、掘削を開始すると、試掘調査の結果のとおり、調査区全体で奈良・平安時代の遺構を確認し、遺物が出土した。遺物包含層の遺物は、世界測地系第Ⅶ系座標に基づき10ｍグリッドを設定してグリッド毎に取り上げた。包含層掘削が完了したところから遺構検出作業を行い、完了したところで全体の遺構検出写真を撮影した。その後遺構掘削作業を行い、掘削作業と並行して随時写真撮影・測量・図面作成作業・土壌試料採取を行った。9月15日には遺構掘削を終え、高所作業車とUAVを使用して全景写真を撮影した。9月19日には埋蔵文化財センター所長による現地作業終了確認を行った。

当初、調査後の現地埋め戻しは行わない予定であったが、工事主体者から依頼があり、9月20日から現地埋め戻しを開始した。9月27日に埋め戻し作業の完了と撤収を確認し、現地調査を完了した。

遺物整理・報告書作成作業は、現地調査終了後、株式会社アーキジオが実施した。整理作業は、遺構出土遺物でも特徴的なもの、遺物全体の形がわかるものを優先して抽出し、接合・図化した。遺物写真はデジタルカメラを使用し、図化したものを優先して撮影した。これらの作業と並行して原稿作成を行い、平成30年3月31日に本書を刊行し、業務を完了した。

第３節　発掘調査日誌抄

平成29年

〔7月〕

3～7 日：発掘準備。

8～11日：現場事務所等の設置。

12～14日：調査区(A・B区)設定、掘削前土量計測測量。

14日：調査区調査範囲確認(市教委・開発事業者・調査受注者)

15日：基準点測量。

19日：バックホウでの表土掘削開始。

21～27日：人力による包含層掘削及び遺構検出。

28日：遺構検出、高所作業車とUAVでの検出面撮影。

29日：遺構検出平面概略図の作成。

31日：A区遺構掘り下げ開始。

〔8月〕

1～16日：A区遺構掘り下げ、断面実測。

17日：A区遺構平面測量の開始。

18～22日：A区遺構掘り下げ(SB01掘り下げ開始)、断面実測、平面測量。

23日：B区遺構掘り下げ開始。

24～30日：A・B区遺構掘り下げ、断面実測、平面測量。

31日：A区SI01完掘撮影。
A区SX21掘り下げ、A区南壁面実測開始。

〔9月〕

1～4日：A・B区の遺構掘り下げ、断面実測、平面測量。

5日：A区SX21完掘撮影。

6～8日：A区遺構平面測量、B区遺構断面実測。

11日：B区南壁面実測開始。

12日：A区SI03、B区SD32掘り下げ、遺物取り上げ。

13日：A・B区遺構エレベーション実測、平面測量。

14日：全体清掃、UAVでの完掘面・全景(空中)写真撮影、掘削後土量計測測量。

15日：完掘面撮影、基本層序土壌採取。

19日：現地作業終了検査実施。

20日：現地埋め戻し作業開始。

27日：埋め戻し作業完了、現地撤収確認、現地作業終了。

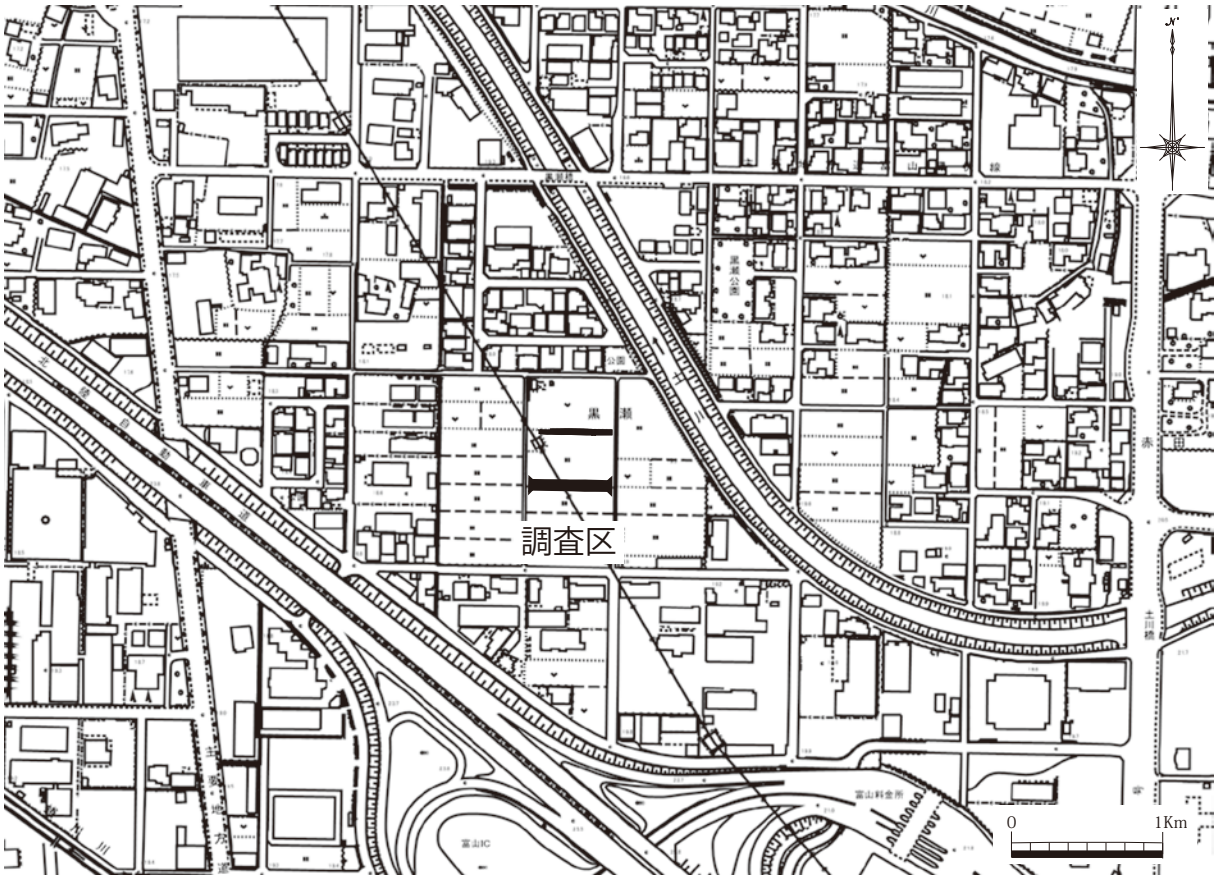


図1　調査区位置図(S=1/5000)

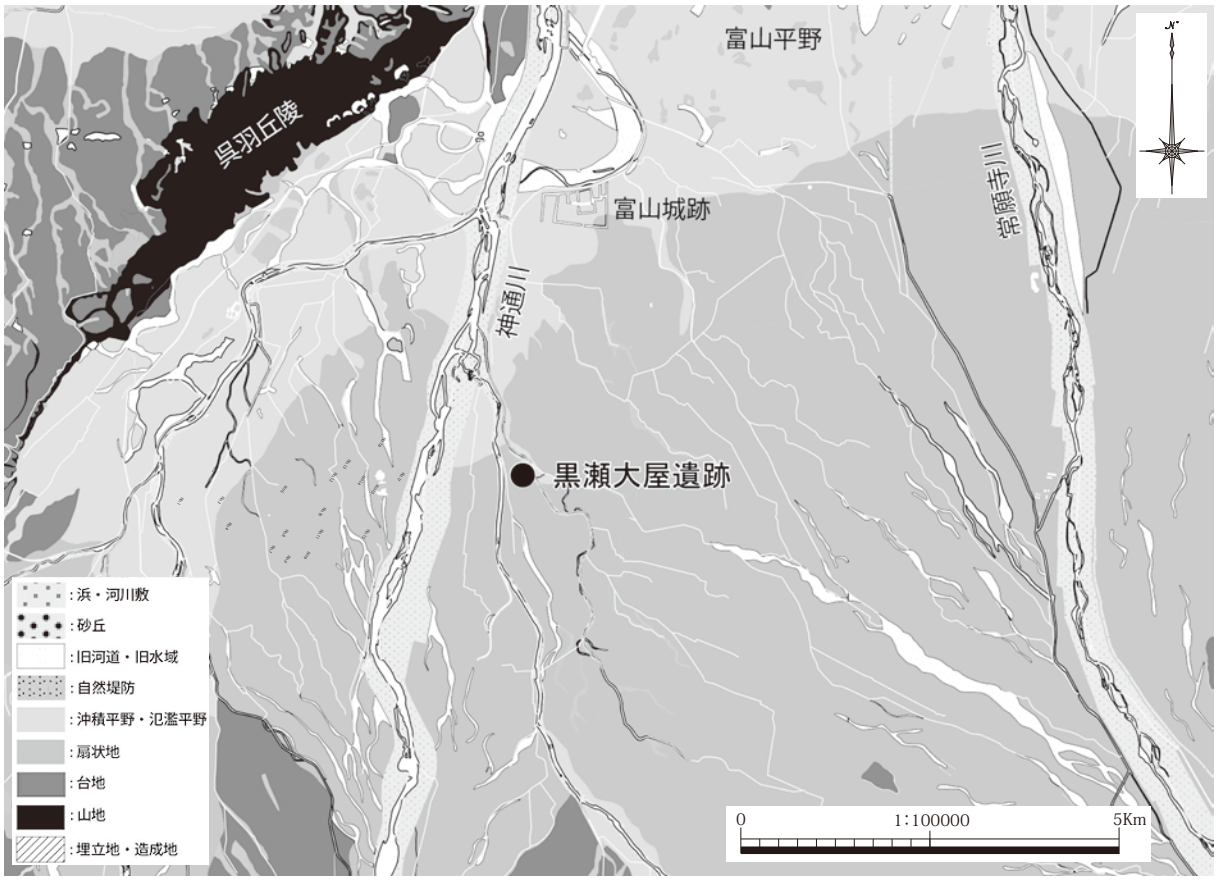


図2　調査区周辺の地形分類図(S=1/100000)

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置する。富山市の地勢は大まかに山間部と平野部に大別され、南が高く、北が低くなるという地勢を示しており、海岸から標高3，000ｍ級の高山地帯まで変化に富む。

富山平野は富山県中央部の大部分を占めており、北は富山湾と面し、東端は早月川扇状地、西端は県のほぼ中央を二分する呉羽丘陵に、南は飛騨山地から続く丘陵に接する。神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地や低位面・氾濫平野の発達が顕著である。

黒瀬大屋遺跡（図3・1）は、富山中心部から南方約5㎞の富山市南部、同黒瀬・黒崎地内に所在し、東西600ｍ、南北700ｍに広がる弥生時代後期から近世の集落である。

今回調査区の所在する黒瀬地区は、富山湾から11㎞内陸に入った神通川支流熊野川右岸に位置する。神通川とその支流の堆積によって形成された緩扇状地、氾濫平野上に立地する（図2）。調査区の北東隣は土川が流れる。現在の地形はほぼ平坦である。

熊野川は、富山市有峰の西笠山に源を発し、高頭山のふもと三枚滝を経て北流し、富山市文珠寺付近で西に流れを変え、富山平野に出る。富山市東福沢で黒川と合流し、富山市布瀬付近で神通川と合流する。急流河川のため、古くから多雨時期には豪雨による災害が発生し、治水事業として1984年（昭和59）熊野川ダムが完成した（北日本新聞社1994）。黒瀬地区でも、試掘調査等で過去の洪水堆積層が見られ、たびたび水害に見舞われたことがわかる。

神通川は、岐阜県の川上岳に源を発した渓谷が断崖絶壁を開析し、富山、岐阜県境で高原川と合流して、富山市笹津付近で富山平野に出る。山麓山腹に段丘平野や扇状地を形成しながら北流し、富山市鵜島付近で井田川と合流して富山湾に注ぐ。富山市中心部では現在はほぼ真っ直ぐに北流して富山湾に注いでいるが、かつては現在の富山中部高校の辺りで東に曲がり、富山城の北を東に流れ、現在の赤江町の辺りで大きく西に曲がって蛇行していた。この蛇行部分でしばしば水害がおこり、水害対策として明治時代に蛇行部分を短絡する分水路を開削し（馳越線）、一定量を超える洪水は分水路に流れるようにした。やがて元の本流には水が流れなくなり馳越線が本流となった。

今回調査区は黒瀬地区の南端、遺跡の南中部に位置する。調査前の現況は水田である。調査区付近の標高は約18～19ｍである。調査区の周辺一帯は、かつては水田が広がる農村地域であったが、宅地化が進み、住宅やアパートが立ち並んでいる。調査区の南隣には北陸自動車道が北西から南東に通り、富山インターチェンジが所在する。調査区の西250ｍには主要地方道富山環状線が南北に通る。調査区の東350ｍは国道41号が南北に貫く。調査区の北1㎞は国道359号線が東西に貫き、調査区の北東1.1㎞の掛尾地内で交差する。調査区の北600ｍには富山市公設地方卸売市場がある。国道周辺は交通アクセスが良いため郊外型の大型店舗や工場、倉庫が建ち並び、富山市の物流の中心を形成している。

第２節　歴史的環境（図３）

黒瀬大屋遺跡と黒瀬地区周辺一帯の遺跡について概観する。

本遺跡では、開発の進展に伴って、ほぼ毎年試掘調査や工事立会が行われ弥生時代後期から近世までの遺構・遺物を確認し、本遺跡の主要な時期は、奈良・平安時代であることが分かっている。本遺跡内での発掘調査は今回調査を除き過去3度実施している。平成15年度には遺跡南中部の共同住宅建設に伴う発掘調査で、古代の井戸・土坑を検出し、土師器・須恵器・曲物・箸状木製品、珠洲が出土した（富山県埋蔵文化財センター2004）。平成18年度には遺跡中東部の賃貸住宅建設に伴う発掘調査

で、古代ピット・溝・土坑、中世土坑を検出し、土師器・須恵器、中世土師器・青磁、近世陶磁器が出土した（富山県埋蔵文化財センター2007）。平成21年度には遺跡中西部の個人住宅建築に伴う発掘調査で、古墳時代の土坑、白鳳時代の溝、鎌倉～室町時代の溝を検出し、古墳土師器、白鳳時代の土師器・須恵器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器、中世土師器・珠洲、越中瀬戸焼が出土した。調査結果から、古墳時代には小規模な集落が営まれ、白鳳時代には集落の縁辺部と推定されている。鎌倉時代の遺構・遺物は南に近接する黒崎種田遺跡（2）との関連が推測される（市教委2014）。

本遺跡や周辺では、立地の関係上、現在までに旧石器時代の遺跡は確認していない。

本遺跡周辺では縄文時代の遺跡も分布は希薄であり、現在までに遺跡として確認できるのは縄文時代晩期に入ってからである。本遺跡の南東にある吉岡遺跡（3）では、宅地造成に伴う発掘調査で、縄文時代晩期後葉の土坑・ピット・石組炉を検出し、縄文土器・打製石斧・磨製石斧・石鏃などが出土した（市教委2002）。このほか上野井田遺跡（4）・若竹町遺跡（5）・悪王寺遺跡（6）・大利屋敷遺跡で縄文土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡は未確認である。中期に入ると経力遺跡（7）では、宅地造成に伴う発掘調査で、弥生時代中期の土坑を検出し、弥生土器が出土した（市教委2002）。本遺跡の北にある千石町遺跡では、宅地造成に伴う発掘調査で、弥生時代中期の方形周溝墓5基を検出し、弥生土器が出土した（市教委2015a・2015b）。富山市内で確認した唯一の弥生時代中期の墓域である。弥生時代後期に入ると富山市内全体では遺跡が急増するが、本遺跡周辺では空白地帯となる。本遺跡の南にある友杉遺跡（8）では、公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査で弥生時代後期後半の竪穴建物1棟が検出され、弥生土器が出土した。竪穴建物は方形プランで、床面から完形の弥生土器が潰れた状態で27点出土した（富山県文化振興財団2010）。続く古墳時代に入っても遺跡の分布は散発的で、先述の本遺跡の例のほか、友杉遺跡で古墳時代前期の土坑が1基検出され、土師器が出土した（富山県文化振興財団2010）。上新保遺跡（9）では、宅地開発に伴う発掘調査で土坑1基を検出し、6世紀代の須恵器坏と蓋が出土した（市教委2000）。朝菜町鳥ノ木遺跡（10）では試掘調査で古墳時代後期の遺構と須恵器を確認した。

古代になると本遺跡周辺では開発が進み、神通川と熊野川に挟まれた地域で大集落が形成され、確認される遺跡が急増する。本遺跡の南には任海宮田遺跡（11）・友杉遺跡・南中田D遺跡（12）吉倉B遺跡（13）、南東には上野井田遺跡、上新保遺跡、朝菜町鳥ノ木遺跡など集落遺跡が濃密に分布する。任海宮田遺跡では公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査で100棟を超える竪穴建物や掘立柱建物を検出し、「城長」「観音寺」「寺」「墾田」などの墨書土器が約800点・石帯の帯飾り・緑釉陶器・奈良三彩火舎などが出土した。庇付大型掘立柱建物の存在から、公的施設や古代寺院の存在が推測されている（富山県文化振興財団2008）。上新保遺跡でも宅地開発に伴う発掘調査で竪穴建物や掘立柱建物を100棟以上検出した。しかし公的施設の特徴を示す遺物や土錘が出土しないため、任海宮田遺跡とは違う性格の農村集落が想定される（市教委2000・2009a・2009b）。

中世に入ると本遺跡周辺一帯は徳大寺家領宮河荘に比定される。黒崎種田遺跡、任海宮田遺跡、吉倉A遺跡、吉倉B遺跡、上新保遺跡などの集落遺跡が営まれ、熊野川東側には蜷川館跡（14）や上熊野城跡・布市城跡（15）などの城館跡が立地する。黒崎種田遺跡では、駐車場造成及び工場増築に伴う発掘調査で竪穴状土坑・掘立柱建物・井戸・溝などを検出した。青磁の盤や梅瓶、多数の灯明皿など出土遺物からみて、一般庶民と異なる特定階層に関わる集落が想定される（市教委2005）

近世には調査区周辺一帯はさらに広範囲で水田開発が進んだとみられる。上新保遺跡では桃井直常の末裔とされる桃井清光家の敷地内で石垣遺構を検出し、近世屋敷跡を確認した（市教委2000）。また神通川と支流を利用した舟運も発達し、友杉にある産業展示館付近で荷揚げが行われていた。（細辻）

図3　周辺の遺跡分布図(S=1/25000)

国土地理院発行２万５千分１地形図『富山』『速星』使用

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

今回の黒瀬大屋遺跡の発掘調査（調査面積432.57㎡）は、道路部分366.49㎡をＡ区、擁壁部分66.08㎡をＢ区として調査を進めた。基本となるグリッドは、座標軸に基づいて10ｍ×10ｍのグリッドを設定した。グリッドの呼称は、分譲宅地造成工事の範囲を対象に、Ｘ軸に南から1・2・3…の数字、Ｙ軸に西からA･B･C…のアルファベットを付し、グリッド名称として使用した（図4）。

表土の掘削にはバックホウを使用して、調査担当者の立ち会いのもと表土の掘削を行った。表土の掘削後、スコップやジョレンなどの発掘道具を使用して、人力で遺物包含層の掘り下げと精査を行い、遺構の検出を実施した。遺構検出の際に出土した遺物は、取り上げ番号を付けてグリッドごとに取り上げを行った。

遺構検出後に、高所作業車と無人航空機(Unmanned aerial vehicle、以下ＵＡＶと記す)を使用して、遺構検出面の写真撮影を行った（図版2）。

その後、遺構検出概略図を作成して検出した遺構に遺構番号を付けた後、移植ゴテなどの発掘道具を使用して、人力による遺構の掘り下げをＡ区西側から開始した。土坑（SK）やピット（SP）などの遺構は半截掘り下げを行った後、建物跡（SB・SI）や溝跡（SD）などの遺構は掘り下げ区ごとに掘り下げを行った後、写真撮影と断面図を作成し、完掘掘り下げの作業を行った。また、Ａ区SI03のようにほぼ完形に近い状態で土器が出土した遺構やＡ区SX18・Ｂ区SD32のように遺物が集中して出土した遺構については、遺物の出土状況の写真撮影と詳細平面図による記録の作成後、遺物の取り上げを行い、完掘した。

また、完掘作業と合わせて遺構平面図の作成を行った。遺構平面図は、トータルステーションを使用して測量を行い、全体遺構平面図と合わせて作成した。

完掘後に、ＵＡＶを使用して、全体写真の撮影を行った（巻頭図版1・2、図版1）。

第２節　層序

基本層序は、Ａ区とＢ区で分け、Ａ区ではJ7グリッドの南側壁面、Ｂ区ではK10グリッドの南側壁面で作成した（図5・図版2）。

上層から順に、Ⅰ層:表土層（7.5GY5/1:緑灰色土）、Ⅱ層:遺物包含層a（10Y3/1:オリーブ黒色土）、Ⅲ層：遺物包含層b（10Y4/1：灰色土）、Ⅳ層：地山層（2.5Y5/4：黄褐色砂質土）、Ⅴ層：地山下の砂礫層（2.5Y5/1：黄灰色砂礫土）となる。

遺物包含層であるⅡ層とⅢ層には、1.0～5.0㎜大の炭化粒がまばらに含まれるとともに、Ⅳ層を構成する砂が含まれているのが特徴である。遺構の検出は、Ⅳ層の上面を基準に実施した。

また、調査区の西側寄りでは、全体的にⅣ層の堆積が薄く、その下にⅤ層が発達していることが理解できた。

第３節　遺構

調査遺構は，Ａ区では掘立柱建物1棟、竪穴建物2棟、溝20条、土抗37基、ピット169基、不明遺構15基（うち竪穴状遺構2基）、Ｂ区では竪穴建物1棟、溝11条、土抗9基、ピット82基、不明遺構5基（うち竪穴状遺構と思われるもの2基）であった。

以下、Ａ区とＢ区に分けて代表的な遺構の内容を記していきたい。

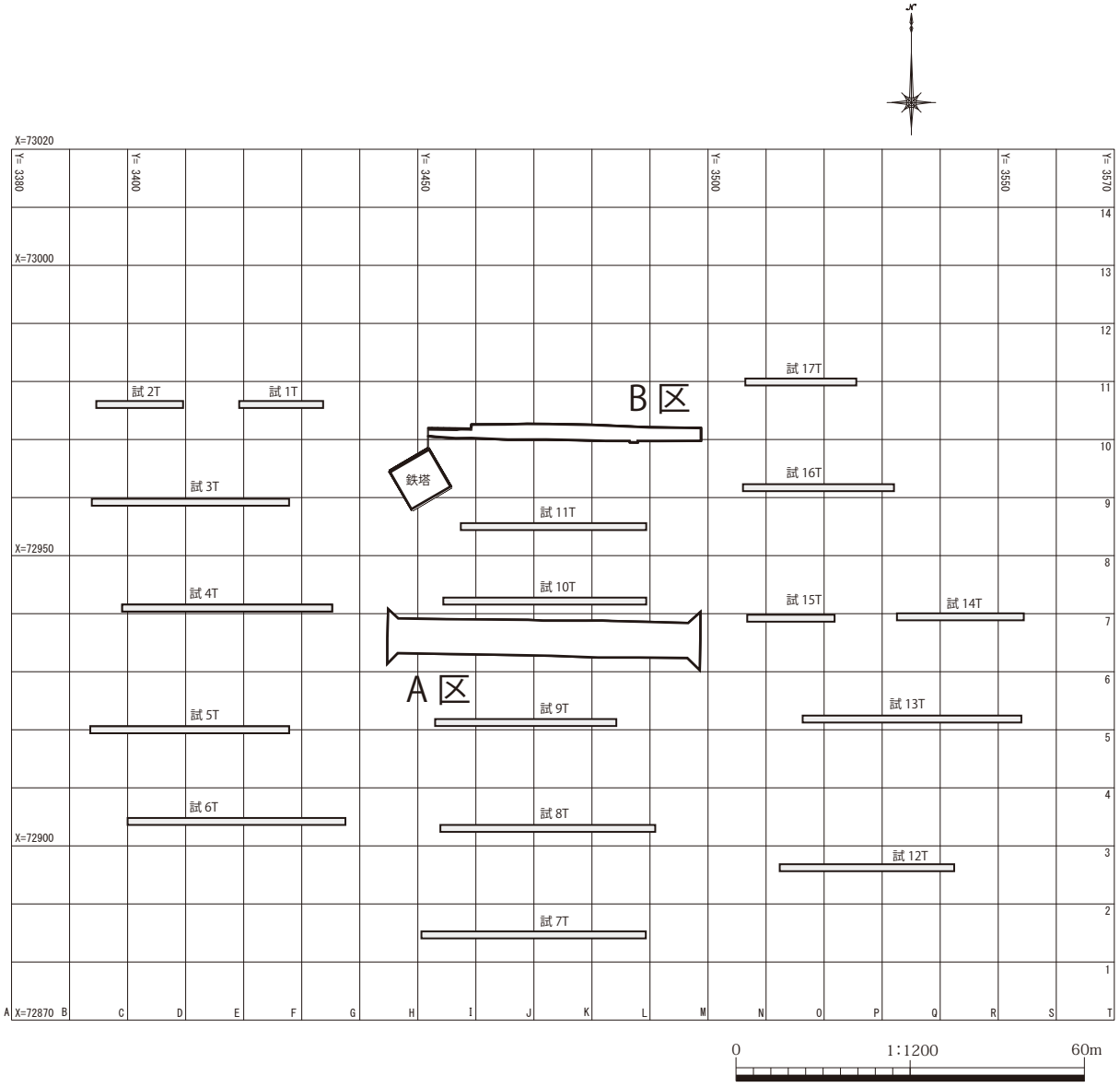


図4　調査区配置図（A区・B区）

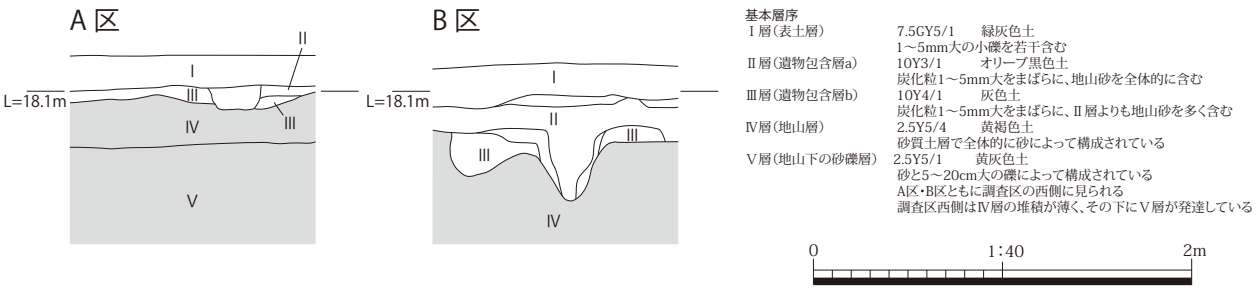


図5　基本層序図（A区南壁・B区南壁）

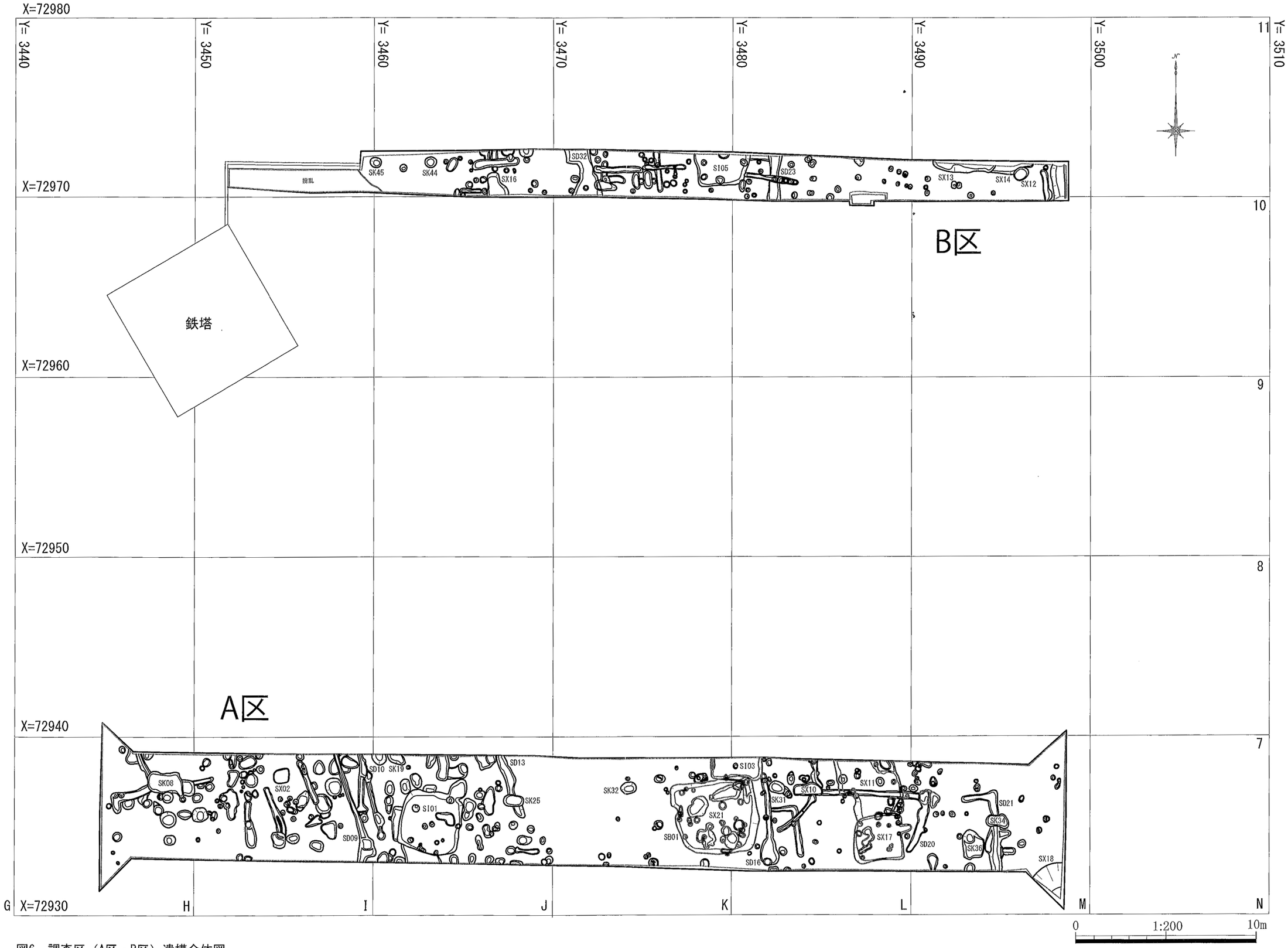


図6　調査区（A区・B区）遺構全体図

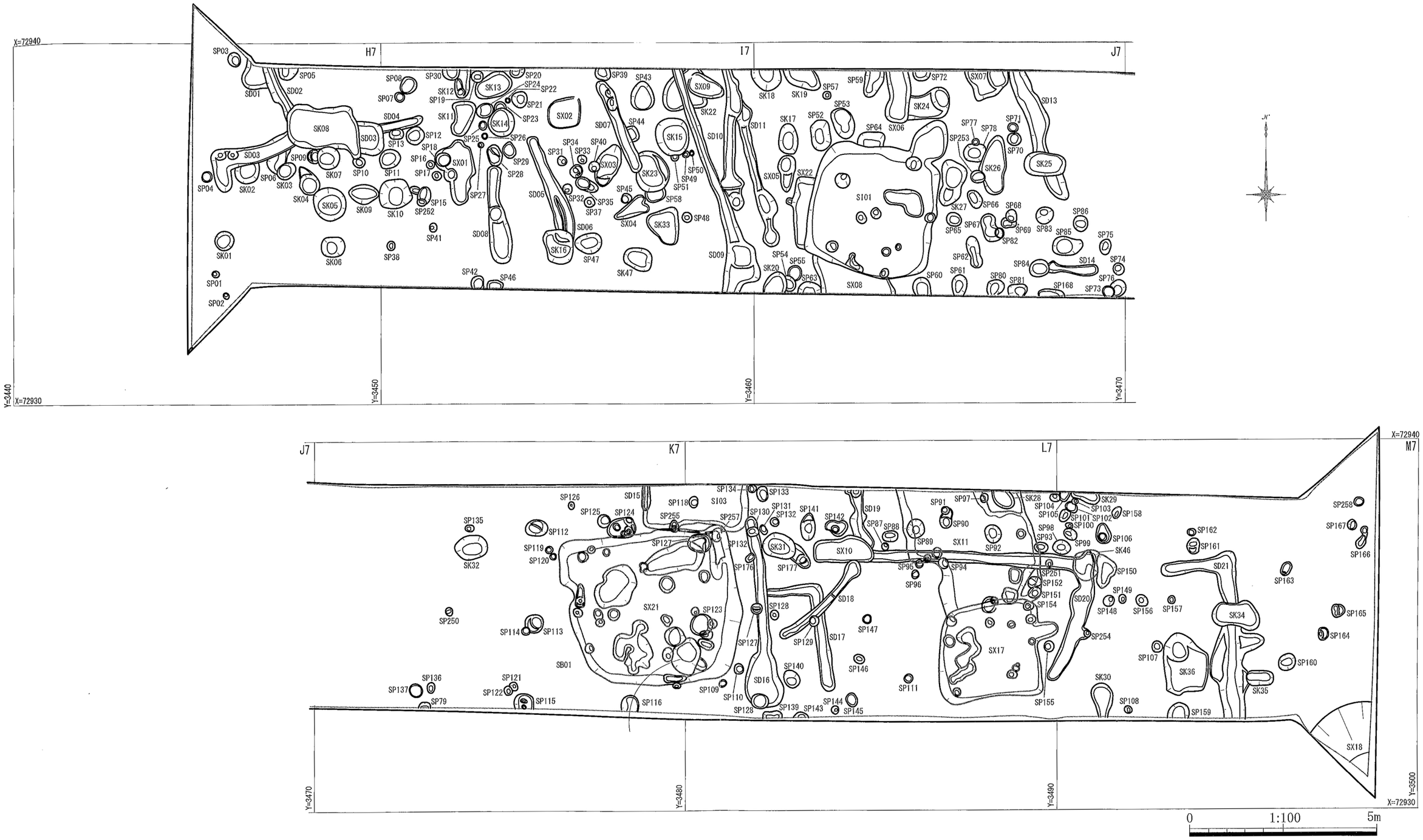

X=72940
X=72930
H7
I7
J7
K7
L7
M7
Y=3440
Y=3450
Y=3460
Y=3470
Y=3480
Y=3490
Y=3500
SP03
SP05
SD01
SD02
SP08
SP07
SP30
SK12
SK13
SP20
SP24
SP22
SP19
SP21
SK11
SK14
SP23
SX02
SD04
SK08
SD03
SP13
SP12
SP25
SP26
SP18
SP16
SX01
SP17
SP29
SP28
SP09
SP06
SK07
SP10
SP11
SP04
SK02
SK03
SK04
SK05
SK09
SK10
SP15
SP252
SP27
SD05
SP31
SP34
SP33
SP40
SX03
SP32
SP35
SP37
SP39
SP43
SP44
SK15
SK23
SP45
SP58
SP50
SP49
SP51
SX04
SK33
SP48
SD06
SK16
SP47
SK47
SD07
SD08
SP41
SP38
SK01
SK06
SP01
SP02
SP42
SP46
SX09
SK22
SD10
SD11
SK18
SK19
SP57
SP59
SP72
SX07
SD13
SK24
SP53
SP52
SK17
SP64
SX06
SP77
SP78
SP71
SP70
SP253
SK26
SK25
SX05
SX22
SI01
SP27
SP66
SP68
SP86
SP65
SP67
SP69
SP83
SP85
SP75
SP82
SP62
SP84
SD14
SP74
SP61
SP80
SP81
SP168
SP76
SP73
SD09
SP54
SP55
SP20
SP63
SX08
SP60
SP91
SP97
SK28
SP104
SP105
SP101
SP102
SP103
SP158
SK29
SP100
SP98
SP93
SP99
SP106
SK46
SP90
SP92
SX11
SP89
SP87
SP88
SD19
SX10
SP95
SP96
SP94
SP251
SP152
SP151
SP154
SP150
SP149
SP148
SP156
SP157
SD20
SP254
SP162
SP161
SD21
SP163
SP258
SP167
SP166
SK34
SP165
SP164
SP160
SP107
SK36
SK35
SP159
SP108
SK30
SP155
SX17
SP111
SP146
SP147
SP129
SD17
SD18
SP128
SP127
SP176
SP177
SP134
SP133
SP130
SP131
SP132
SP141
SP142
SI03
SP118
SP255
SP257
SP126
SP125
SP124
SD15
SP135
SP112
SP119
SP120
SK32
SP127
SX21
SP123
SP250
SP114
SP113
SB01
SP136
SP137
SP79
SP121
SP122
SP115
SP116
SP109
SP110
SP128
SP139
SP143
SP144
SP145
SD16
SP140
SX18
0
1:100
5m

図7　A区遺構全体図

１　Ａ区

掘立柱建物・溝

SB01・SD16（図8　図版3）

K7～L7グリッドに位置し、調査区外（南）へ延びる可能性がある。

SB01は西のSP112・113・115、中央のSP124・116、東のSP117・123の柱穴で構成される掘立柱建物である。東の南隅に位置すべき柱穴は確認できなかったが、東の柱穴列の位置がやや南寄りに配置されることから、調査区外に位置する可能性がある。規模は東西5.03ｍ×南北5.19ｍを測り、平面形は東の柱穴列の位置関係から正方形ではなく不整方形でやや歪んでいる。。柱穴間の距離は平均約1.80ｍ（約6尺）で、2間×2間構成の小型の掘立柱建物と考えられるが、調査区外（南）へと延びる可能性もある。柱穴の規模は、全体規模が判明したSP112・113・124・117・123の平均で長軸0.63ｍ×短軸0.51ｍ、深さ0.19ｍとなる。柱穴の堆積土は、掘り方下層に炭化粒を僅かに含む5Y5/2灰オリーブ色土、上層に炭化粒を少量含む5Y5/3灰オリーブ色土が主体となり、柱痕には炭化粒を僅かに含む5Y4/1灰色土であった。また、SB01の下部中央部東寄りの位置に、SX21が存在するが、出土遺物からSX21→SB01の変遷が窺える。

また、SB01の東のSP117・123と約1.05ｍの間隔をあけて、東に柱穴列に沿ってSP130・127・138の小規模なピット列と溝SD16が確認できた。SP130・127・138とSD16は、その位置関係から、SB01に伴う遺構である可能性が考えられる。

SP130・127・138間の距離はSB01の柱穴間の距離とほぼ等しく、ピット規模は平均で長軸0.36ｍ×短軸0.30ｍ、深さ0.16ｍとなる。SB01の柱穴規模と比べると小規模である。

SD16はSP130・127・138と軸方向と長さ（5.14ｍ）がほぼ等しい溝で、SP130・127・138と重複する。平面形は南が水溜まり状に幅広に膨らんでいるが、北から中央部は狭長で幅0.30ｍ、深さ0.09ｍを測る。高低差も含めて流路であれば、北から南に向かって水の流れがあったと考えられる。

SB01とSD16の年代は、出土遺物から9世紀後半～末頃に相当するといえる。遺物年代の判断から、同年代であった可能性が考えられる。位置関係からSP130・127・138のピット列はSB01の東に付く廂、SD16は廂に伴う溝であった可能性が考えられる。SB01は、SD16の形状から判断して、2間×2間構成の一面廂（片廂）掘立柱建物と想定され、廂の位置から桁行は南北方向、梁行は東西方向と考えられる。機能・用途については、住居・倉庫以外の施設であった可能性が高い。

竪穴建物

SI01（図9　図版4）

J7グリッドに位置する。

SI01はカマドを付設する竪穴建物である。平面形は隅丸方形で、規模は東西3.35ｍ×南北3.50ｍ、深さ0.12ｍを測る。堆積土は炭化粒を多量に含む10YR3/1オリーブ黒色土が主体であった。全体的に掘り込みが浅く、東西の壁面はほぼ直に近い状態の傾斜であるが、北壁面は緩やかな傾斜で床面へと続いている。底面には若干の凹凸が見られたがほぼ平坦で、P2～10のように平面円形のピットのほかに、P1のように平面不整形である程度の範囲を持つ凹みが見られた。また、完掘の際に底面のほぼ半分に近い南では、Ｖ層の砂礫土が露出した状態となり、底面の凸凹感が強く感じられた。カマドは北壁面の東寄りの隅付近に付設されていたが、焼土を含むN4/灰色土や5YR4/6赤褐色土の層の確認ができた程度で、残存状態が悪くその構造は不明である。カマドの残存規模は長軸1.11ｍ×短軸0.93ｍを測る。また、残存状態は良くなかったがP8・9・10が支柱穴と考えられ、本来はP1を含めて4本支柱構造の竪穴建物であったと考えられる。

年代は、出土遺物から8世紀末頃～9世紀前半に相当する。

SI03（図10　図版4）

K7～L7グリッドに位置する。全体の半分以上が調査区外（北）となる。

SI03は平面推定方形の竪穴建物で、調査できたのは全体の半分以下といえる。規模は東西2.86ｍ×残存南北1.28ｍ、深さ0.23ｍを測る。全体的に掘り込みが深く、東西の壁面は傾斜しながらもやや直に近い状態で、平坦な底面へと続いている。南壁の中央付近には、棚状となる平坦な空間が認められた。堆積土は炭化粒がまばらに含まれた2.5Y5/3黄褐色土や2.5Y5/2暗灰黄色土が主体で、SI01やSX21とは異なるものであった。壁面でのカマドの付設は認められず、調査区外にある可能性が考えられる。底面での支柱穴は確認できなかったが、底面直上から遺物（21・25・26）が出土した。また、南壁に沿ってSP255・257の2つの平面楕円形を呈するピットが確認できたが、本遺構に伴うものかは不明である。南の一部分でSX21と重複するが、出土遺物の年代から、本遺構の方が新しいと判断できた。

年代は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初めに相当する。

溝

SD09・10・11（図11）

I7～J7グリッドに位置する。SD09は調査区外の南北へ、SD10は調査区外の北へと延びる。

SD09・10・11は南北方向に延びる狭長な溝で、底面はいずれも丸底であった。SD09の規模は残存長6.15ｍ、幅0.28ｍ、深さ0.21ｍを測る。南でやや湾曲して楕円状に広がり、一部で幅広（幅0.98ｍ）となる。堆積土は炭化粒を僅かに含む2.5Y4/1黄灰色土や2.5Y5/2暗灰黄色土であった。SD10・11は調査区のほぼ中央付近南寄りの地点で消え、SD10の規模は残存長3.77ｍ、幅0.31ｍ、深さ0.16ｍ、SD11の規模は残存長4.02ｍ、幅0.26ｍ、深さ0.18ｍを測る。いずれも堆積土は炭化粒を僅かに含み、SD10は2.5Y3/1黒褐色土、SD11は5Y5/2灰オリーブ色土であった。側面肩部の検出状態から、SD11→SD10→SD09の変遷が窺えた。

年代は、出土遺物から9世紀末頃～10世紀初めに相当する。

SD15（図11）

K7グリッドに位置する。調査区外の北へと延びる。

SD15は南北方向に延びる狭長な溝で、底面は丸底である。規模は残存長0.64ｍ、幅0.23ｍ、深さ0.08ｍを測る。堆積土は炭化粒を僅かに含む5Y6/2灰オリーブ色土で、須恵器の甕胴部破片が1点(29)出土した。SI03と重複するが、SI03より新しいと判断できた。

SI03の年代から、9世紀後半～10世紀初め以降に相当すると考えられる。

土坑

SK17（図12）

J7グリッド、SI01の西に位置し、南隣にSX05がある。

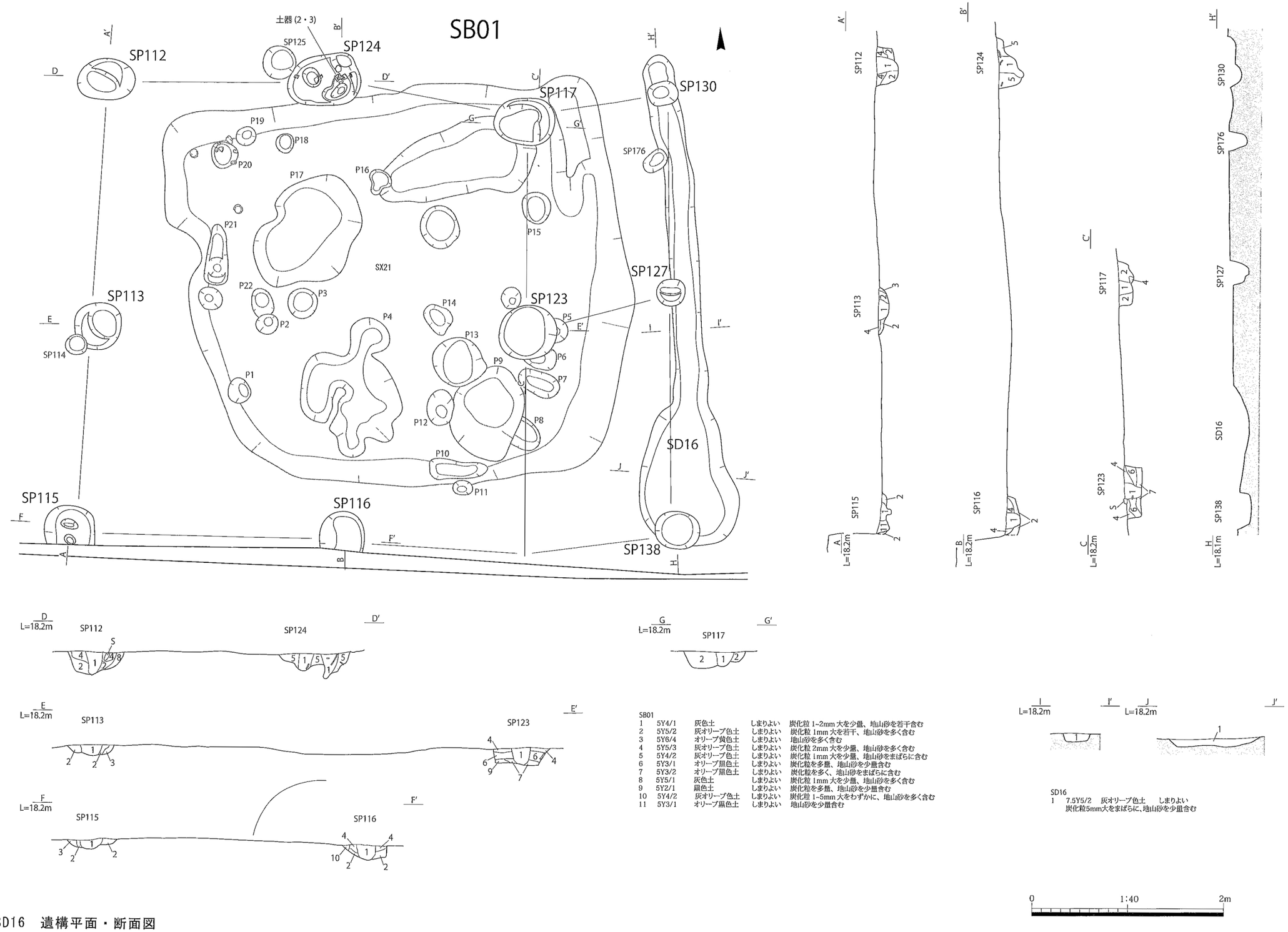
SK17は南北に長軸をとる平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.81ｍ、短軸0.52ｍ、深さ0.29ｍを測る。側面はほぼ直に近い状態のしっかりとした掘り込みで、底面は平坦となる。堆積土は側面付近に炭化粒を含む2.5Y5/1黄灰色土、中央部に炭化粒と焼土粒を含む2.5Y4/1黄灰色土となる。

年代は、出土遺物から9世紀前半～中頃に相当する。

SK19（図12）

J7グリッドに位置する。調査区外（北）へと広がる。

SK19は東西に長軸をとる平面推定楕円形の土坑で、規模は残存長軸1.18ｍ、残存短軸0.54ｍ、深



SB01

1	5Y4/1	灰色土	しまりよい	炭化粒 1~2mm 大を少量、地山砂を若干含む
2	5Y5/2	灰オリーブ色土	しまりよい	炭化粒 1mm 大を若干、地山砂を多く含む
3	5Y6/4	オリーブ黄色土	しまりよい	地山砂を多く含む
4	5Y5/3	灰オリーブ色土	しまりよい	炭化粒 2mm 大を少量、地山砂を多く含む
5	5Y4/2	灰オリーブ色土	しまりよい	炭化粒 1mm 大を少量、地山砂をまばらに含む
6	5Y3/1	オリーブ黒色土	しまりよい	炭化粒を多量、地山砂を少量含む
7	5Y3/2	オリーブ黒色土	しまりよい	炭化粒を多く、地山砂をまばらに含む
8	5Y5/1	灰色土	しまりよい	炭化粒 1mm 大を少量、地山砂を多く含む
9	5Y2/1	黒色土	しまりよい	炭化粒を多量、地山砂を少量含む
10	5Y4/2	灰オリーブ色土	しまりよい	炭化粒 1~5mm 大をわずかに、地山砂を多く含む
11	5Y3/1	オリーブ黒色土	しまりよい	地山砂を少量含む

図8　SB01・SD16　遺構平面・断面図

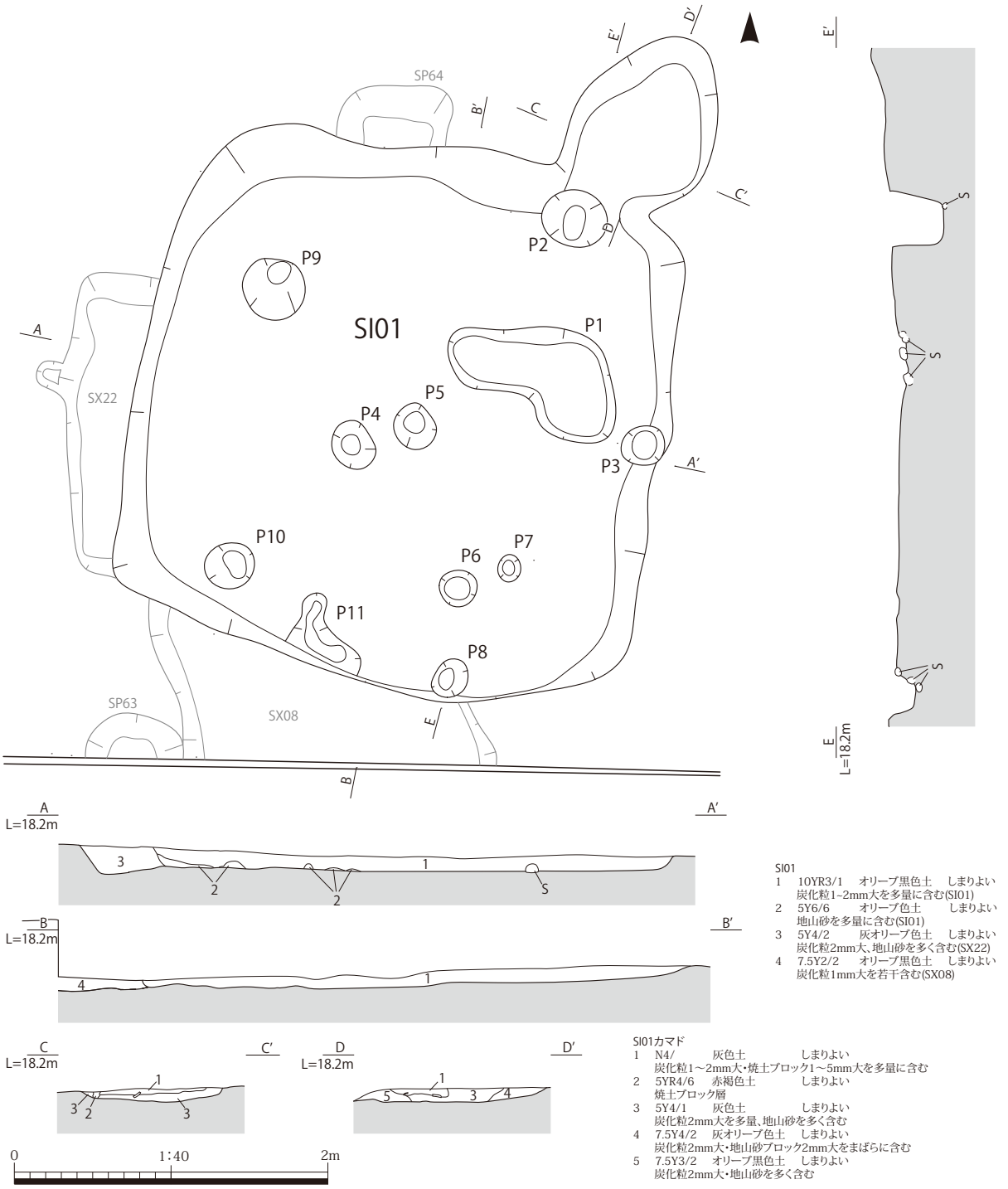


図9 SI01 遺構平面・断面図

さ0.23ｍを測る。側面はほぼ直に近い状態のしっかりとした掘り込みで、底面はやや丸みをおびる。堆積土はいずれも炭化粒を含み、上層から2.5Y5/1黄灰色土、中層に2.5Y4/1黄灰色土、下層に5Y5/3灰オリーブ色土が堆積し、中層から下層にかけて遺物が出土した。

年代は、出土遺物から9世紀後半に相当する。

SK27（図12）

J7グリッド、SI01の東に位置する。

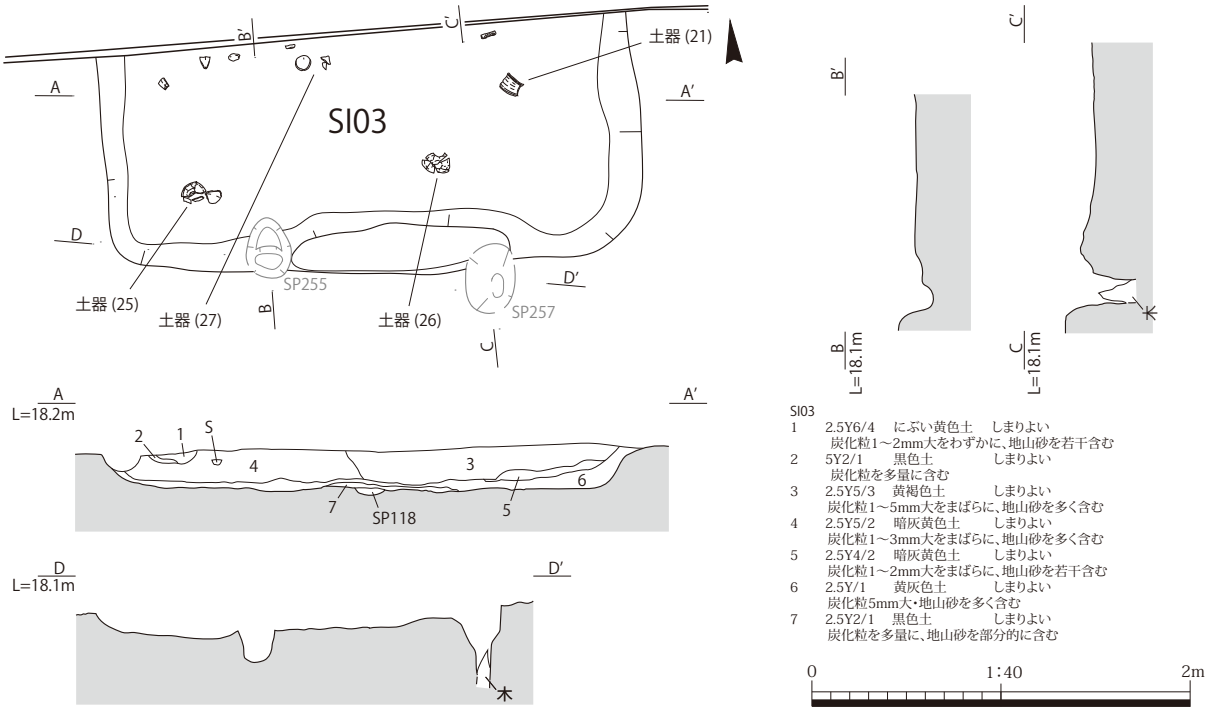


図10　SI03　遺構平面・断面図

SK27は南北に長軸をとる平面双円形の土坑で、規模は長軸1.20ｍ、短軸0.68ｍ、深さ0.27ｍを測る。側面はほぼ直に近い状態のしっかりとした掘り込みで、底面は南北2段状で丸底となる。堆積土は炭化粒を含む2.5Y3/1黒褐色土が主体で、石（5.0～8.0㎝）が多量に含まれていた。

年代は、出土遺物から8世紀後半～末頃に相当する。

SK31（図12　図版4）

L7グリッド、SB01・SX21の東に位置する。

SK31は東西に長軸をとる平面楕円形の土坑で、規模は長軸0.90ｍ、短軸0.64ｍ、深さ0.21ｍを測る。側面は緩やかな丸みを持った傾斜で、丸底の底面へと続いている。堆積土は土器片と炭化粒を含む7.5Y3/1オリーブ黒色土と炭化粒を含む5Y4/1灰色土が主体で、底面付近に炭化粒を含む5Y5/2灰オリーブ色土が堆積する。SP177と重複するが、SP177より新しいと判断できた。

年代は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初めに相当する。

ピット

SP72（図12）

J7グリッドに位置する。全体の半分が調査区外（北）となる。

SP72は平面推定円形のピットで、規模は東西0.46ｍ、残存南北0.21ｍ、深さ0.14ｍを測る。底面は平坦である。堆積土は上層に炭化粒を含む5Y5/1灰色土、下層に5Y5/3灰オリーブ色土であった。底面付近から須恵器蓋（40）が出土した。

年代は、出土遺物から8世紀後半～9世紀前半に相当する。

SP97（図12）

L7グリッドに位置する。

SP97は平面推定円形のピットで、規模は直径0.23ｍ、深さ0.21ｍを測る。底面は東から西に向かって斜めに低くなる。堆積土は上層に炭化粒を含む2.5Y5/1黄灰色土、下層に炭化粒を僅かに含

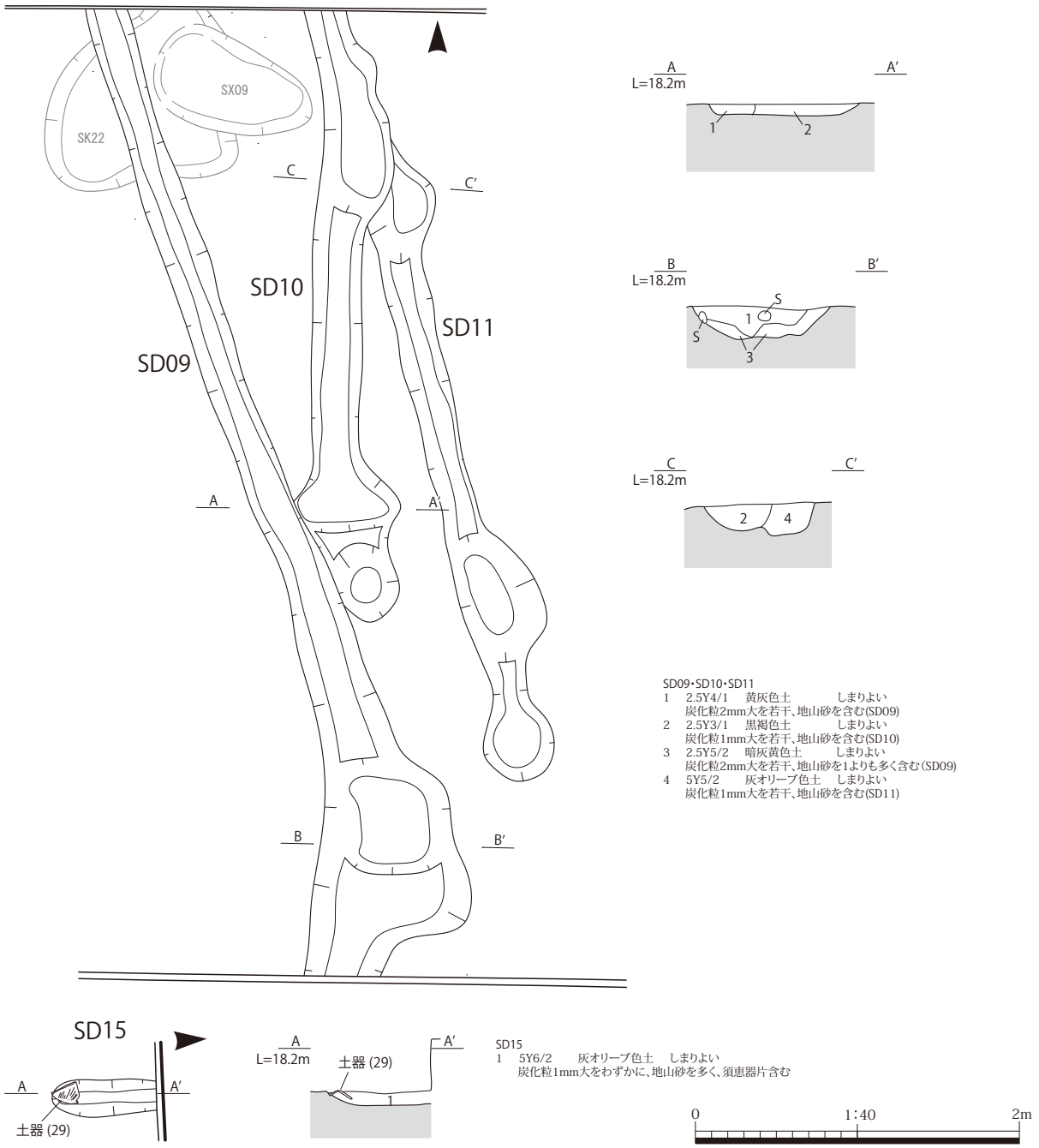


図11　SD09・10・11・15　遺構平面・断面図

む2.5Y3/1黒褐色土であった。SX11と重複するが、SX11より新しいと判断できた。

年代は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初めに相当する。

SP106（図12）

M7グリッド、SX11の東に位置する。

SP106は南北に長軸をとる平面楕円形のピットで、規模は長軸0.54ｍ、短軸0.42ｍ、深さ0.17ｍを測る。堆積土は炭化粒を含むN4/灰色土と5Y6/3オリーブ黄色土が主体となる。底面は2段状となる丸底で、南寄りの地点が平面円形状に一段低くなり、柱痕状を呈する。

年代は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初めに相当する。

SP142（図 12）

L7グリッドに位置する。

SP142は東西に長軸をとる平面不整楕円形のピットで、規模は長軸0.60ｍ、短軸0.40ｍ、深さ0.28ｍを測る。堆積土は炭化粒を僅かに含む5Y3/2オリーブ黒色土と5Y5/2灰オリーブ色土が主体となる。底面はSP106と同様に2段状となる丸底で、中央の地点が平面円形状に一段低くなり、柱痕状を呈する。

年代は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初めに相当する。

SP177（図 12　図版 4）

L7グリッドに位置する。

SP177は南北に長軸をとる平面細長楕円形のピットと推定される。規模は残存長軸0.52ｍ、短軸0.42ｍ、深さ0.24ｍを測る。堆積土は土器片を含み炭化粒を僅かに含む5Y4/1灰色土と炭化粒を僅かに含む5Y2/1黒色土が主体となる。底面は丸底で、南寄りの地点が一段低くなる。SK31と重複するが、SK31より古いと判断できた。

年代は、出土遺物から8世紀末頃～9世紀前半に相当する。

不明遺構

SX02（図 12）

I7グリッドに位置する。

SX02はⅢ層中で確認できた性格不明の遺構で、平面は隅丸方形を呈する。浅い掘り込みで、底面は平坦である。規模は東西0.88ｍ、南北0.80ｍ、深さ0.04ｍを測る。堆積土は上層に炭化粒を多量に含む10YR3/2黒褐色土と焼土を含む2.5Y3/1黒褐色土、下層に炭化粒を含む2.5Y4/1黄灰色土で、上層中から土師器の破片がまとまって出土した。

年代は、出土遺物から9世紀中頃～後半に相当する。

SX03（図 13）

I7グリッドに位置する。

SX03は南北に長軸をとる平面細長楕円形の遺構で、土坑とも考えられる。規模は長軸1.17ｍ、短軸0.63ｍ、深さ0.18ｍを測る。側面は緩やかな傾斜で、平坦で広さのある底面へと続く。底面は2段状で、南が一段高くなる。堆積土は炭化粒を含む2.5Y5/2暗灰黄色土が主体であるが、底面付近に炭化粒と焼土を多く含む2.5Y3/1黒褐色土が認められた。SP40と重複するが、本遺構の方が古いと判断できた。

年代は、出土遺物から8世紀末頃に相当する。

SX05（図 12）

J7グリッド、SI01の西に位置し、北隣にSK17がある。

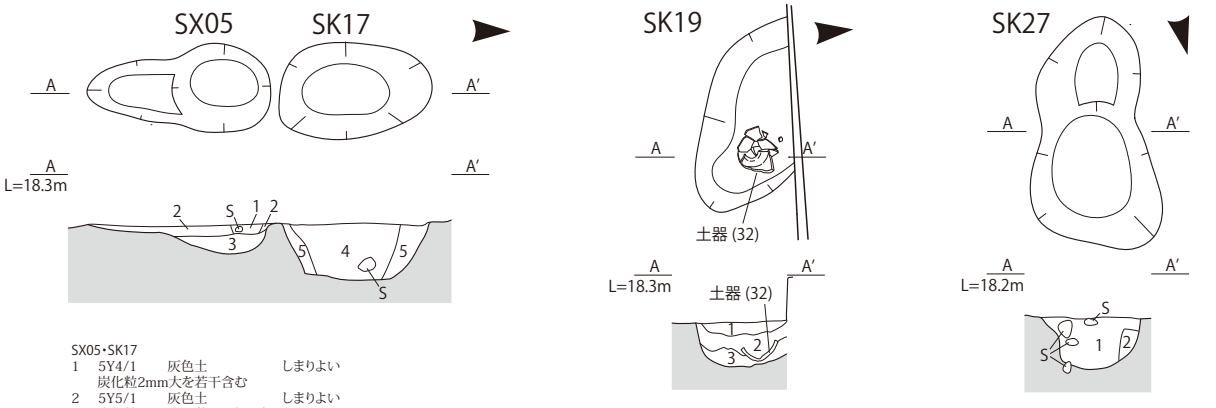
SX05は南北に長軸をとる平面細長不整楕円形の性格不明の遺構である。規模は長軸0.97ｍ、短軸0.47ｍ、深さ0.15ｍを測る。底面は2段状で南が一段高くなって平坦となるが、北は平面円形状で側面はほぼ直で下がり、丸底の底面へと続く。底面付近には炭化粒と焼土を含む5Y3/1オリーブ黒色土が堆積する。

遺物から年代を特定することは困難であるが、概ね9世紀代の遺構と考えられる。

SX06（図 13）

J7グリッド、SI01の北に位置し、調査区外（北）へと広がる。

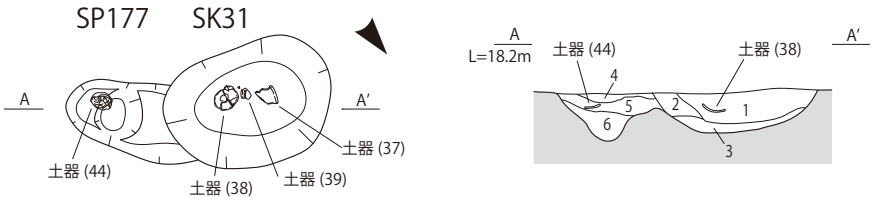
SX06は南北に延びる溝状を呈する性格不明の遺構である。規模は残存南北1.34ｍ、幅0.60ｍ、深さ0.23ｍを測る。東西の側面はほぼ直で下がり、底面は平坦である。堆積土は上層に炭化粒を少量



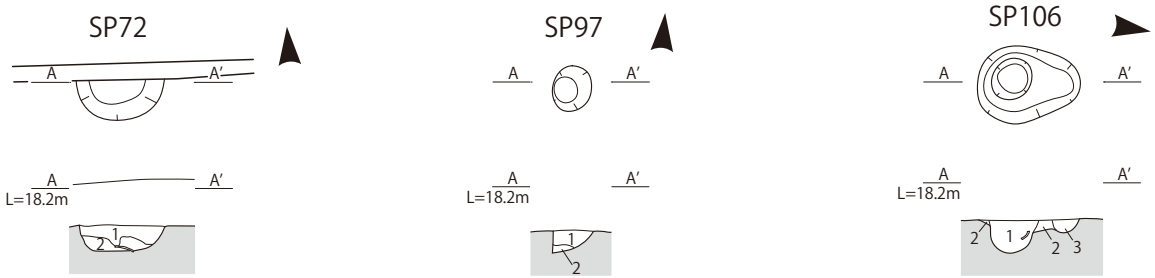
SX05・SK17
1　5Y4/1　灰色土　しまりよい
炭化粒2mm大を若干含む
2　5Y5/1　灰色土　しまりよい
炭化粒1mm大を若干、地山砂を含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりよい
炭化粒2mm大・焼土粒1mm大を含む
4　2.5Y4/1　黄灰色土　しまりよい
炭化粒2mm大・焼土粒1mm大を含む
5　2.5Y5/1　黄灰色土　しまりよい
炭化粒1mm大・地山砂を含む

SK19
1　2.5Y5/1　黄灰色土　しまりよい
炭化粒1mm大を若干含む
2　2.5Y4/1　黄灰色土　しまりよい
炭化粒1mm大・地山砂ブロック2mm大を若干含む
3　5Y5/3　灰オリーブ色土　しまりよい
炭化粒5mm大を含む

SK27
1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりよい
炭化粒2mm大を若干、地山砂をまばらに、
石5～8cm大を多量に含む
2　2.5Y5/3　黄褐色土　しまりよい
炭化粒1mm大を若干、地山砂を多く含む



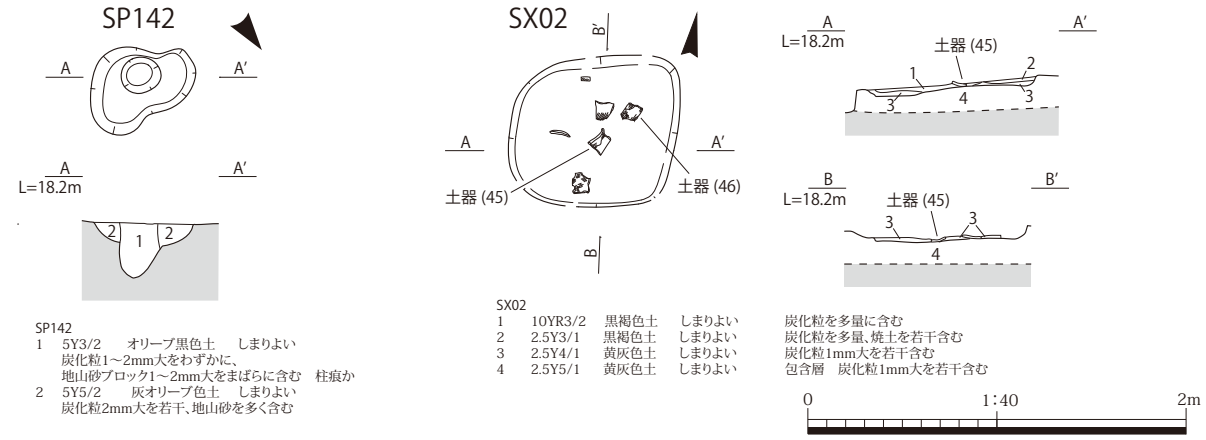
SP177・SK31
1　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりよい　炭化粒3～5cm大を若干、地山砂をわずかに、土器を含む(SK31)
2　5Y4/1　灰色土　しまりよい　炭化粒5mm大を若干、地山砂を部分的に含む(SK31)
3　5Y5/2　灰オリーブ色土　しまりよい　炭化粒2mm大をわずかに、地山砂を多く含む(SK31)
4　5Y2/2　オリーブ黒色土　しまりよい　地山砂をまばらに含む(SP177)
5　5Y4/1　灰色土　しまりよい　炭化粒3mm大をわずかに、地山砂を部分的に、土器を含む(SP177)
6　5Y2/1　黒色土　しまりよい　炭化粒3mm大をわずかに、地山砂をまばらに含む(SP177)



SP72
1　5Y5/1　灰色土　しまりよい
炭化粒1mm大を若干、地山砂を少量含む
2　5Y5/3　灰オリーブ色土　しまりよい
地山砂を多量に含む

SP97
1　2.5Y5/1　黄灰色土　しまりよい
炭化粒2mm大を若干、地山砂をわずかに含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりよい
炭化粒2mm大をわずかに含む

SP106
1　N4/　灰色土　しまりよい
炭化粒2mm大をわずかに、
地山砂ブロック1～3mm大を含む　柱痕か
2　5Y6/3　オリーブ黄色土　しまりよい
炭化粒2mm大を若干、地山砂を多く含む
3　5Y5/1　灰色土　しまりよい
地山砂をまばらに含む



SP142
1　5Y3/2　オリーブ黒色土　しまりよい
炭化粒1～2mm大をわずかに、
地山砂ブロック1～2mm大をまばらに含む　柱痕か
2　5Y5/2　灰オリーブ色土　しまりよい
炭化粒2mm大を若干、地山砂を多く含む

SX02
1　10YR3/2　黒褐色土　しまりよい　炭化粒を多量に含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりよい　炭化粒を多量、焼土を若干含む
3　2.5Y4/1　黄灰色土　しまりよい　炭化粒1mm大を若干含む
4　2.5Y5/1　黄灰色土　しまりよい　包含層　炭化粒1mm大を若干含む

図12　SK17・19・27他　遺構平面・断面図

含む2.5Y5/1黄灰色土、中層に炭化粒を若干含む5Y4/1灰色土、下層に炭化粒を多量に含むN3/暗灰色土となる。

年代は、出土遺物から8世紀後半に相当する。

SX09（図13）

I7グリッドに位置する。

SX09は東西に長軸をとる平面細長楕円形の遺構で、性格は不明である。規模は長軸1.02m、短軸0.58m、深さ0.14mを測る。底面はやや南に傾斜する。堆積土は炭化粒を含む5Y4/1灰色土が主体で、土師器の破片がまとまって出土した。SK22と重複するが、本遺構の方が新しいと判断できた。

年代は、出土遺物から8世紀後半～9世紀前半に相当する。

SX10（図13）

L7グリッドに位置する。

SX10は東西に長軸をとる平面不整楕円形の遺構で、性格は不明である。規模は長軸1.63m、短軸0.71m、深さ0.07mを測る。掘り込みは浅く、底面には若干の凹凸が見られるがほぼ平坦である。堆積土は土器片を含み炭化粒をまばらに含む7.5Y3/1オリーブ黒色土である。重複するSD19・20よりは新しく、SD18より古いと判断できた。

年代は、出土遺物から9世紀末頃～10世紀初めに相当する。

SX11（図14　図版5）

L7グリッドに位置する。調査区外（北）へと広がる。

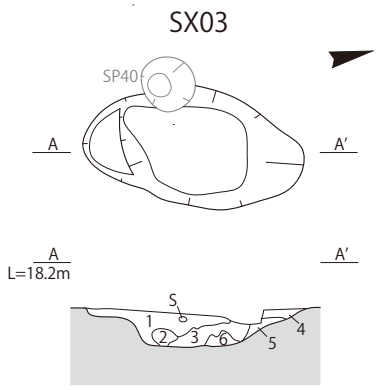
SX11は平面不整長方形を呈する竪穴状遺構と考えられるが、平面形状が南北方向に延びる溝状にも見える不整形であったため不明遺構として扱った。規模は東西3.40m×残存南北3.68m、深さ0.21mを測る。堆積土は土器片を多く含み炭化粒をまばらに含んだ2.5Y4/1黄灰色土の下に炭化粒を多量に含んだ2.5Y3/1黒褐色土であった。東面の南端部と北調査区壁面に接する地点に棚状の空間が認められた。東西の側面はほぼ直に近い状態で下がり、底面は平坦である。底面にはP5～8のように平面円形で小規模な凹み状を呈する穴のほかに、南東隅に集中したP1～3のように平面楕円形でやや大きめの穴（P3:長軸0.41m×短軸0.35m、深さ0.18m）が見られた。南の側面でSX17と重複するが、側面肩部の検出状態から、本遺構の方がSX17よりも古いと判断できた。

年代は、出土遺物から9世紀後半に相当する。

SX17（図14　図版5）

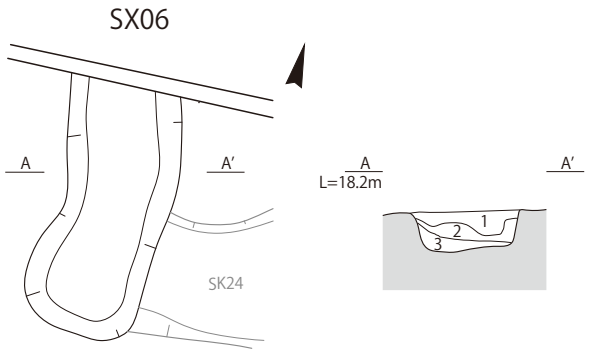
L7グリッドに位置する。

SX17は平面方形の竪穴状遺構と考えられるが、東壁の一部がカマドのように突出する平面形状を呈する。規模は東西2.65m×南北2.55m、深さ0.10mを測る。全体的に掘り込みが浅くて残存状態が悪く、壁面から僅かな傾斜で底面へと続く。堆積土は炭化粒をまばらに含んだ5Y5/2灰オリーブ色土で、突出する地点では炭化粒を多量に含んだ5Y2/1黒色土が堆積していた。底面はほぼ平坦であるが、P1のように平面円形でしっかりとした掘り込みを持つ小規模な穴（直径0.27m、深さ0.22m）のほかに、P3のように平面不整形である程度の範囲を持つ凹みやP2・4～10のように平面円形で小規模な凹みが見られた。P6・10は、突出部がカマドであれば、その袖部に相当する位置であることから、カマドに伴う袖石などの痕跡である可能性も考えられる。しかしながら、残存状態が悪く、突出部がカマドになるかどうかは不明であった。竪穴建物と考えると、P2・5・8・9などが、支柱穴の痕跡である可能性も考えられる。また、北壁がSX11と重複するが、壁面肩部の検出状態から、本遺構の方がSX11よりも新しいと判断できた。



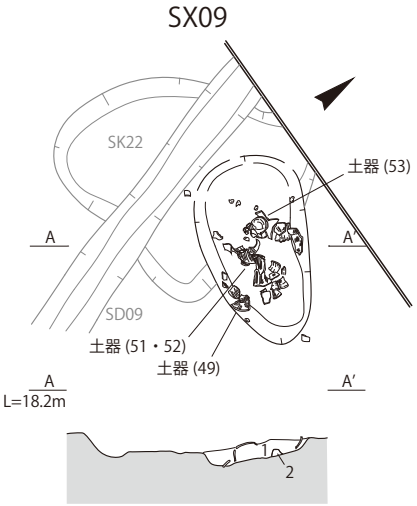
SX03

1	2.5Y5/2	暗灰黄色土	しまりよい	炭化粒１mm大･地山砂を含む
2	2.5Y3/1	黒褐色土	しまりよい	炭化粒を多量、焼土粒2mm大を多く含む
3	2.5Y6/2	灰黄色土	しまりよい	炭化粒1mm大をまばらに含む
4	2.5Y2/1	黒色土	しまりよい	炭化粒による層
5	2.5Y7/2	灰黄色土	しまりよい	炭化粒1mm大を若干含む
6	2.5Y6/4	にぶい黄色土	しまりよい	炭化粒5mm大を含む



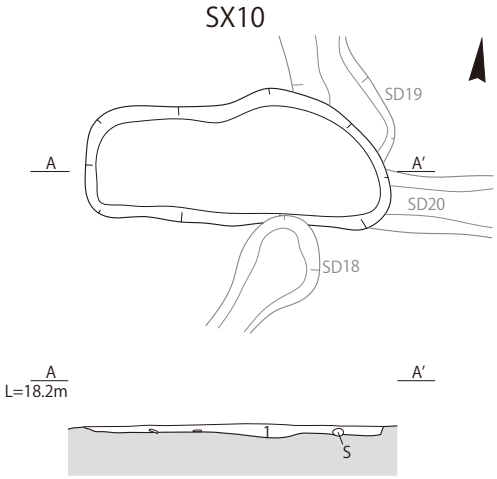
SX06

1	2.5Y5/1	黄灰色土	しまりよい	炭化粒2mm大を少量、地山砂を含む
2	5Y4/1	灰色土	しまりよい	炭化粒5mm大を若干、地山砂を少量含む
3	N3/	暗灰色土	しまりよい	炭化粒を多量、地山砂を若干含む



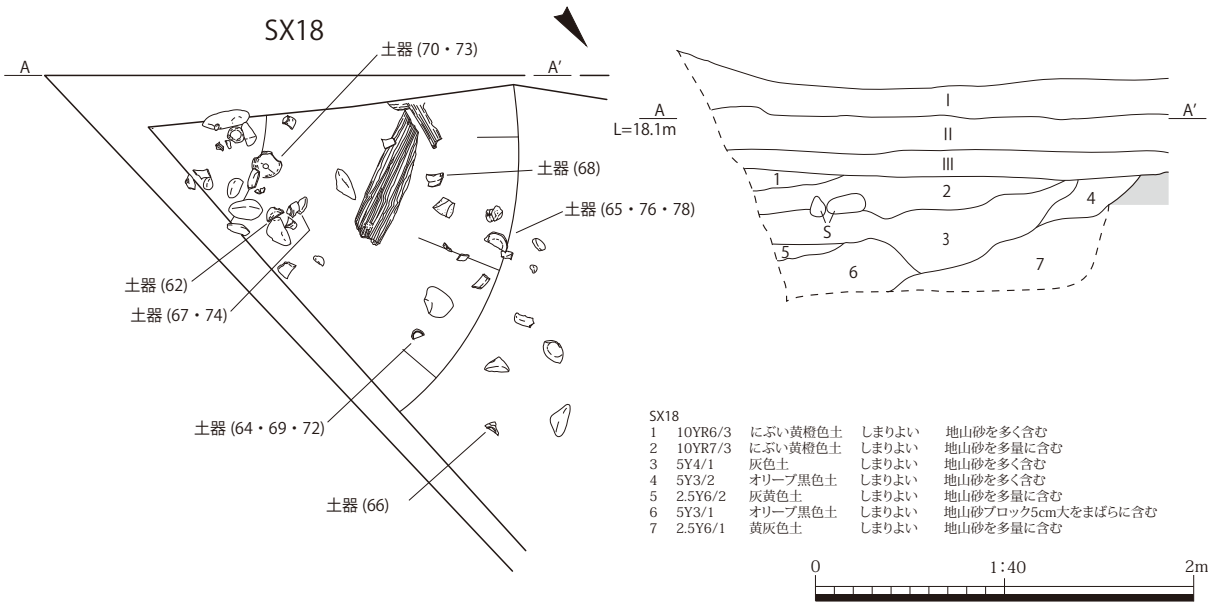
SX09

1	5Y4/1	灰色土	しまりよい	炭化粒2mm大･地山砂をまばらに含む
2	5Y5/3	灰オリーブ色土	しまりよい	地山砂を多量に含む



SX10

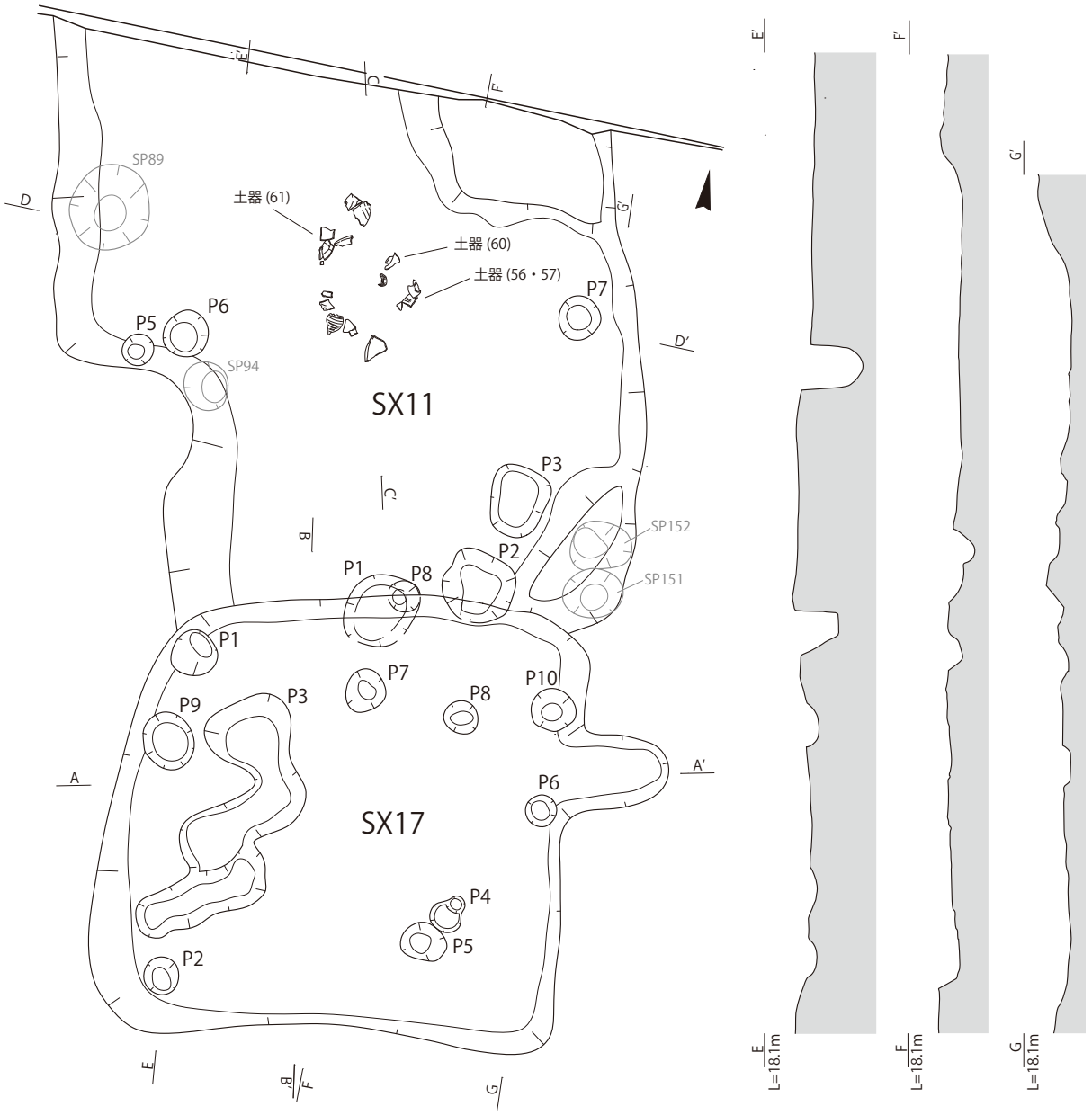
1	7.5Y3/1	オリーブ黒色土	しまりよい
	炭化粒1～5mm大をまばらに、地山砂をわずかに、土器を含む		

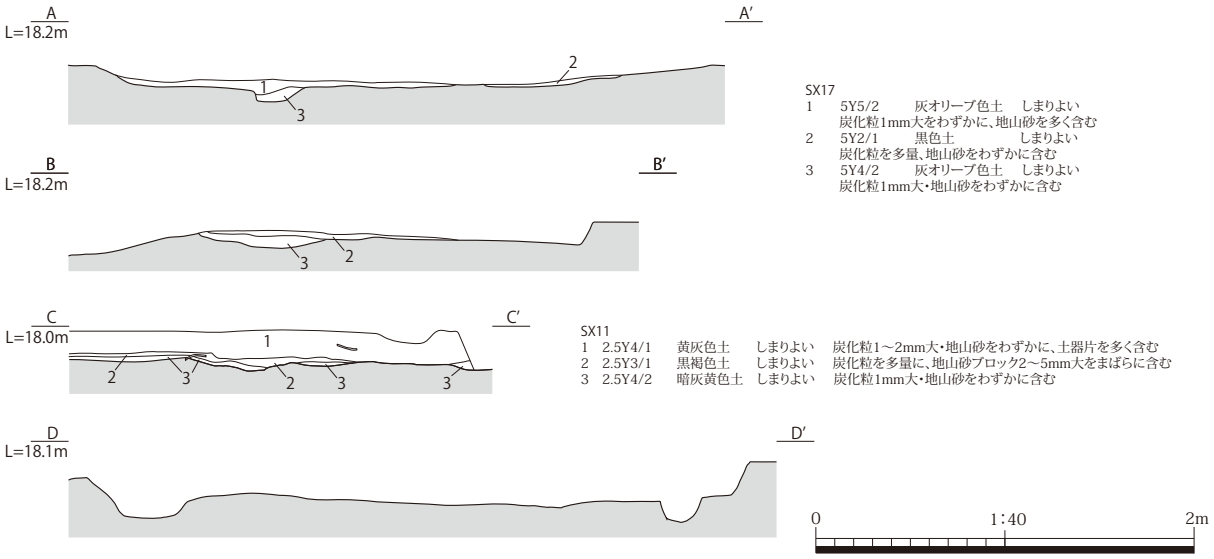


SX18

1	10YR6/3	にぶい黄橙色土	しまりよい	地山砂を多く含む
2	10YR7/3	にぶい黄橙色土	しまりよい	地山砂を多量に含む
3	5Y4/1	灰色土	しまりよい	地山砂を多く含む
4	5Y3/2	オリーブ黒色土	しまりよい	地山砂を多く含む
5	2.5Y6/2	灰黄色土	しまりよい	地山砂を多量に含む
6	5Y3/1	オリーブ黒色土	しまりよい	地山砂ブロック5cm大をまばらに含む
7	2.5Y6/1	黄灰色土	しまりよい	地山砂を多量に含む

図13　SX03・06・09・10・18　遺構平面・断面図

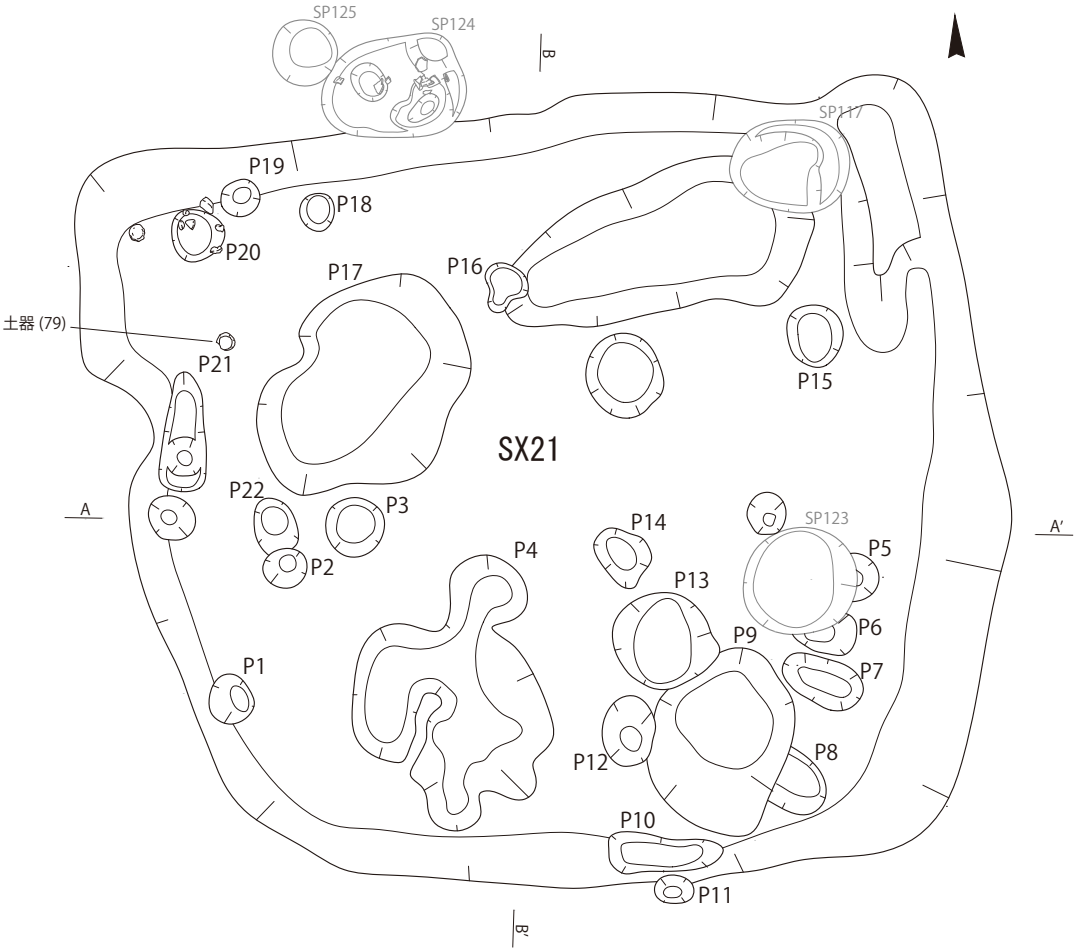


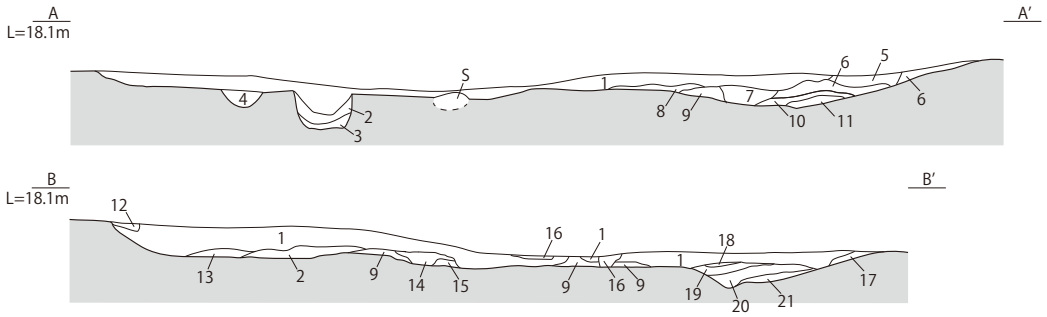


SX17
1　5Y5/2　灰オリーブ色土　しまりよい
炭化粒1mm大をわずかに、地山砂を多く含む
2　5Y2/1　黒色土　しまりよい
炭化粒を多量、地山砂をわずかに含む
3　5Y4/2　灰オリーブ色土　しまりよい
炭化粒1mm大・地山砂をわずかに含む

SX11
1　2.5Y4/1　黄灰色土　しまりよい　炭化粒1～2mm大・地山砂をわずかに、土器片を多く含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまりよい　炭化粒を多量に、地山砂ブロック2～5mm大をまばらに含む
3　2.5Y4/2　暗灰黄色土　しまりよい　炭化粒1mm大・地山砂をわずかに含む

図14　SX11・17　遺構平面・断面図





SX21

1	5Y5/3	灰オリーブ色土	しまりとてもよい	炭化粒を多く、地山砂ブロック3cm大をまばらに含む
2	5Y5/4	オリーブ色土	しまりよい	炭化粒0.5mm大をわずかに、地山砂を多く含む
3	5Y6/3	オリーブ黄色土	しまりよい	炭化粒1mm大をわずかに、地山砂を多く含む
4	5Y5/4	オリーブ色土	しまりよい	炭化粒5mm大をわずかに、地山砂を多く含む
5	7.5Y4/1	灰色土	しまりよい	炭化粒2mm大を多く、地山砂をまばらに含む
6	7.5Y5/2	灰オリーブ色土	しまりよい	炭化粒1～2mm大・地山砂を多く含む
7	7.5Y3/2	オリーブ黒色土	しまりよい	炭化粒3mm大・焼土ブロック2mm大を多く、地山砂をわずかに含む
8	5Y6/4	オリーブ黄色土	しまりよい	炭化粒1～2mm大・地山砂を多く含む
9	5Y7/4	浅黄色土	しまりよい	炭化粒2mm大をまばらに、地山砂を多量に含む
10	10YR5/6	黄褐色土	しまりよい	炭化粒1mm大をわずかに、焼土を多量に含む
11	2.5Y6/6	明黄褐色土	しまりよい	炭化粒3mm大、地山砂を多く含む
12	5Y6/3	オリーブ黄色土	しまりよい	炭化粒1～2mm大をわずかに、地山砂を多量に含む
13	5Y6/2	灰オリーブ色土	しまりよい	炭化粒0.5mm大をわずかに、地山砂を多く含む
14	2.5Y6/6	明黄褐色土	しまりよい	炭化粒2～5mm大をまばらに、地山砂を多く含む
15	7.5Y5/1	灰色土	しまりよい	炭化粒0.5mm大をまばらに、地山砂を含む
16	7.5Y2/1	黒色土	しまりよい	炭化粒を多量に含む
17	2.5Y7/3	浅黄色土	しまりよい	炭化粒1～2mm大、地山砂を多く含む
18	2.5Y3/1	黒褐色土	しまりよい	炭化粒を多く含む
19	5Y6/2	灰オリーブ色土	しまりよい	地山砂を多く含む
20	2.5Y4/2	暗灰黄色土	しまりよい	炭化粒0.5～3mm大・地山砂ブロック1～2cm大をまばらに含む
21	2.5Y5/4	黄褐色土	しまりよい	炭化粒1mm大をわずかに、地山砂を多く含む

図15　SX21　遺構平面・断面図

年代は、出土遺物から９世紀中頃～後半に相当する。

SX18（図 13）

M7グリッド、Ａ区の南東隅に位置し、調査区外（東・南・西）へと広がる。

SX18は南東に向かって緩傾斜する落ち込みで、平面形は不明である。残存長軸1.98ｍ×残存短軸1.80ｍ、西と東の高低差は0.65ｍを測る。堆積土は地山砂を含む5Y4/1灰色土や5Y3/1オリーブ黒色土、2.5Y6/1黄灰色土などであった。特に5Y4/1灰色土を中心に、多くの須恵器や土師器のほかに長方形の板材（長軸70.0㎝×短軸19.0㎝、材厚3.5㎝）などが出土した。

極めて限定された調査区のため不明な部分が多いが、東に土川の流路があることから、その浸食による旧河川あるいは低地帯が広がっていたことが想定でき、水場などに関連した遺構であった可能性も考えられる。

年代は、出土遺物から８世紀後半～末頃に相当する。

SX21（図 15　図版 5）

K7～L7グリッドに位置する。

SX21は、東西に長軸をとる不整方形の竪穴状遺構である。規模は東西4.66ｍ×南北4.20ｍ、深さ0.18ｍを測る。側面は、北東隅に棚状となる空間が認められたが、東西南北ともに緩やかな傾斜で底面へと続いている。底面には、P3のように平面円形で掘り込みを持つ小規模な穴（直径0.31ｍ、深さ0.18ｍ）のほかに、P4・9・17のように平面不整形である程度の範囲を持つ凹みや、P1・2・15・18～20のように平面円形で小規模な凹みが多く見られた。堆積土は炭化粒が多く含まれた5Y5/3灰オリーブ色土が主体で、東寄りの地点から焼土を含む7.5Y3/2オリーブ黒色土や10YR5/6黄褐色土も確認できたが、カマドの付設は認められなかった。また、支柱穴と考えられるピットも確認できなかった。

年代は、出土遺物から８世紀末頃～９世紀前半に相当する。

２　Ｂ区

竪穴建物

SI05（図 17　図版 6）

K11～L11グリッドに位置する。全体の約半分が調査区外（北）へと広がる。

SI05は平面推定隅丸方形の竪穴建物で、調査できたのは全体の約半分といえる。規模は東西3.11ｍ×残存南北1.71ｍ、深さ0.16ｍを測る。全体的に掘り込みは深く、東西の壁面は緩やかに傾斜しながら、平坦な底面へと続いている。堆積土は炭化粒がまばらに含まれたN3/暗灰色土が上層で、下層に5Y6/3オリーブ黄色土であった。壁面でのカマドの付設は認められず、調査区外にある可能性が考えられる。底面にはP1･2･4･5のように平面円形でしっかりとした掘り込みを持つ穴（P2：直径0.46ｍ、深さ0.23ｍ）と、P3のように凹み状を呈する穴（直径0.34ｍ、深さ0.06ｍ）が見られた。P1（推定直径0.60ｍ、深さ0.16ｍ）は、底面のほぼ中央部に位置する穴と考えられる。位置からP4・5が、支柱穴と考えられる。

年代は、出土遺物から８世紀後半～末頃に相当する。

溝

SD23（図 18　図版 6）

L11グリッドに位置する。調査区外の南北へと延びる。

SD23は南北に直線的に延びる溝である。側面はほぼ直に下がり、底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。規模は残存南北2.40ｍ、幅0.58ｍ、深さ0.16ｍを測る。堆積土は炭化粒が含まれた地山砂を多く含むもので、上層に10Y5/1灰色土、下層に7.5Y7/3浅黄色土であった。重複するSD24

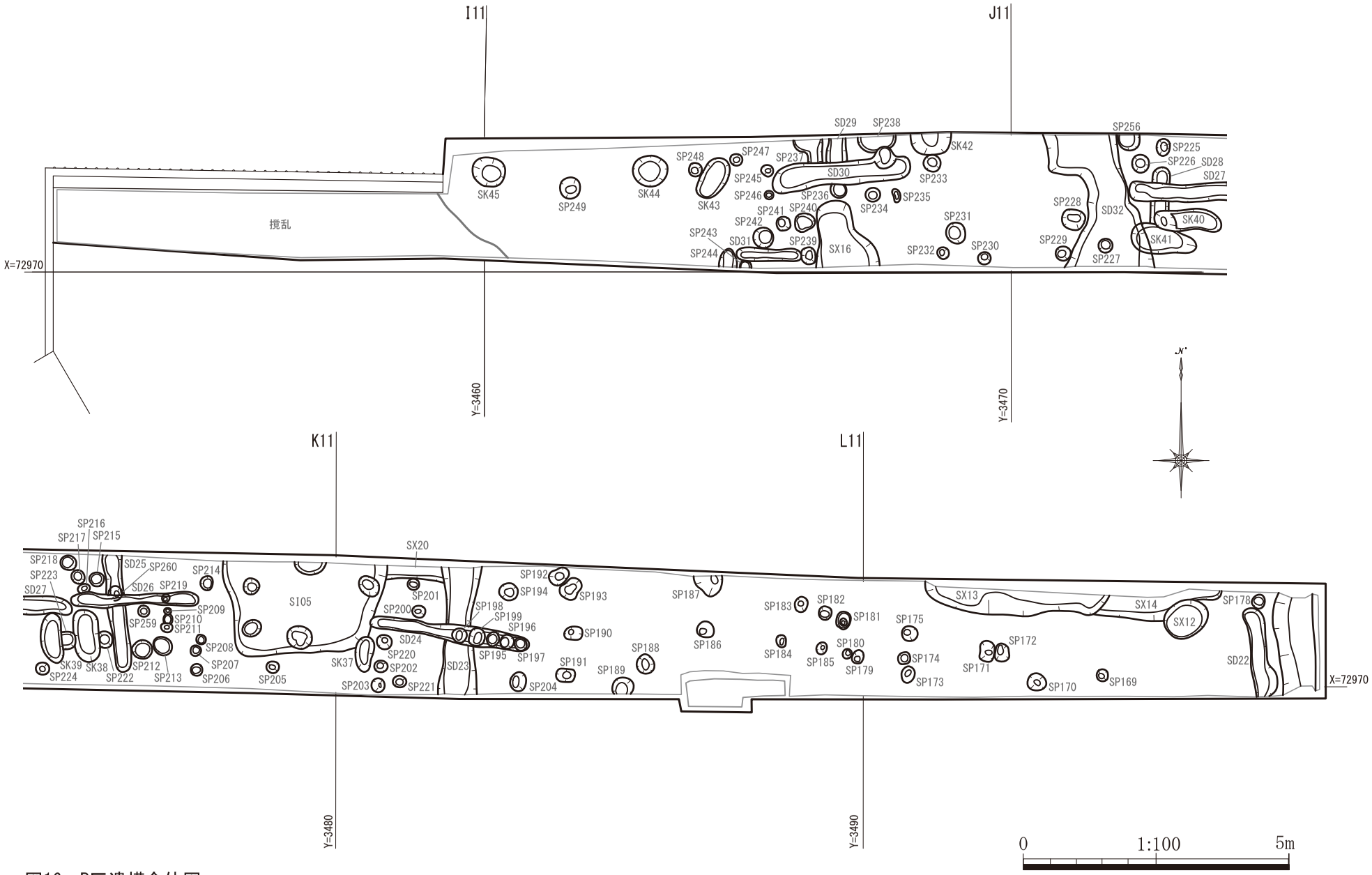

I11
J11
K11
L11
X=72970
Y=3460
Y=3470
Y=3480
Y=3490
撹乱
SK45
SP249
SK44
SP248
SK43
SP247
SP245
SP246
SP237
SD29
SP238
SD30
SP236
SP241
SP240
SP242
SP243
SD31
SP244
SP239
SX16
SP234
SP235
SK42
SP233
SP231
SP232
SP230
SP256
SP225
SP226
SD28
SD27
SP228
SD32
SP229
SP227
SK40
SK41
SP216
SP217
SP215
SP218
SP223
SD27
SD25
SP260
SD26
SP219
SP214
SP209
SP259
SP210
SP211
SP208
SP207
SP206
SP205
SP224
SK39
SK38
SP222
SP212
SP213
SI05
SX20
SP201
SP200
SP198
SP199
SP196
SP195
SP197
SD24
SP220
SP202
SP203
SP221
SK37
SD23
SP192
SP194
SP193
SP190
SP191
SP204
SP189
SP188
SP187
SP186
SP183
SP182
SP181
SP184
SP185
SP180
SP179
SP175
SP174
SP173
SP171
SP172
SP170
SP169
SX13
SX14
SX12
SP178
SD22
0
1:100
5m

図16　B区遺構全体図

よりも古いと判断できた。

年代は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初めに相当する。

SD26（図18）

K11グリッドに位置する。

SD26は東西に延びる小規模で狭長な溝である。側面はほぼ直に下がり、底面は平坦である。規模は東西2.42m、幅0.20m、深さ0.15mを測る。堆積土は炭化粒と地山砂ブロックを含み、上層に7.5Y4/1灰色土、下層に7.5Y4/3暗オリーブ色土であった。重複するSD25よりも新しいと判断できた。

年代は、出土遺物から9世紀中頃～後半に相当する。

SD28（図17）

K11グリッドに位置する。

SD28は南北に延びる小規模な溝で、底面は丸底である。規模は残存長軸1.09m、幅0.35m、深さ0.08mを測る。堆積土は炭化粒を僅かに含む5Y4/1灰色土が主体である。重複するSK40・41とSD27よりも古いと判断できた。

年代は、出土遺物から8世紀後半に相当する。

SD32（図17　図版6）

K11グリッドに位置する。調査区外の南北へと延びる。

SD32は南北方向に延びる不整形の溝で、南北幅に対して中央付近が括れて幅が狭くなる。側面は傾斜で平坦な底面へと続くが、中央部東の側面ではほぼ直に近い状態で下がり底面へと続く。規模は残存長2.60m、広い地点の幅1.70m、狭い地点の幅0.75m、深さ0.17mを測る。堆積土は炭化粒をまばらに含み地山砂を多く含む2.5Y6/2灰黄色土の下に、炭化粒が僅かに含まれ地山砂を多く含む2.5Y4/1黄灰色土であった。中央括れ部下層の2.5Y4/1黄灰色土中から、須恵器の甕・壺破片（124～126）などがまとまって出土した。また、南西隅付近の底面付近から、須恵器杯B1点（129）が底部を上にした状態で出土した。SK41と重複するが、本遺構の方が古いと判断できた。

年代は、出土遺物から8世紀後半～末頃に相当する。

土坑

SK40・41（図17）

SK40・41は、K11グリッドに位置する。

いずれも平面細長楕円形の土坑で、南北に隣接し、一部重複する。SK40は長軸1.29m×短軸0.39m、深さ0.24m、SK41は長軸1.26m×短軸0.57m、深さ0.16mを測る。検出時の肩部関係から、SK41→SK40の変遷が窺えた。

SK40・41の年代は、出土遺物から8世紀後半～9世紀前半に相当する。

ピット

SP171・172（図17）

M11グリッドに位置する。

SP171・172は南北に軸をとる平面楕円形のピットで、西にSP171、東にSP172が隣接する。規模はSP171が南北0.39m×東西0.27m、深さ0.23m、SP172が南北0.35m×東西0.28m、深さ0.19mを測る。いずれもしっかりした掘り込みを持ち、底面は丸底となる。堆積土は掘り方に相当する周囲は炭化粒を含み地山砂も多く含んだ土で、上層に10Y5/1灰色土、下層に10Y3/1オリーブ黒色土となる。柱痕に相当する中心部は、炭化粒と地山砂を含んだ10Y4/1灰色土であった。

SP172の年代は、出土遺物から8世紀後半に相当する。SP171は概ね同じ頃のものと考えられるが、

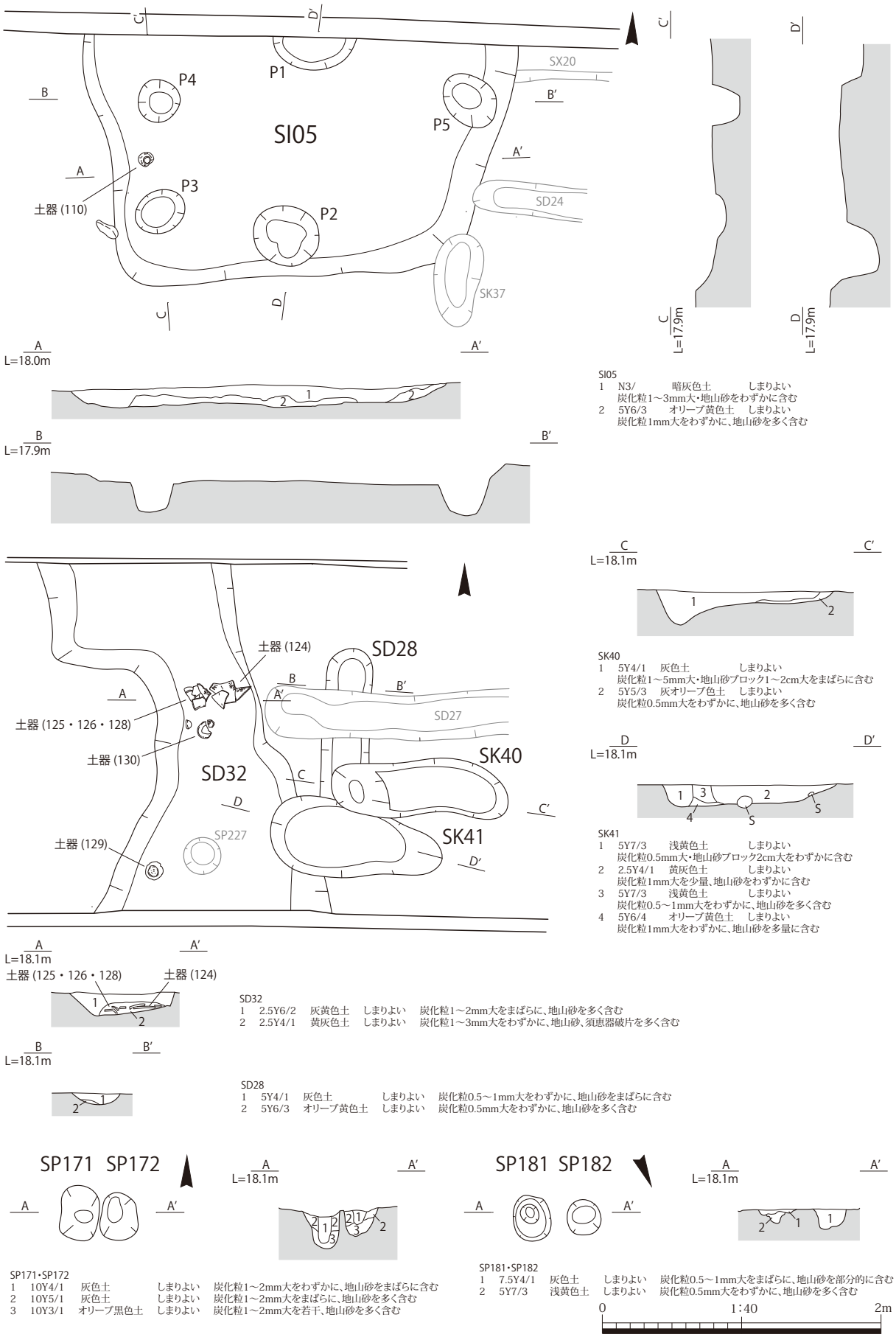


図17 SI05・SD32他 遺構平面・断面図

遺物から年代を特定することは困難である。

SP181・182（図17）

L11グリッドに位置し、SP181（東）とSP182（西）は隣接する。

SP181は南北に軸をとる平面楕円形、SP182は平面円形のピットである。規模はSP181が南北0.34ｍ×東西0.27ｍ、深さ0.09ｍ、SP182は直径0.26ｍ、深さ0.14ｍを測る。いずれも深い掘り込みではなかった。SP181の底面は2段状で、平面円形の中央部が1段低くなり、SP182の底面は東に向かって緩傾斜する。SP181の堆積上層土とSP182の堆積土は炭化粒と地山砂を含む7.5Y4/1灰色土で、SP181の下層にはわずかな炭化粒と多量の地山砂を含む5Y7/3浅黄色土が堆積する。

SP181の年代は出土遺物から9世紀後半～10世紀初めに相当する。SP182は概ね年代は同じ頃と考えられるが、遺物から年代を特定することは困難である。

SP192・193（図18）

L11グリッドに位置し、SP192（西北）とSP193（東南）は隣接する。

SP192・193は北東から南西の方向に軸をとる平面楕円形のピットである。規模はSP192が長軸0.39ｍ×短軸0.30ｍ、深さ0.15ｍ、SP193が長軸0.45ｍ×短軸0.34ｍ、深さ0.21ｍを測る。いずれもしっかりした掘り込みで、底面は丸底となる。いずれも堆積土は炭化粒僅かに含み地山砂を含む土で、2.5Y4/1黄灰色土と2.5Y5/2暗灰黄色土が主体となる。

SP193の年代は、出土遺物から8世紀後半～末頃に相当する。SP192は概ね年代は同じ頃と考えられるが、遺物から年代を特定することは困難である。

SP203（図18）

L11グリッドに位置する。

SP203は平面円形のピットで、規模は直径0.26ｍ、深さ0.12ｍを測る。浅い掘り込みで、底面は東に向かって緩傾斜する。堆積土は炭化粒僅かに含み地山砂を多量に含む7.5Y5/1灰色土であった。

年代は、出土遺物から9世紀末頃～10世紀初めに相当する。

SP212・213（図18）

K11グリッドに位置し、SP212（西）とSP213（東）は隣接する。

SP212・213は平面円形のピットである。規模はSP212が直径0.38ｍ、深さ0.13ｍ、SP213は直径0.36ｍ、深さ0.05ｍを測る。SP212は掘り込みが深く、底面は丸底である。堆積土は炭化粒を含み地山砂が多く含まれた土で、5Y4/1灰色土が主体であるが、底面付近に5Y5/4オリーブ色土が堆積する。SP213は浅い掘り込みで、底面に凹凸がある。堆積土は炭化粒を含み地山砂が多く含まれた7.5Y5/1灰色土であった。

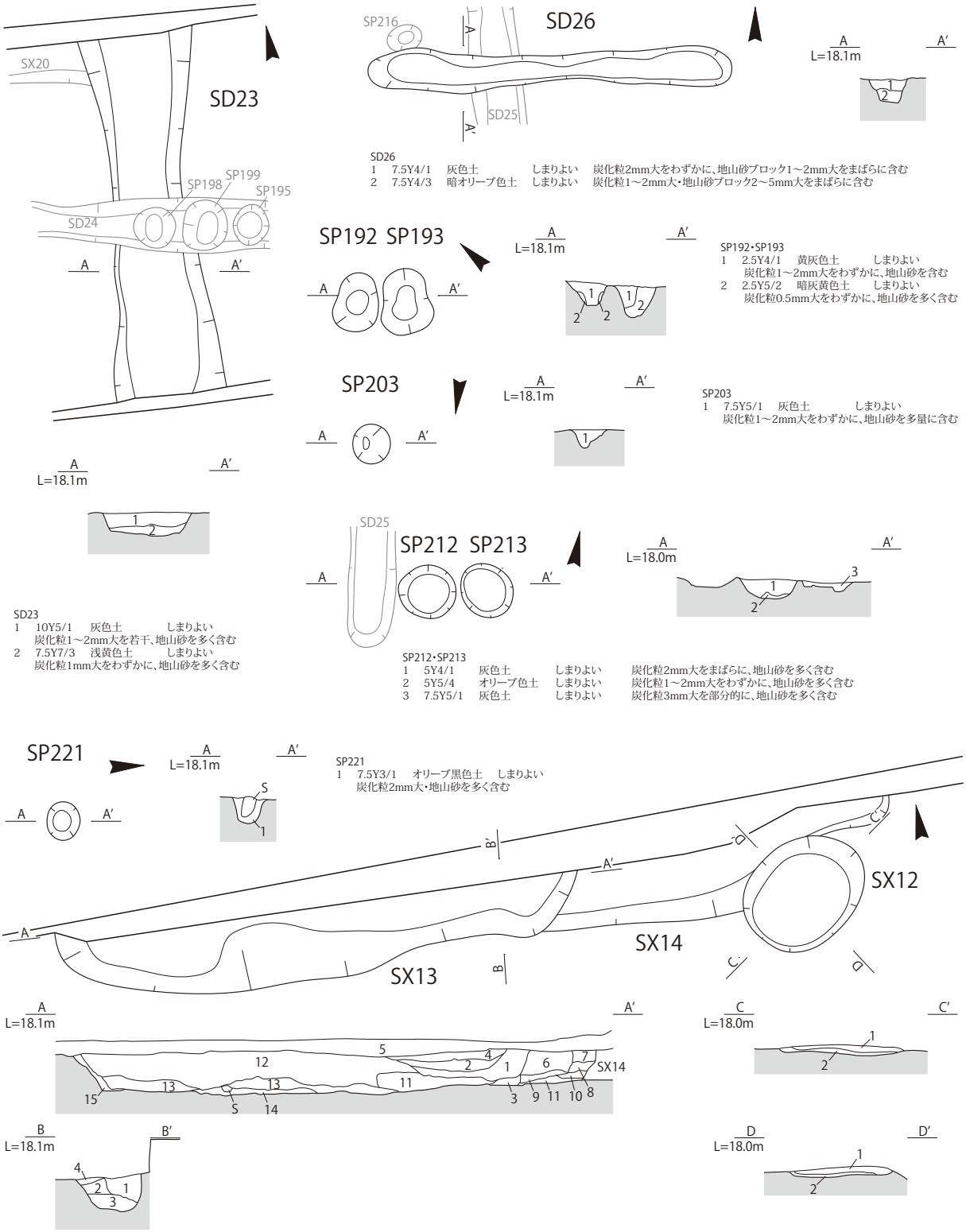
SP213の年代は、出土遺物から8世紀後半～末頃に相当する。SP212は概ね年代は同じ頃と考えられるが、遺物から年代を特定することは困難である。

SP221（図18）

L11グリッドに位置する。

SP221は平面円形のピットで、堆積土中に15.0㎝大の石が1点含まれていた。規模は直径0.24ｍ、深さ0.18ｍを測る。掘り込みが深く、底面は丸底となる。堆積土は炭化粒と地山砂を多く含む7.5Y3/1オリーブ黒色土である。

年代は、出土遺物から9世紀中頃～後半に相当する。



SD26
1　7.5Y4/1　灰色土　しまりよい　炭化粒2mm大をわずかに、地山砂ブロック1～2mm大をまばらに含む
2　7.5Y4/3　暗オリーブ色土　しまりよい　炭化粒1～2mm大・地山砂ブロック2～5mm大をまばらに含む

SP192・SP193
1　2.5Y4/1　黄灰色土　しまりよい
炭化粒1～2mm大をわずかに、地山砂を含む
2　2.5Y5/2　暗灰黄色土　しまりよい
炭化粒0.5mm大をわずかに、地山砂を多く含む

SP203
1　7.5Y5/1　灰色土　しまりよい
炭化粒1～2mm大をわずかに、地山砂を多量に含む

SD23
1　10Y5/1　灰色土　しまりよい
炭化粒1～2mm大を若干、地山砂を多く含む
2　7.5Y7/3　浅黄色土　しまりよい
炭化粒1mm大をわずかに、地山砂を多く含む

SP212・SP213
1　5Y4/1　灰色土　しまりよい　炭化粒2mm大をまばらに、地山砂を多く含む
2　5Y5/4　オリーブ色土　しまりよい　炭化粒1～2mm大をわずかに、地山砂を多く含む
3　7.5Y5/1　灰色土　しまりよい　炭化粒3mm大を部分的に、地山砂を多く含む

SP221
1　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりよい
炭化粒2mm大・地山砂を多く含む

SX13
1　7.5Y2/2　オリーブ黒色土　しまりよい　炭化粒1～2mm大を若干、地山砂ブロック5mm～３cm大をまばらに含む
2　5Y8/3　淡黄色土　しまりよい　炭化粒1mm大をわずかに、地山砂を多量に含む
3　5Y2/2　オリーブ黒色土　しまりよい　炭化粒1～2mm大をわずかに、地山砂ブロック1～3cm大をまばらに含む
4　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　しまりよい　炭化粒1mm大を若干、地山砂ブロック5mm～2cm大をまばらに含む
5　7.5GY5/1　緑灰色土　しまりよい　表土(耕作土)に小礫が混入
6　5Y6/3　オリーブ黄色土　しまりよい　炭化粒2mm大をまばらに、地山砂を多く含む
7　5Y7/6　黄色土　しまりよい　地山砂を多量に含む
8　5Y7/6　黄色土　しまりよい　8よりも炭化粒1mm大・黒色土粒子をわずかに、地山砂を多量に含む
9　5Y7/6　黄色土　しまりよい　炭化粒2mm大を若干、地山砂を多く含む
10　5Y7/3　浅黄色土　しまりよい　地山砂を多く含む
11　5Y7/2　灰白色土　しまりよい　炭化粒1～2mm大をわずかに、地山砂を多量に含む
12　7.5Y2/1　黒色土　しまりよい　炭化粒1～5cm大・地山砂ブロック1～3cm大をまばらに含む
13　10Y2/1　黒色土　しまりよい　炭化粒1～3cm大・地山砂ブロック1～5cm大をまばらに含む
14　7.5Y8/3　淡黄色土　しまりよい　炭化粒1～3mm大、地山砂を多く含む
15　7.5Y6/3　オリーブ黄色土　しまりよい　炭化粒2～5mm大をまばらに、地山砂を多く含む

SX12
1　10Y3/1　オリーブ黒色土　しまりよい
炭化粒1～2mm大をわずかに、地山砂を少量、土器を含む
2　7.5Y5/3　灰オリーブ色土　しまりよい
炭化粒0.5～1mm大をわずかに、地山砂を多く含む

0　1:40　2m

図18　SD23・SX12・13・14他　遺構平面・断面図

不明遺構

SX12・13・14（図18）

M11グリッドに位置する。SX13・14は大半が調査区外（北）となる。

SX12は平面楕円形で僅かな凹みをもった遺構で、性格は不明である。規模は長軸0.85ｍ×短軸0.68ｍ、深さ0.06ｍを測る。堆積土は土器片を含み炭化粒をまばらに含んだ10Y3/1オリーブ黒色土の下に炭化粒をまばらに含んだ7.5Y5/3灰オリーブ色土となる。底面は平坦である。SX14と重複し、SX14よりも新しいと判断できた。

SX12の年代は、出土遺物から9世紀末頃～10世紀初めに相当する。

SX13は平面推定隅丸方形になると想定される竪穴建物あるいは竪穴状遺構となる可能性が考えられるが、極めて限定された調査範囲であったため不明遺構として扱った。規模は東西3.50ｍ×残存南北0.48ｍ、深さ0.28ｍを測る。堆積土は炭化粒をまばらに含んだ5Y7/2灰白色土と7.5Y2/1黒色土、10Y2/1黒色土が主体であった。東西の側面はほぼ直に近い状態で下がり、底面は平坦となる。底面にピットは認められなかった。カマドの付設も認められず、竪穴建物であれば、調査区外にあると考えられる。SX14と重複するが、調査区北壁及び側面肩部の検出状態から、本遺構の方がSX14よりも新しいと判断できた。

SX13の年代は、出土遺物から8世紀後半～末頃に相当する。

SX14は平面推定方形になると予測される竪穴建物あるいは竪穴状遺構となる可能性が考えられるが、極めて限定された調査範囲であったためSX13と同様に不明遺構として扱った。規模は残存東西2.13ｍ×残存南北0.45ｍ、深さ0.20ｍを測る。底面は平坦で、底面にピットは認められなかった。カマドの付設も認められず、SX13と同様に竪穴建物であれば、調査区外にある可能性が考えられる。SX12・13と重複し、双方の遺構よりも古いと判断できた。SX14→SX12・13の変遷が窺える。

第４節　遺物

以下、Ａ区とＢ区に分けて代表的な遺物の内容を記していきたい。

１　Ａ区

掘立柱建物・溝

SB01・SD16（図19・25　図版7・12）

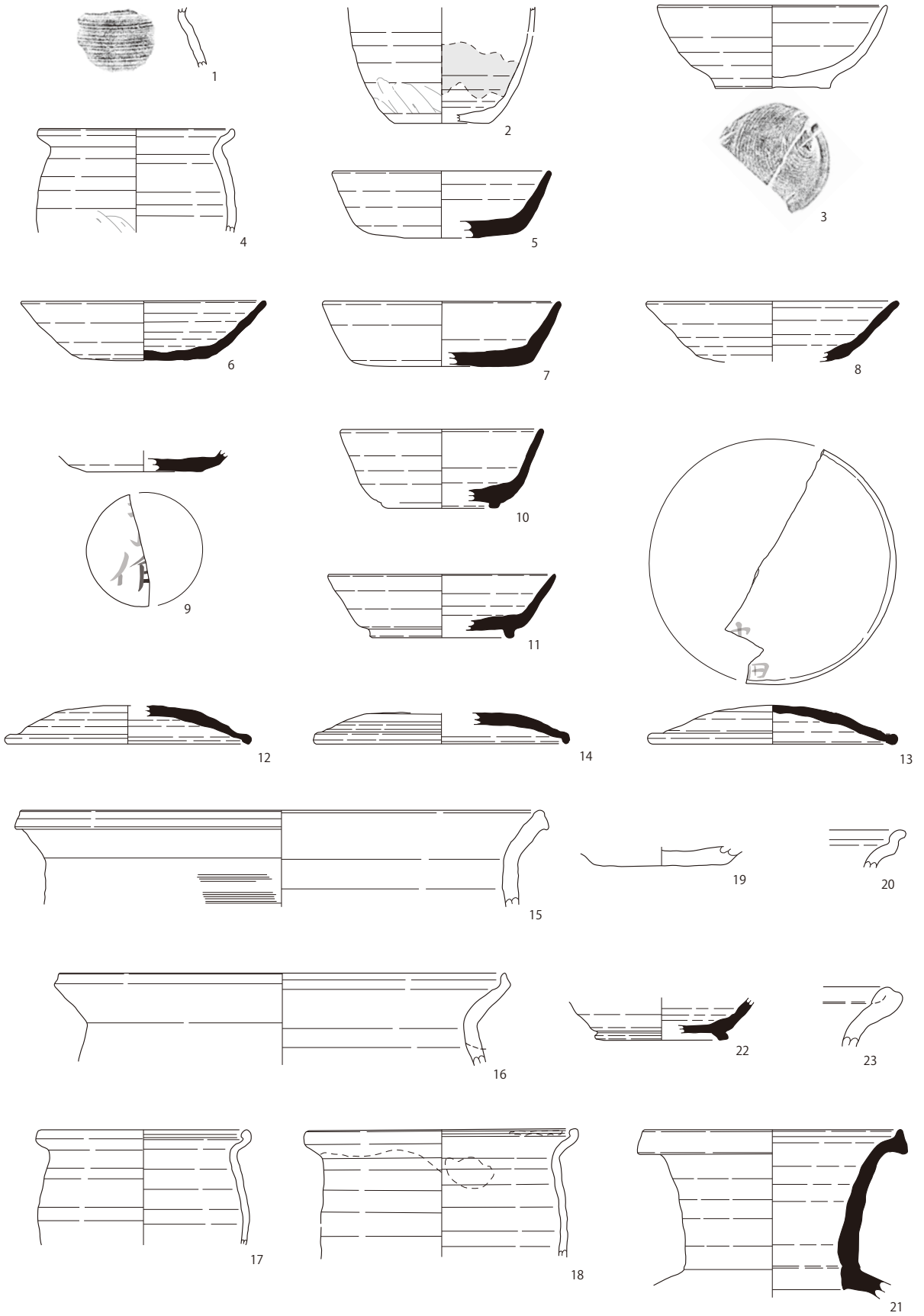
SB01の柱穴から出土した遺物は、1～3・104である。1はSP116の掘り方北から出土した土師器小型甕の破片で、胴部（頸部付近）と思われる。2・3はS P124の掘り方東から出土した土師器で、2は小型甕の胴部下半～底部、3は椀Ａである。2の底面はヘラケズリで、内面と底部外面に煤が付着する。3は生焼け状で焼成が不良であるが、内面に丸みを持つが口縁部がほぼ直に近い状態で立ち上がる器形で、底面は回転糸切りである。104はS P124の掘り方西から出土した土錘で、細長い寸胴形で、長さ6.5㎝×幅1.3㎝、孔径0.4㎝、重さ10.1ｇを測る。1～3は器形と技法から、9世紀後半～末頃に相当すると考えられる。

SD16出土の遺物は、4である。4は土師器小型甕の口縁部～胴部で、口縁部がくの字状に開く器形である。口縁端部は丸みをおびる。外面に黒斑、口縁部内面に煤の付着が見られる。9世紀後半に相当するといえる。

竪穴建物

SI01（図19　図版7）

5～20が出土遺物である。5～14は須恵器で、15～19は土師器である。5～8は杯Ａで、いずれも



1～3：SB01　4：SD16　5～20：SI01　21～23：SI03

0　1：3　20cm

図19　遺物実測図1

口縁部は外反せず、底面は回転ヘラ切りである。8の外面に墨痕が見られる。5はカマド、7はP2から出土した。9は杯Ａあるいは椀Ａの底部で、底面は回転糸切りで墨書「□□（作ヵ）」がある。10・11は杯Ｂで、いずれも口縁部は外反せず、底面はヘラ切り後に高台が貼り付けられる。12・13・14は蓋の天井部～口縁部までの破片で、いずれも端部のかえりは丸みをおびる。13の口縁部外面に墨書「□（中ヵ）田」がある。14は内面に墨痕が残り、転用硯の可能性が高い。15・16は甕の口縁部である。15は口縁部がくの字状に開く器形で、端部は外反する。内面は摩耗・剥離し、煤の付着が見られる。16は甕の口縁部で、くの字状に開く器形で口縁端部は直に立ち上がる。外面に種子状の圧痕（長さ5.0㎜×幅2.0㎜）が残る。17・18は小型甕の口縁部～胴部で、口縁部がくの字状に開き、端部が内側に向かって丸みをおびる器形である。外内面には、煤の付着が見られる。19は小型甕の底部と思われる。底面はヘラ切りで、外面に赤彩が施される。20は小破片であるが、弥生時代後期の土器と考えられる。有段壺の口縁部で、端部は反する。弥生時代の土器が混入したものと考えられる。

20を除き、床面のピット内から出土したものも含めて、出土遺物の年代は、8世紀末頃～9世紀前半に相当すると考えられる。

SI03（図19・20　図版4・7・8）

21～27が出土遺物である。21・22は須恵器、23～27は土師器である。21は壺の口縁部～頸部で、口縁部は強く外反し、端部は段状で先端はほぼ直に立ち上がる。内面と僅かに残る胴部外面に白濁色の付着物が見られる。22は杯Ｂの底部で、底面はヘラ切り後に高台が貼り付けされる。23は鍋の口縁部で、端部は内面への折り返しで丸みを有し、頂部に1条の沈線がめぐる。24は杯Ａの体部～底部で、底面は回転糸切りで墨書「中田」がある。25～27は椀Ａで、いずれも口縁端部が外反する器形で、底面は回転糸切りである。25・26は残存率が高く（25：90％、26：99％）、25は口径12.6㎝、底径6.5㎝、器高4.5㎝、26は口径12.4㎝、底径6.0㎝、器高4.4㎝を測る。25は外内面に油煙が付着する。出土遺物は、9世紀後半～10世紀初めに相当すると考えられる。

溝

SD09・10・11（図20　図版8）

28がSD09の出土遺物で、須恵器の杯Ｂである。口縁部に外反は見られず、底面はヘラ切り後に高台が貼り付けられる。外内面ともに摩耗が著しい。9世紀末頃～10世紀初めに相当すると考えられる。

SD15（図20　図版8）

29が出土遺物で、外面はタタキ、内面には当て具痕が明瞭に残る。SI03の年代から、9世紀後半～10世紀初め以降に相当すると考えられる。

土坑

SK17（図20　図版8）

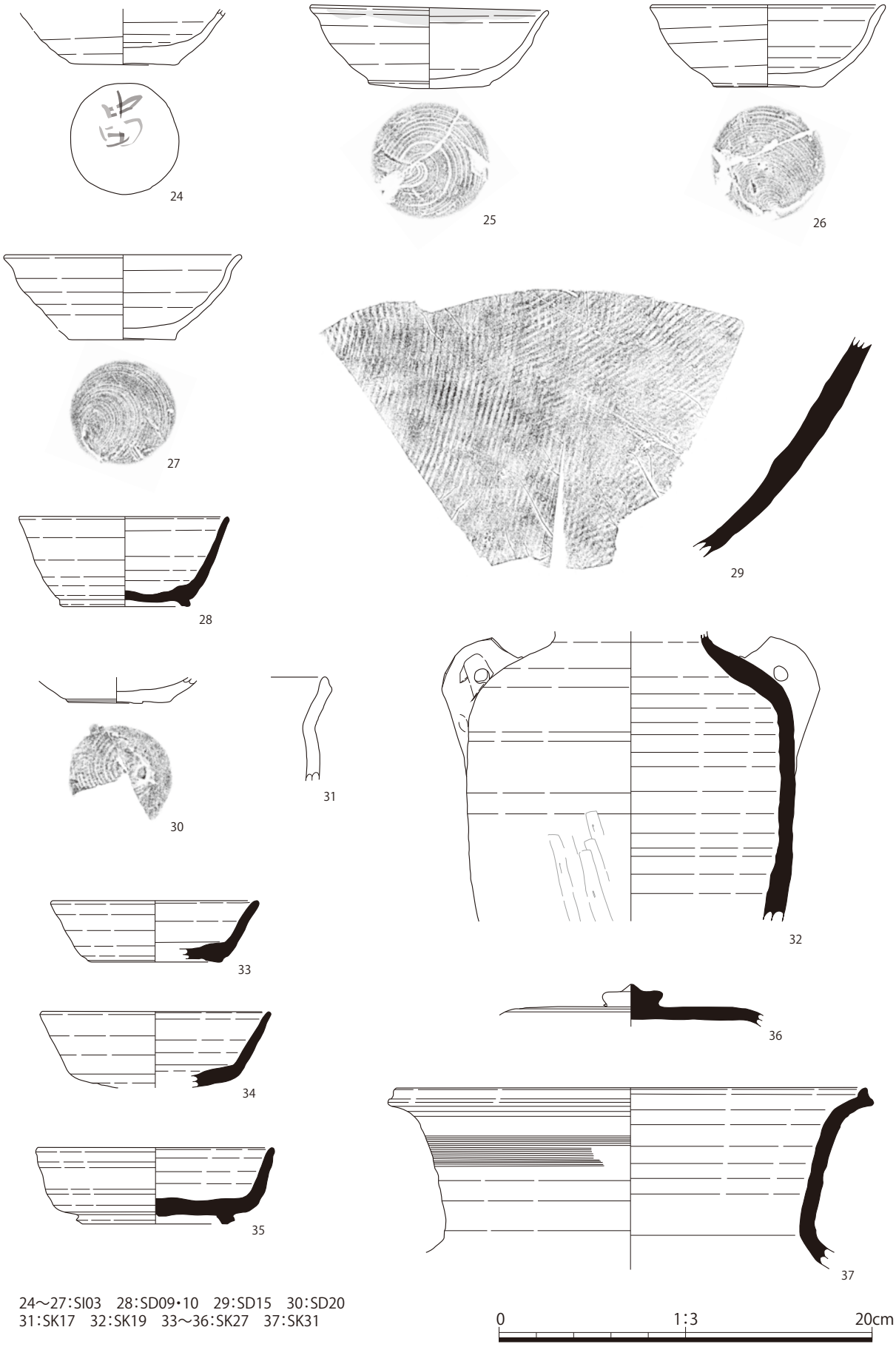
31が出土遺物で、土師器鍋の口縁部の小破片である。くの字状に開く器形で、口縁端部は丸みをおび、僅かに内傾する。9世紀前半～中頃に相当すると考えられる。

SK19（図20　図版8）

32が出土遺物で、須恵器双耳瓶（壺）の肩部～胴部である。肩部に付く耳は上面・側面ともによく面取りされ、直径8.0㎜の円形穿孔があく。耳の形状などから、9世紀後半に相当すると考えられる。

SK27（図20　図版8）

33～36が出土遺物で、すべて須恵器である。33・34は杯Ａで、口縁部に外反は見られず、底面はヘラ切りである。34は焼成不良で、外内面ともに摩耗が著しい。35は杯Ｂで、口縁端部が僅かに外反し、底径が大きい（底径：8.5㎝）器形である。底面はヘラ切り後にしっかりとした高台が貼り付



24～27:SI03　28:SD09・10　29:SD15　30:SD20
31:SK17　32:SK19　33～36:SK27　37:SK31

図20　遺物実測図2

けられる。36は蓋で、口縁部を欠損するが、つまみは大きくてしっかりとした宝珠形である。出土遺物は、8世紀後半～末頃に相当すると考えられる。

SK31（図20・21　図版8）

37～39が出土遺物である。37は須恵器の甕の口頸部で外反器形であるが、口縁端部はほぼ直に立ち上がる。38・39は土師器である。38はほぼ完形の椀Ａで、低径が小振りで、内面の底部と体部の接合部に凹み線がめぐり、体部外面には段を有し、口縁端部がやや外反する器形である。口径12.6㎝、底径5.2㎝、器高4.4㎝を測る。外内面ともに赤彩が施され、底面は回転糸切りで、墨書「中田」がある。39は椀の口縁部～体部で、口縁端部が僅かに外反する。外内面ともに赤彩が施される。出土遺物は、9世紀後半～10世紀初めに相当すると考えられる。

ピット

SP72（図21　図版8）

40は須恵器蓋の天井部である。内面が平滑で墨痕が残ることから、転用硯と考えられる。8世紀後半～9世紀前半に相当すると考えられる。

SP97（図21　図版8）

41が出土遺物である。土師器椀Ａの体部～底部で、底面は回転糸切りである。内面には油煙が付着する。9世紀後半～10世紀初めに相当すると考えられる。

SP106（図21　図版9）

42が出土遺物である。土師器の椀Ａで、口縁端部が外反する。底面は回転糸切りで、底面と体部外面に文字判読不明の墨書がある。また、底面に籾殻ないしは玄米と思われる米粒状の圧痕（長さ4.0㎜×幅2.0㎜）がある。9世紀後半～10世紀初めに相当すると考えられる。

SP142（図21　図版9）

43が出土遺物で、土師器の杯Ａあるいは椀Ａの底部である。外内面ともに赤彩が施される。底面は回転糸切りで、墨書「□（中ヵ）田」がある。9世紀後半～10世紀初めに相当すると考えられる。

SP177（図21　図版9）

44が出土遺物で、土師器の小型甕である。胴部～底部で、内面に左回転のロクロナデの痕跡がよく残る。底面は未調整である。外面は剥離して、煤が多く付着している。8世紀末頃～9世紀前半に相当すると考えられる。

不明遺構

SX02（図21　図版9）

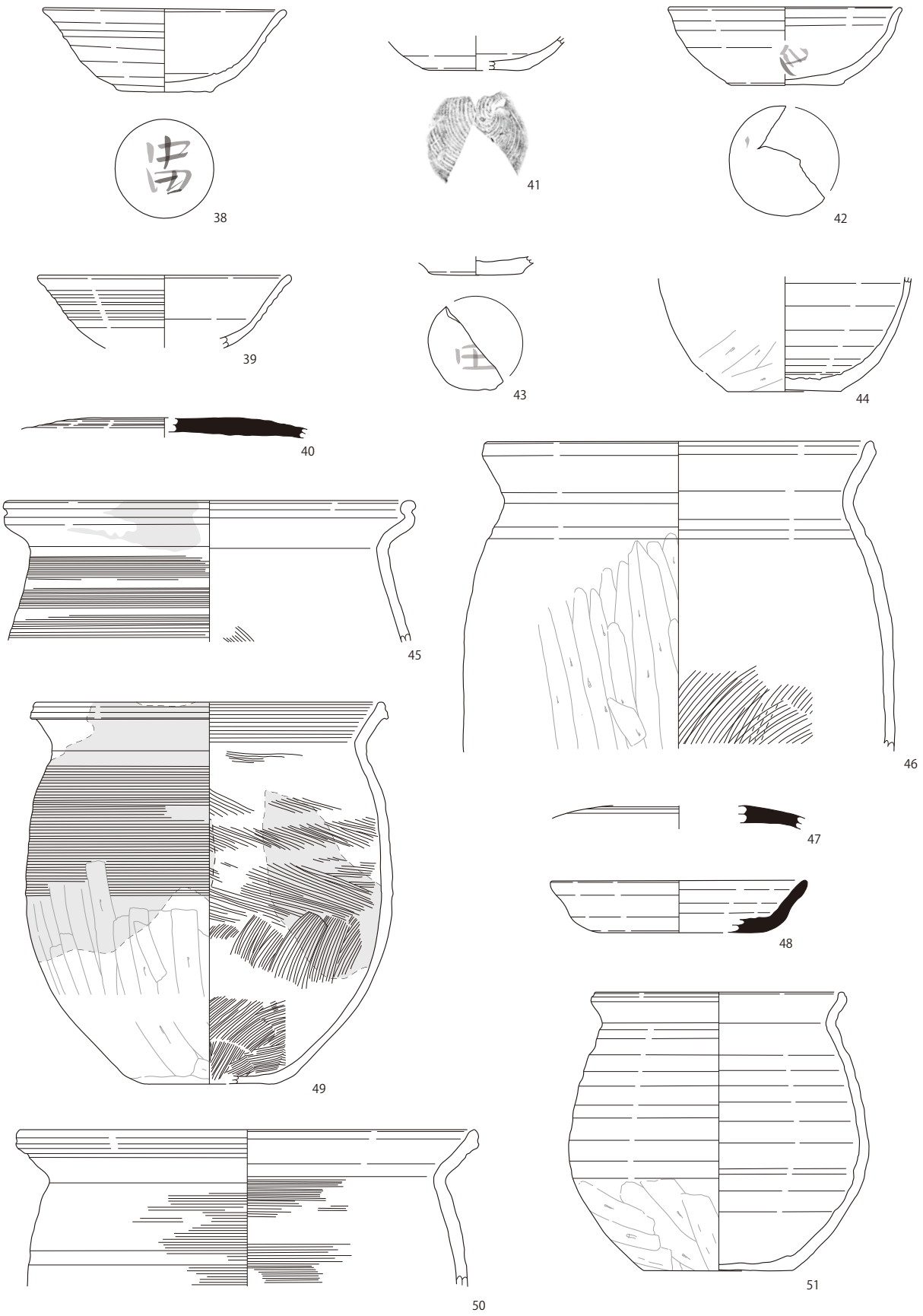
45・46が出土遺物である。いずれも土師器甕の口縁部～胴部で、口縁部がくの字状に開く器形である。45の口縁端部は丸みをおび、外面に1条の深い沈線がめぐり、口縁部外面には油煙の付着が見られる。出土遺物は、9世紀中頃～後半に相当すると考えられる。

SX03（図21　図版9）

47が出土遺物で、須恵器蓋の天井部である。外面に墨痕が残る。8世紀末頃に相当すると考えられる。

SX06（図21・25　図版9・12）

48・109が出土遺物である。48は須恵器の杯Ａである。口縁端部は外反せず、底面は静止ヘラ切りである。109は粘板岩製の砥石で、細長の四角柱状を呈する。一方の端部に欠損が見られ、本来はもう少し長さがあったと考えられる。長軸の4面はともに赤色素の付着が見られるが、平滑でよく使用がなされていたものといえる。短面の使用はなかったものといえよう。48は、8世紀後半に相当すると考えられる。



38・39:SK31　40:SP72　41:SP97　42:SP106　43:SP142
44:SP177　45・46:SX02　47:SX03　48:SX06　49～51:SX09

0　1:3　20cm

図21　遺物実測図3

SX09（図 21・22　図版 9）

49～53が出土遺物で、すべて土師器である。49・50は甕の口縁部～胴部である。49は、口縁部がくの字状に開く器形で、口縁端部には凹線がめぐる。50はくの字状に口縁部が開く器形で、口縁端部は外面折り返しで、1条の沈線がめぐる。49の胴部外内面と50の外面には、煤の付着が見られる。51～53は小型甕である。51は全体の器形がわかるもので、推定口径12.8㎝、推定底径7.8㎝、器高14.6㎝を測る。口縁部がくの字状に開く器形で、口縁部は内面に向かって僅かな丸みをおび、端部は僅かに内面に傾く。底面はヘラケズリで、底部外面に赤彩の痕跡が残っている。52は有段状の口縁部で、口縁端部は丸みをおびる。外内面ともに煤が付着し、外面には剥離が見られる。53は胴部～底部で、底面は回転糸切りである。外内面ともに煤が付着する。出土遺物は、8世紀後半～9世紀前半に相当すると考えられる。

SX10（図 22　図版 9）

54が出土遺物で、土師器鍋の口縁部である。外反器形で、口縁端部は内面折り返しで丸みをおびる。推定口径38.0㎝を測る。9世紀末頃～10世紀初めに相当すると考えられる。

SX11（図 22・23　図版 9・10）

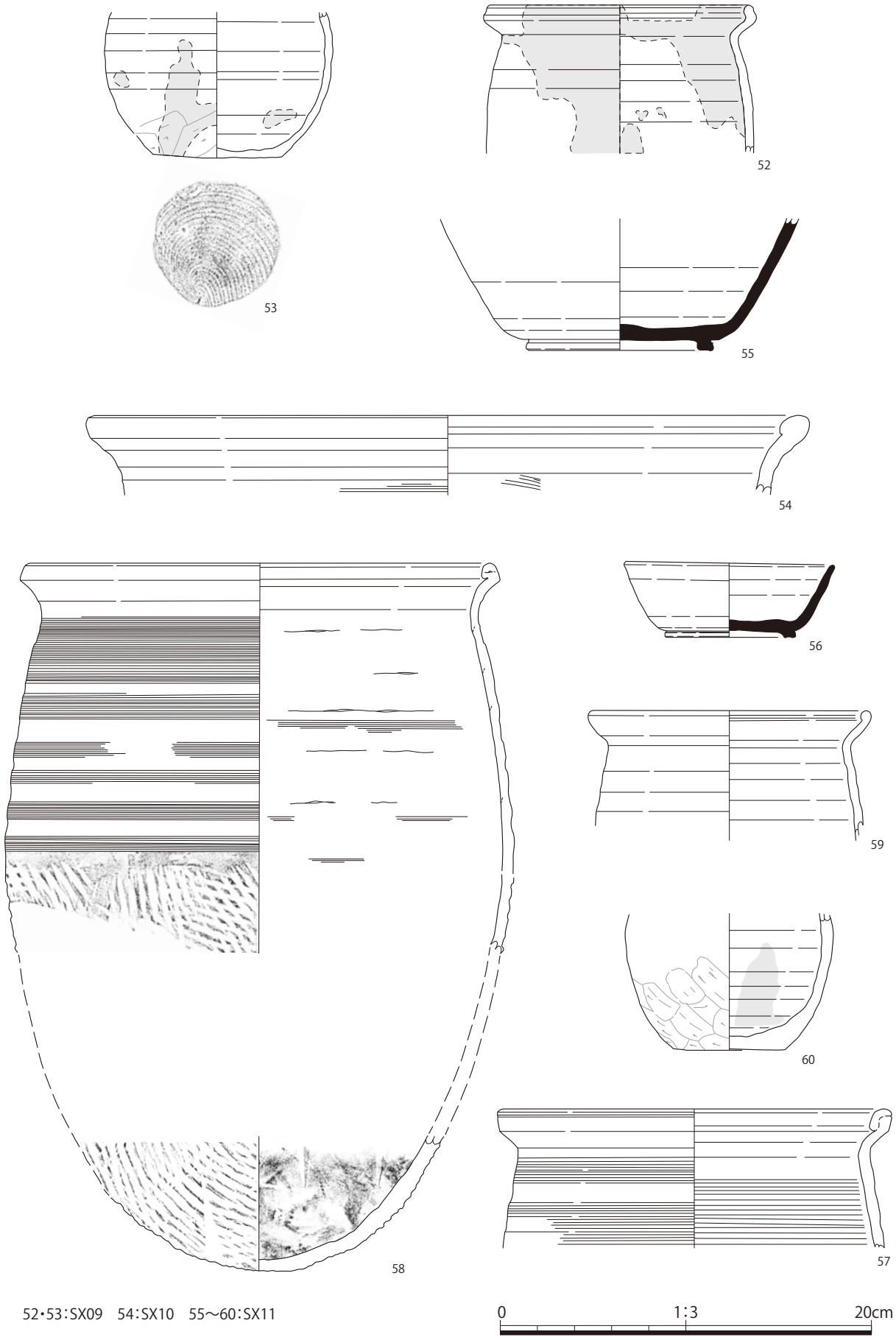
55～61が出土遺物である。55・56は須恵器である。55は壺（瓶）の胴部～底部と思われる。底面はヘラ切り後に大振りな高台が貼り付けられ、推定底径9.8㎝を測る。56は杯Ｂで、体部はほぼ直に立ち上がり、口縁端部に外反のない器形である。底面はヘラ切り後に高台が貼り付けられる。外内面ともに油煙が付着する。57～61は土師器である。57は甕の口縁部で、有段状で口縁端部は内面への折り返しで丸みをおびる。外内面ともに煤が付着する。58は甕で、口縁部はくの字状に開き、底部が丸底となる長胴の器形である。口縁端部内面に細長く丸めた粘土紐が貼り付けられ，接合部外面にはまるで1条の沈線があるように見える。底部外面にタタキ、底部内面には当て具痕が残る。外内面ともに煤の付着が見られる。59・60は小型甕で、59は口縁部～胴部、60は胴部～底部である。59は口縁部がくの字状に開く器形で、口縁端部は内面折り返しで丸みをおびる。60の底面は調整不明で、外内面に油煙が付着する。61はほぼ完形の椀Ａで、口縁端部に外反のない器形である。底面は回転糸切りである。口径12.6㎝、底径5.9㎝、器高4.2㎝を測る。出土遺物は、9世紀後半に相当すると考えられる。

SX17（図 23　図版 10）

62が出土遺物で、土師器の椀Ａである。口縁部に外反のない器形で、底面は回転糸切り、外内面に赤彩の痕跡が残る。9世紀中頃～後半に相当すると考えられる。

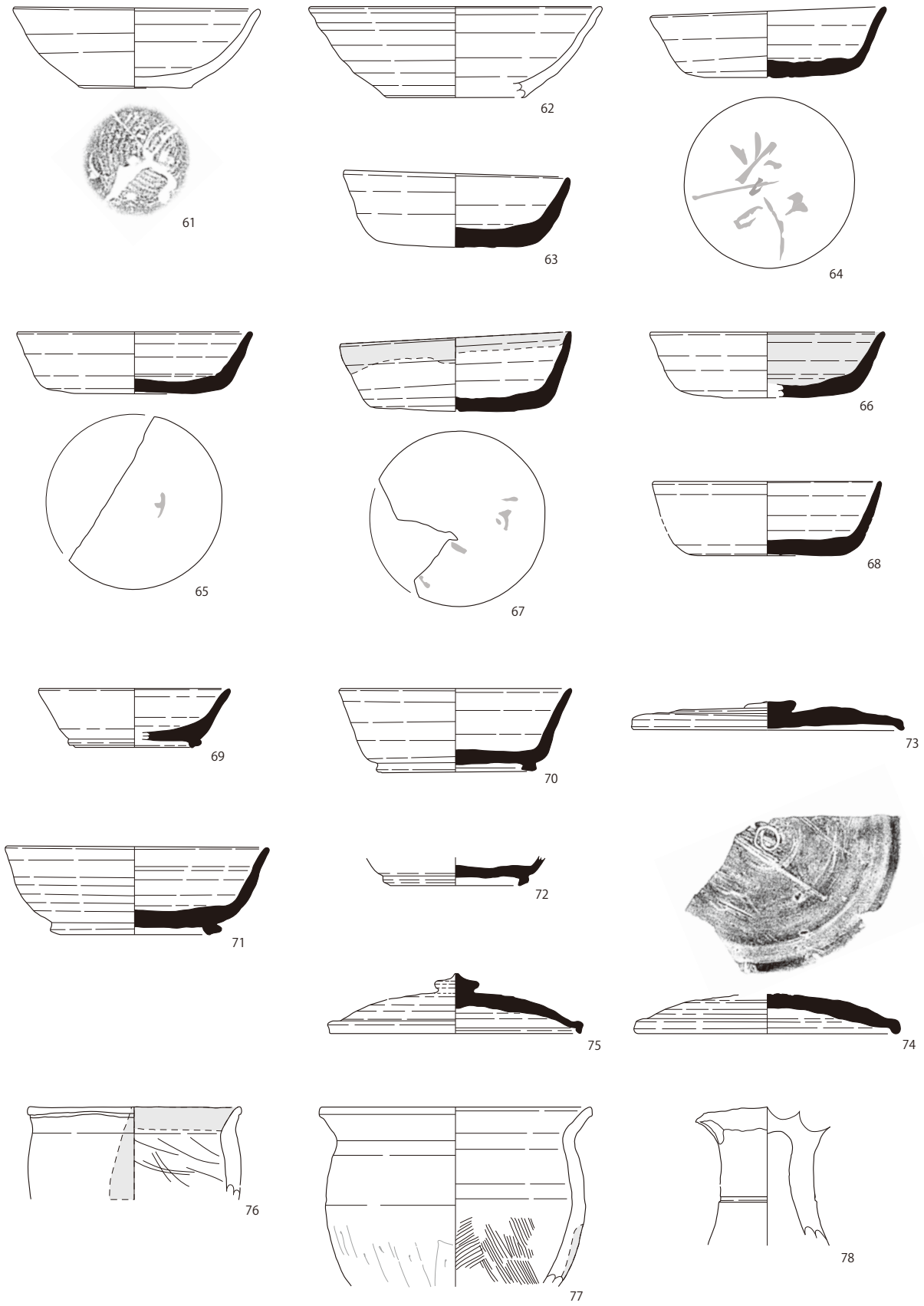
SX18（図 23　図版 10・11）

63～78が出土遺物である。63～75は須恵器、76・77は土師器である。63～68は杯Ａで、底面はいずれも回転ヘラ切りである。口縁端部は、66のみ僅かに外反するが、他のものに外反は見られない。64は内面の底部と体部の接合部に、凹みが見られる。64～67の底面には墨書があり、64は「□□（中ヵ）」、65は文字判読不明、67は「□（阿ヵ）/□」である。66の内面には煤と油煙、67は口縁部外内面ともに油煙が付着する。68は焼成不良の生焼けで、体部外面が剥離する。69～72は杯Ｂで、底面はヘラ切り後に高台が貼り付けされる。69～71は口縁端部に外反のない器形である。69は器高が低い器形で、推定口径9.8㎝、推定底径6.9㎝、推定器高3.1㎝を測る。内面のほぼ全体に緑色の自然釉、体部外面に透明に近い自然釉がかかる。70は器壁のあるしっかりとした高台が付く。口縁部の一部が欠損するのみで、残存率（80%）は高く、推定口径11.9㎝、底径8.3㎝、器高4.3㎝を測る。71は焼成不良の生焼けで、大振りな器形である。推定口径13.5㎝、底径8.9㎝、器高4.6㎝を測る。



52・53:SX09　54:SX10　55～60:SX11

図22　遺物実測図4



61:SX11　62:SX17　63～78:SX18

0　1:3　20cm

図23　遺物実測図5

72は底部で、外面に自然釉、内面に自然釉薬と白濁色の付着物が見られる。73～75は蓋である。73は器高の低い器形で、つまみは扁平でつぶれたような宝珠形、口縁端部のかえり側面はきれいに面取りされる。口縁部を一部欠損するのみで、残存率（85%）が高く、推定口径13.9㎝、器高1.6㎝を測る。74は天井部～口縁端部で、つまみは欠損し、口縁端部のかえりは低くて丸みがある。75のつまみは形状のよい宝珠形で、口縁部はやや反り気味であるが、口縁端部のかえり側面は面取りされる。76・77は小型甕で、76は口縁部、77は口縁部～胴部である。76の口縁端部は外反器形で、やや器壁が厚くなる。外面と口縁端部内面には煤の付着が見られる。77は口縁部がくの字状に開く器形で、外内面ともに摩耗が著しい。出土遺物は、8世紀後半～末頃に相当すると考えられる。

78は時代が異なるが、弥生時代の高杯の脚部と思われる。脚部のほぼ中央部に櫛状工具による沈線が一周めぐる。外面には鮮やかな赤彩が施されており、内面にも赤彩の施されていた痕跡が残る。残存器高は7.3㎝を測る。弥生時代後期の法仏式に相当する可能性が高い。平安時代に、意図的に弥生時代の土器が混入された可能性が考えられる。

SX21（図24　図版11）

SX21の出土遺物は、79～87である。79～81は須恵器、82～87は土師器である。79・80は杯Ａで、いずれも口縁端部が僅かに外反する器形で、底面は回転ヘラ切りである。79は残存率（80%）が高く、推定口径11.1㎝、底径7.2㎝、器高3.5㎝を測る。80の口縁端部内面には、油煙の付着が見られる。81は蓋で、つまみは宝珠形で、口縁端部のかえりは低いが丸みを持っている。82・83は甕の口縁部である。82は口縁部がくの字状に開く器形で、端部は平坦である。84～86は小型甕の口縁部～胴部で、いずれも口縁部がくの字状に開く器形で、84の口縁部は段状となる。84・86の口縁端部はやや内傾する。84の口縁部内面には油煙、85・86の口縁部内面には煤の付着が見られる。85の外面には煤が付着し、剥離が著しい。87は鍋の口縁部である。口縁部がくの字状に開く器形で、口縁端部が内側へ突出する。外面に煤の付着が見られる。出土遺物は、8世紀末頃～9世紀前半に相当すると考えられる。

その他

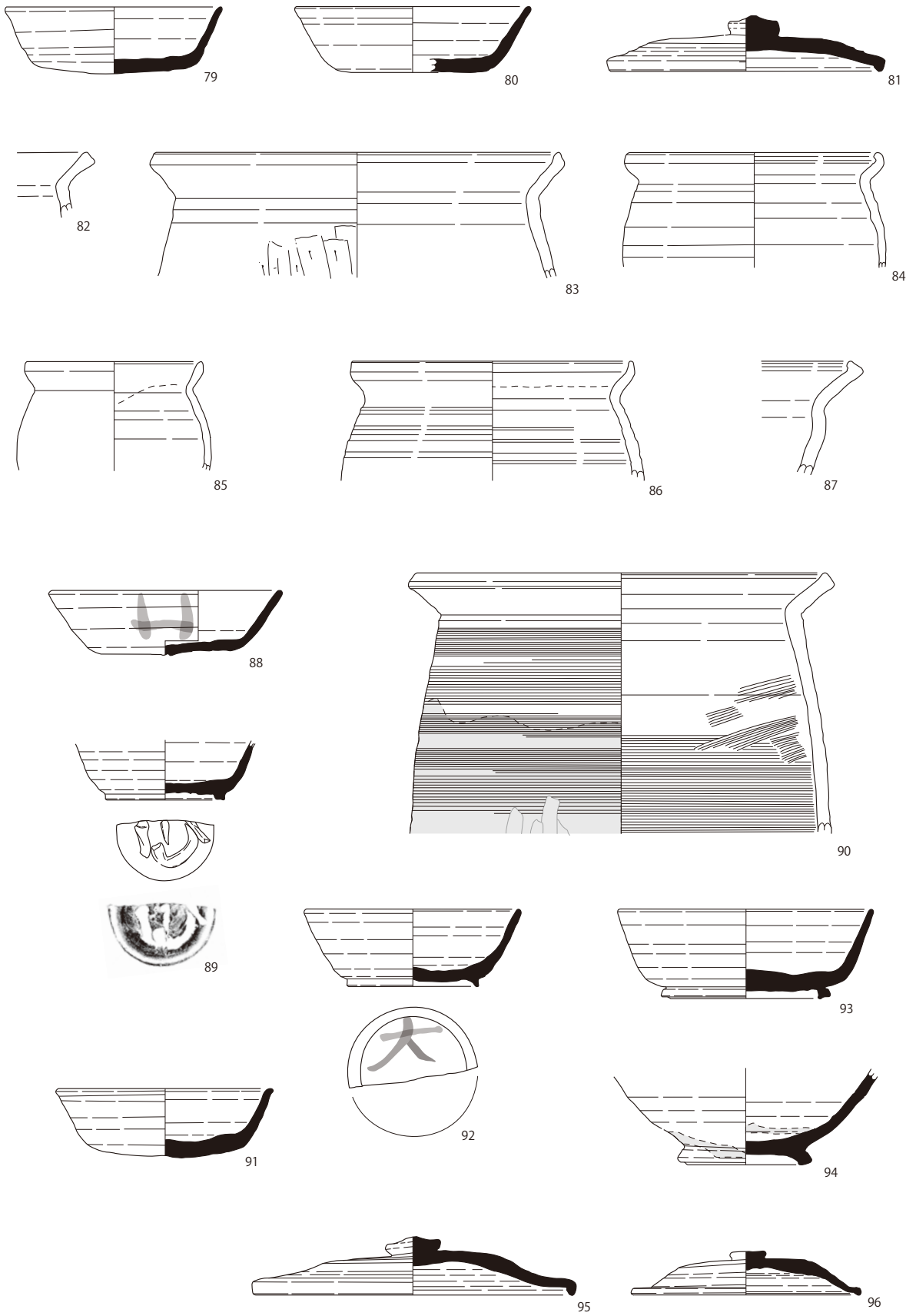
その他の遺構出土遺物（図20　図版8）

30はSD20から出土した土師器の椀Ａである。体部～底部の破片で、底面は唯一の左方向の回転糸切りである。9世紀中頃～後半に相当すると考えられる。SD20は、L7～M7グリッドにかけて位置する東西に長軸をとる平面「冖」状を呈する狭長な溝である。

包含層等出土遺物（図24・25　図版11・12）

88～90は遺構検出の際に、88はI7グリッド、89はJ7グリッド、90はM7グリッドから出土した。88は須恵器の杯Ａで、口縁部に外反のない器形である。底面はヘラ切りで、推定口径11.8㎝、底径6.7㎝、器高3.3㎝を測る。体部外面に文字判読不明の墨書がある。89は須恵器杯Ｂの体部～底部である。底面はヘラ切り後に高台が貼り付けられるが、高台内に判読不明の刻書がある。90は土師器甕の口縁部～胴部で、くの字状に口縁部が開く器形である。口縁端部は平坦で、胴部外面には煤が付着する。

91～100はⅡ・Ⅲ層の掘り下げの際に、95・100はH7グリッド、92・98はI7グリッド、91・96はL7グリッド、93・94・99はM7グリッドから出土した。91～96は須恵器、97～100は土師器である。91は杯Ａで、口縁端部が僅かに外反する器形である。底面は回転ヘラ切りで、推定口径11.0㎝、底径8.1㎝、器高3.6㎝を測る。92～94は杯Ｂである。92・93は体部が直に立ち上がり、口縁端部に外反のない器形で、底面はヘラ切り後に高台が貼り付けられる。92の底面には墨書「大□」がある。94は体部～底部で、底面は回転糸切り後に器壁の厚い高台が貼り付けられるが、つぶれて外側に開くような形状となっている。内面には油煙が付着する。95・96は蓋である。95は完形で、つまみは扁平な宝珠形、



79～87：SX21　88～90：A区検出面　91～96：A区包含層

0　1：3　20cm

図24　遺物実測図6

口縁端部のかえりは丸みをおびる。大振りで口径16.4㎝、器高3.0㎝を測る。96のつまみは扁平でつぶれたような形状の宝珠形で、口縁端部のかえりは低くて丸い。小振りで推定口径11.6㎝、器高2.3㎝を測る。97は鍋の口縁部～胴部で、口縁部がくの字状に開く器形である。口縁端部は直立し、幅広の凹線がめぐる。外面には煤が付着する。98は椀Ａの体部～底部で、体部外面に墨書「□（半ヵ）」がある。99は皿Ｂである。体部は浅くて底径が広く、高台に高さが器形である。底面は回転糸切り後に高台が貼り付けされる。推定口径14.6㎝、推定底径9.5㎝、器高5.6㎝を測る。口縁部内面には赤彩が施されていた痕跡が残っている。また、内面の一部に油煙、外面に煤の付着が見られる。100は灰釉陶器椀の口縁部である。全体的に器壁が薄く、口縁端部が僅かに外反する。外内面ともに緑色に近い釉が施されている。

101は表土掘削の際に出土した杯Ａで、口縁端部に外反のない器形である。底面は回転ヘラ切りである。口径12.2㎝、推定底径8.2㎝、器高3.7㎝を測る。底面に墨書「中□（村カ）」がある。102は排土出土の椀Ａで、口縁端部に外反のない器形である。外内面ともに赤彩が施される。103は表採遺物であるが、緑釉陶器椀Ｂの底部である。底面の切り取り技法は不明であるが、高台が貼り付けられる。器壁は厚いが、焼成・胎土はやや軟質気味で、底面以外の外面・内面に緑釉が施される。

105～108は土錘で、Ⅱ・Ⅲ層の掘り下げの際に、105～107はI７グリッド、108はM７グリッドから出土した。105～107はやや膨らみを持った寸胴形で、表面は綺麗に成形され、端部は面取りされる。106の一方の端部には、摩滅欠損が見られる。105は長さ6.4㎝×幅3.0㎝、孔径1.4㎝、重さ56.2g、106は長さ6.6㎝×幅3.2㎝、孔径1.6㎝、重さ60.3g、107は長さ6.5㎝×幅3.2㎝、孔径1.4㎝、重さ59.8gを測る。108は丸みをおびた卵形で、表面は手ごね成形のままで、端部は面取りされる。長さ6.3㎝×幅5.6㎝、孔径1.6㎝、重さ183.3gを測る。

包含層等から出土した須恵器や土師器は、9世紀前半～後半に相当すると考えられる。施釉陶器については、9世紀代と考えられる。

２　Ｂ区

竪穴建物

SI05（図26　図版12）

110～116が出土遺物である。110～113は須恵器、114・115は土師器、116は土器状を呈する土製品の底部である。110・111は杯Ｂで、口縁端部に外反のない器形である。110の底面は回転ヘラ切り後に高台が貼り付けられる。残存率（90%）が高く、推定口径11.0㎝、底径6.8㎝、器高3.9㎝を測る。111の底面切り離しの技法は不明であるが、高台が貼り付けられる。112・113は蓋で、112は天井部～口縁部、113は天井部の破片である。112のつまみは上面に凹みがあって扁平ながらも宝珠形の形状を保っており、口縁端部のかえりは丸みをおびている。113のつまみは宝珠形で、つまみを含めた外面全面に緑色の自然釉がかかる。114・115は鍋の口縁部と思われる。くの字状に開く器形で、115の口縁部と胴部の接合部外面には1条の沈線がめぐるように見える。114の外面には油煙状となった煤が付着している。116は手ごね成形で、底面は未調整ながら平坦である。器壁が厚く、内面が滑らかであることから、鋳型であった可能性が考えられる。出土遺物は、8世紀後半～末頃に相当すると考えられる。

溝

SD23（図26　図版13）

117が出土遺物で、土師器椀Ａの底部である。底面は回転糸切りで、外内面ともに赤彩が施される。9世紀後半～10世紀初めに相当すると考えられる。

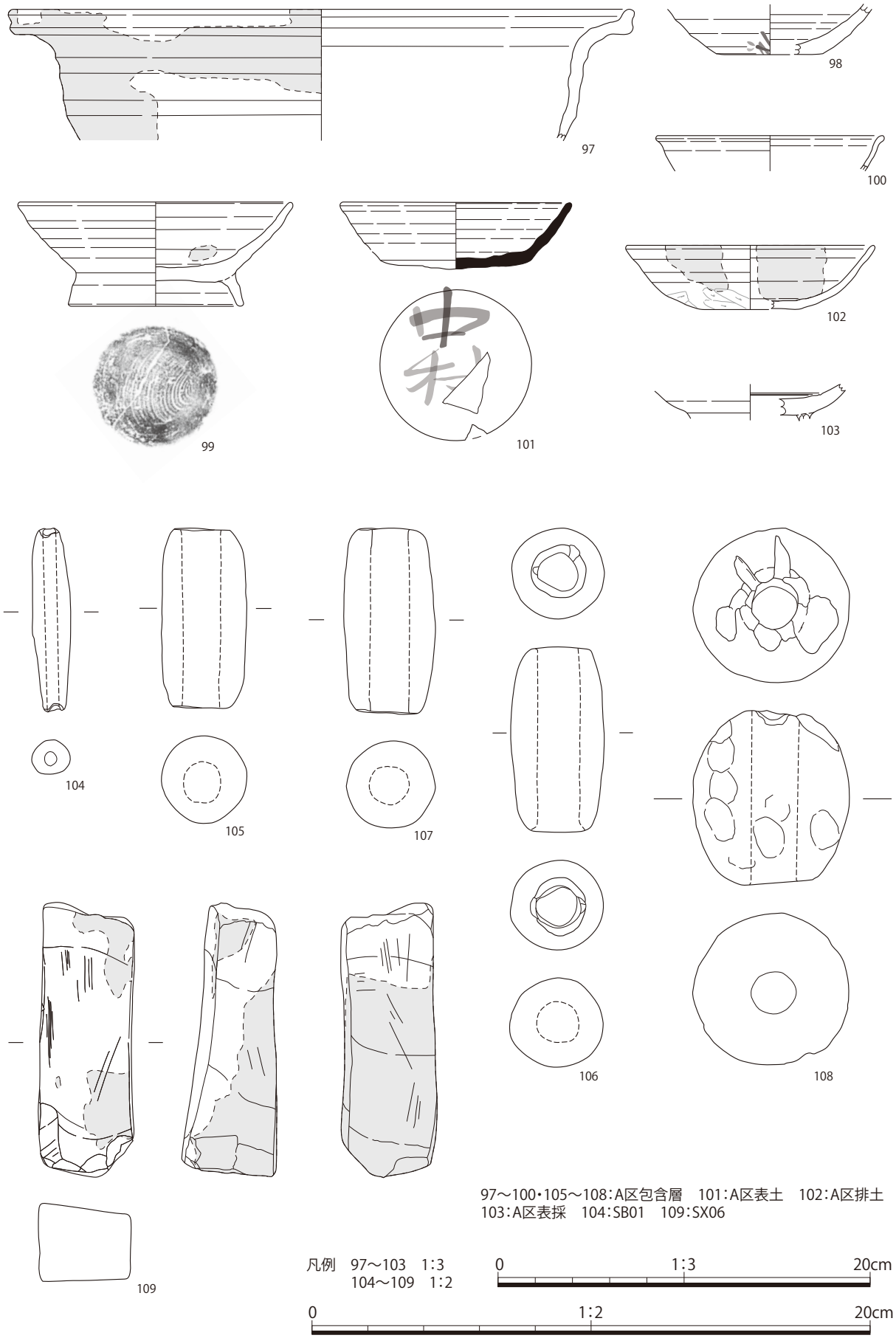
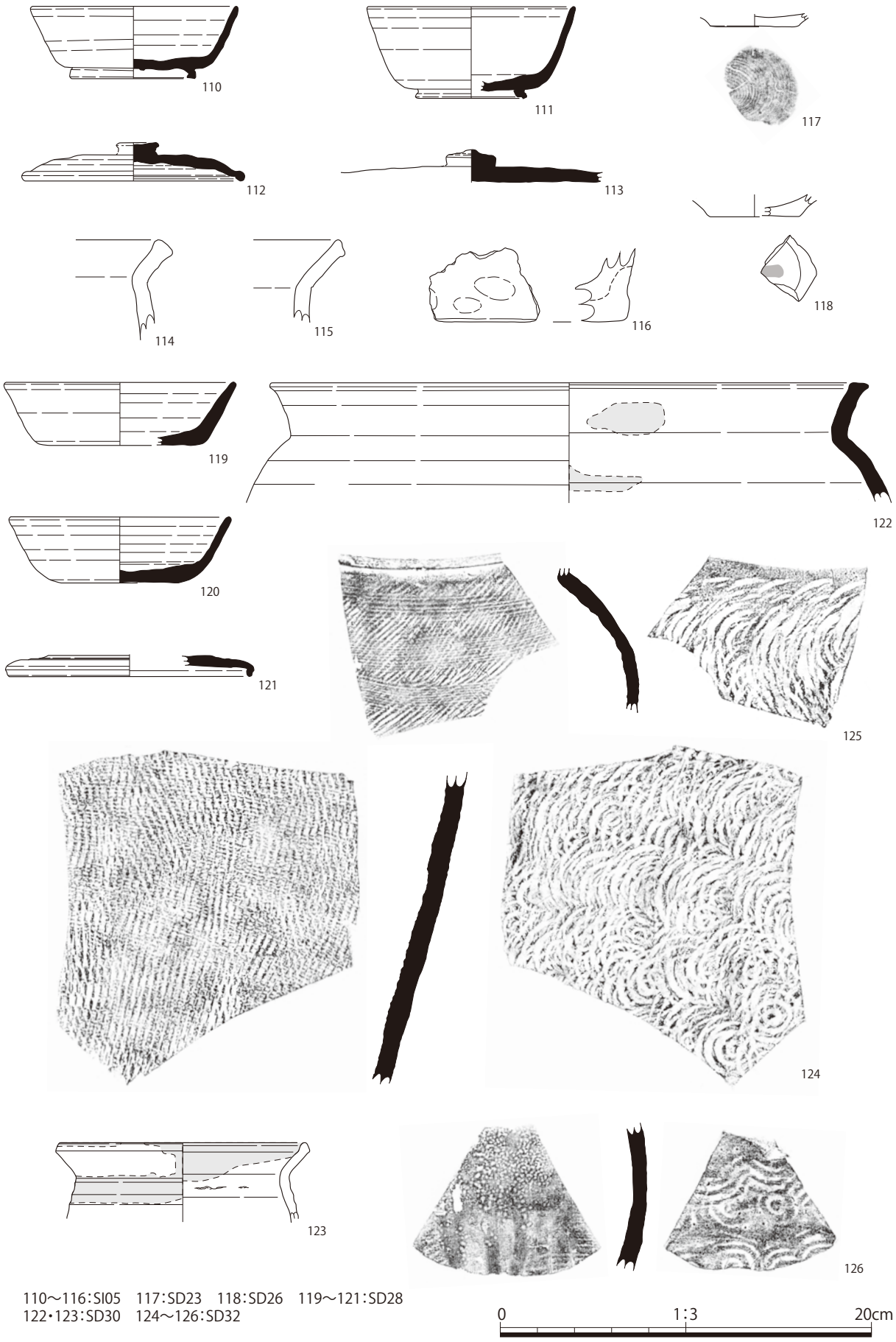

97
98
100
99
101
102
103
104
105
107
106
108
109
97～100・105～108：A区包含層　101：A区表土　102：A区排土
103：A区表採　104：SB01　109：SX06
凡例　97～103　1：3
104～109　1：2
0
1：3
20cm
0
1：2
20cm

図25　遺物実測図7



110～116:SI05　117:SD23　118:SD26　119～121:SD28
122・123:SD30　124～126:SD32

図26　遺物実測図8

SD26（図 26　図版 13）

118が出土遺物である。土師器椀Ａの底部である。底面は回転糸切りで、文字判読不明の墨書がある。9世紀中頃～後半に相当すると考えられる。

SD28（図 26　図版 13）

119～121が出土遺物で、いずれも須恵器である。119・120は杯Ａで、口縁端部に外反のない器形である。底面は回転ヘラ切りである。121は蓋の天井部～口縁部で、口縁端部のかえりはほぼ直で丸みはない。かえりの内面には僅かながら緑色の自然釉が付着し、口縁部外面には重ね焼きの痕が残っている。出土遺物は、8世紀後半に相当すると考えられる。

SD32（図 26・27　図版 13）

124～131が出土遺物である。124～130は須恵器、131は土師器である。124・125は甕の胴部で、外面はタタキ、内面には当て具痕が残る。124は大甕である可能性が高い。126は壺の胴部で、外面はカキメ、内面には当て具痕が残るが、外面全面に濃い緑色の自然釉がべったりと流れ、内面にも僅かに自然釉が見られる。127は杯Ａで、口縁端部に外反のない器形である。底面は回転ヘラ切りで、残存率（70％）が高く、推定口径11.8㎝、推定底径8.2㎝、器高2.9㎝を測る。128・129は杯Ｂで、口縁端部に外反のない器形である。底面は回転ヘラ切り後に高台が貼り付けされる。129は大振りのとてもしっかりしたもので残存率（90％）も高く、口径13.1㎝、底径9.0㎝、器高3.9㎝を測る。130は蓋で、天井部全体にゆがみがあり、扁平な器形となる。つまみは宝珠形で、口縁端部のかえりの外面は面取りされ、内面には丸みがある。外面に自然釉、内面に墨痕が残っており、転用硯であった可能性がある。131は鍋の口縁部で、くの字状に開く器形である。口縁端部は直立し外面に1条の凹線がめぐる。出土遺物は、8世紀後半～末頃に相当すると考えられる。

土坑

SK40・41（図 27　図版 13）

132はSK40、133・134がSK41の出土遺物である。132は須恵器杯Ｂの底部で、底面は回転ヘラ切り後に高台が貼り付けられる。内面に墨痕跡の付着が残り、平滑であることから、転用硯であった可能性が高い。133は須恵器、134は土師器である。133は蓋の天井部～口縁部で、口縁端部のかえりは低く面取りされている。外面には緑色の自然釉が見られる。134は小型甕の口縁部で、くの字状に開く器形である。口縁端部はやや内傾して丸みをおびる。SK40・41の出土遺物は、8世紀後半～9世紀前半に相当すると考えられる。

ピット

SP172（図 27　図版 13）

135が出土遺物である。須恵器の杯Ｂで、口縁端部に外反のない器形である。焼成は不良で、底面には高台が貼り付けされる。8世紀後半に相当すると考えられる。

SP181（図 27　図版 13）

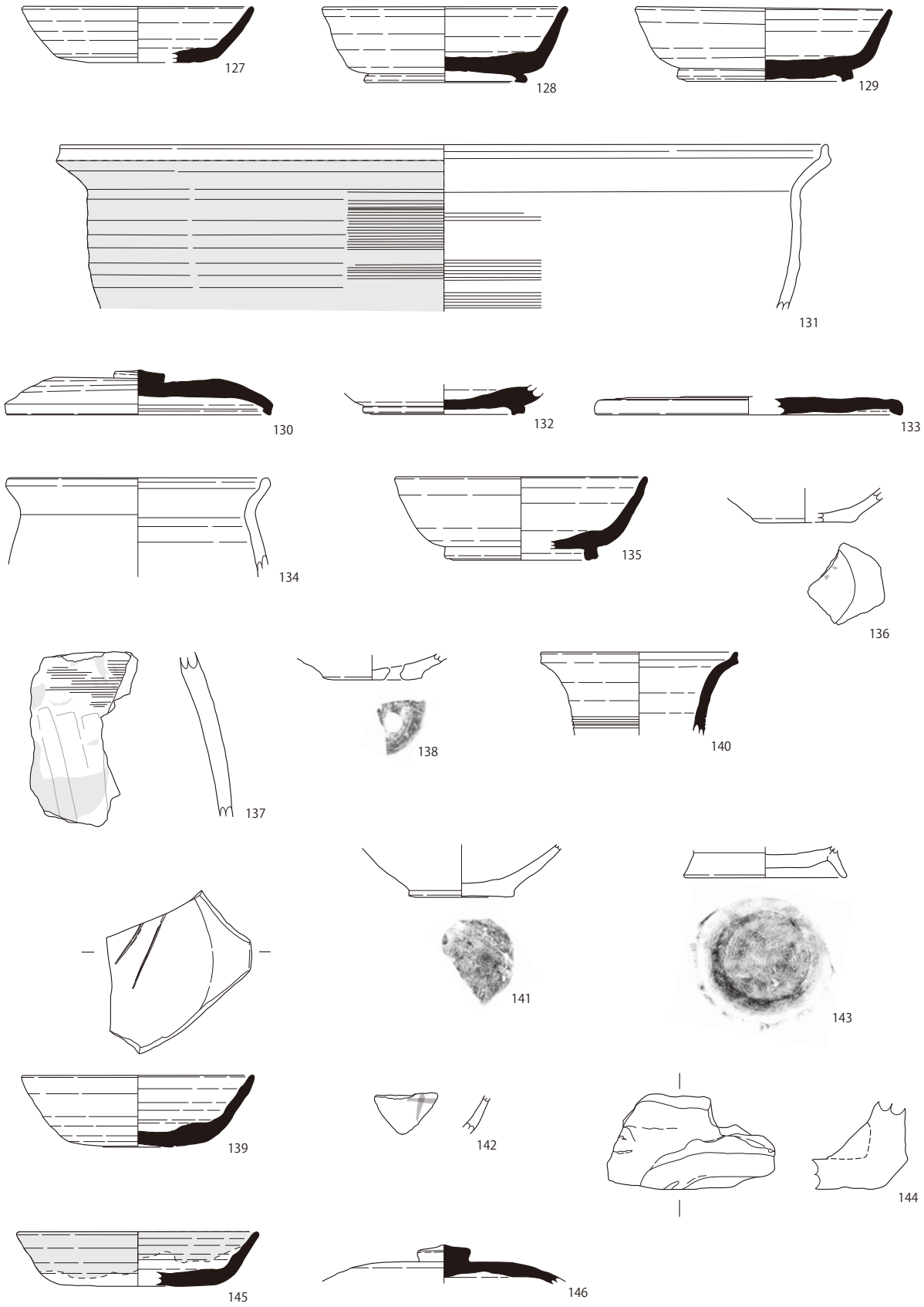
136が出土遺物で、土師器椀Ａの底部である。底面は回転糸切りで、文字判読不明の墨書がある。9世紀後半～10世紀初めに相当すると考えられる。

SP193（図 27　図版 13）

137が出土遺物で、土師器甕の胴部である。外面に墨痕が残っている。8世紀後半～末頃に相当すると考えられる。

SP203（図 27　図版 13）

138が出土遺物で、土師器椀Ａの底部である。底面は回転糸切りで、焼成後に施された直径1.2㎝



127～131:SD32　132:SK40　133・134:SK41　135:SP172
136:SP181　137:SP193　138:SP203　139:SP213
140:SP221　141～144:SX12　145・146:SX13

0　1:3　20cm

図27　遺物実測図9

の円形穿孔がある。9世紀末頃～10世紀初めに相当すると考えられる。

SP213（図27　図版13）

139が出土遺物である。須恵器の杯Ａで、口縁端部に外反のない器形である。底面は回転ヘラ切りで、底部内面にヘラ記号「＝」がある。8世紀後半～末頃に相当すると考えられる。

SP221（図27　図版14）

140が出土遺物で、須恵器壺の口頸部である。外傾器形で、口縁端部は直立する。緻密な作りで、外内面ともに自然釉が見られる。9世紀中頃～後半に相当すると考えられる。

不明遺構

SX12・13・14（図27・28　図版14）

141～144・161がSX12の出土遺物である。141～143は土師器、144は土器状を呈する土製品の一部と思われる。141は椀Ａの体部～底部で、底面は回転糸切りである。外内面ともに摩耗が著しい。142は土師器椀の口縁部で、口縁端部は外反しない。口縁部外面に墨書「十」がある。143は皿Ｂの底部で、杯や椀に比べて体部が開く器形と考えられる。底面は回転糸切り後に高台が貼り付けられ、高台は高さを持ち高さ1.0㎝を測る。外内面ともに摩耗しているが、外面の一部に赤彩の痕跡が残っている。144は手ごね成形で、器壁が厚く、内面に滑らかな部分が認められることから、SI05出土の116と同様に鋳型であった可能性が考えられる。161は凹石と思われる。円形で扁平な石の一部に凹みがあり、凹み面の反対となる面はとても滑らかである。石材は安山岩である。出土遺物は、9世紀末頃～10世紀初めに相当すると考えられる。

145・146がSX13の出土遺物で、須恵器である。145は杯Ａで、体部内面に丸みがあるが、口縁端部に外反のない器形である。底面は回転ヘラ切りで、口縁部外内面ともに煤が付着する。底部内面はやや平滑で、転用硯であった可能性がある。146は蓋の天井部で、つまみは宝珠形である。外内面ともに摩耗する。出土遺物は、8世紀後半～末頃に相当すると考えられる。

その他

その他の遺構出土遺物（図26　図版13）

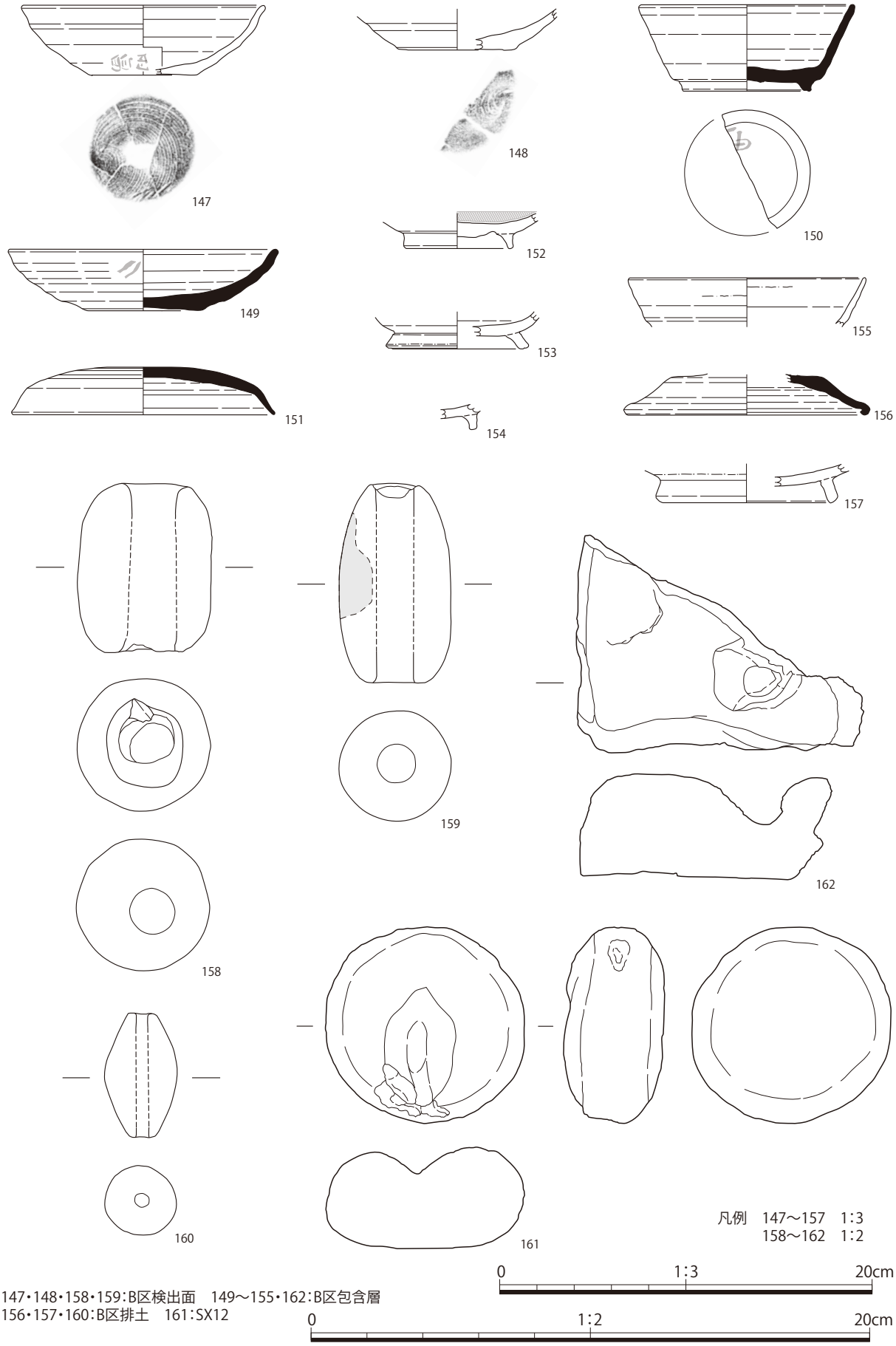
122･123はSD30の出土遺物である。SD30は､J11グリッドに位置する東西方向に延びる細長い溝で、122は須恵器、123は土師器である。122は甕の口縁部、123は小型甕の口縁部で、いずれもくの字状に開く器形である。123の口縁端部はやや内傾して丸みをおびる。123の体部上半外面と口縁部内面には煤の付着が見られる。

SD30は、出土遺物から8世紀末頃に相当すると考えられる。

包含層等出土遺物（図28　図版14）

147･148は遺構検出の際に出土した土師器で､147はI11グリッド､148はJ11グリッドから出土した。147は椀Ａ、148は椀Ａの体部～底部である。147は口縁端部が僅かに外反する器形で、底面は回転糸切り、外内面に赤彩が施される。底部外面に墨書「□（阿ヵまたは町ヵ）畠」がある。148の底面は回転糸切りで、墨痕が付着する。

149～155・162はⅡ・Ⅲ層の掘り下げの際に、149はJ11グリッド、150・153はK11グリッド、151・154はL11グリッド、152・155・162はM11グリッドから出土した。149～151は須恵器、152は土師器、153･154は緑釉陶器、155は灰釉陶器、162は石製品である。149は杯Ａで、口縁端部に外反はないが、口縁部が外傾して横広がりとなる器形である。底面は回転ヘラ切りで、口縁部外面に文字判読不明の墨書がある。150は杯Ｂで、口縁端部に外反のない器形である。底面は回転ヘラ切り後に高台が貼り付けられ、墨書「□（神ヵ）」がある。151は蓋で、口縁端部の器壁が薄くてほぼ直立する器形となる。



147・148・158・159:B区検出面　149～155・162:B区包含層
156・157・160:B区排土　161:SX12

図28　遺物実測10

152は椀Ｂで、底面にはしっかりとした高さのある高台が付き、高台の高さ8.0㎜を測る。体部外面に赤彩の施された痕跡が残り、内面には黒色処理が施される。153・154は椀Ｂの底部である。いずれも硬質でしっかりとした焼成で、底面に高台が貼り付けられる。153の体部～高台までの外面と内面に薄い緑色の緑釉、154の底面を含めた外内面ともに緑釉が施される。155は椀の口縁部で、器壁が薄く（厚さ3.0㎜）、口縁端部に外反のない器形である。外内面ともに灰釉が施される。162の粗粒安山岩製の用途不明の石製品で、表面が滑らかで凹みが見られる。

156・157は排土出土の遺物である。156は須恵器蓋の天井部～口縁部で、口縁端部のかえりはやや内傾して丸みをおびる。外内面に墨痕がある。157は灰釉陶器で、杯類系の底部である。底面にしっかりとした高さのある高台が貼り付けられ、高台の高さ1.2㎝を測る。体部外面に灰釉が施されていた痕跡が残っている。底部内面は平坦なうえに平滑である。

158～160は土錘である。遺構検出の際に、158はJ11グリッド、159はM11グリッドから出土した。160は排土出土である。158は膨らみを持った寸胴形で、表面は摩耗して一部に剥落が見られる。一方の端部には摩滅欠損が見られ、穴が大きく広がっている。159は両端がやや細くなる樽形で、端部は面取りされる。表面は摩耗し、一方の端部には欠損が見られる。B46は両端が細くなる提灯形で、表面は摩耗する。158は長さ6.0㎝×幅4.8㎝、孔径1.9㎝、重さ124.7g、159は長さ7.1㎝×幅4.0㎝、孔径1.9㎝、孔径1.3㎝、重さ106.0g、160は長さ4.4㎝×幅2.6㎝、孔径0.5㎝、重さ24.7gを測る。

包含層等出土遺物のなかでは、151が器形や特徴からTK217併行の須恵器と考えられ，唯一7世紀中頃といえるが、他の須恵器や土師器は、150・156は8世紀末頃～9世紀前半、147は9世紀中頃、148・149・152は9世紀中頃～後半に相当すると考えられる。施釉陶器については、9世紀代と考えられる。（基峰）

表1　調査遺構一覧表(1)

地区	遺構番号	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
A区	SB01	K7・L7	(不整方形)	(5.19)	5.03	-	平安/9c後～末	土師器(小型甕・椀A・土錘等)/掘立柱建物	図8・19・25
A区	SB01-SP112	K7	楕円形	0.61	0.33	0.23	-	-	-
A区	SB01-SP113	K7	円形	(0.51)	0.50	0.11	-	-	-
A区	SB01-SP115	K7	(円形)	0.52	(0.40)	0.11	-	-	-
A区	SB01-SP116	K7	(不整円形)	0.47	(0.40)	0.15	-	-	-
A区	SB01-SP117	L7	楕円形	0.63	0.50	0.17	-	-	-
A区	SB01-SP123	L7	円形	0.62	0.57	0.19	-	-	-
A区	SB01-SP124	K7	楕円形	0.78	0.64	0.25	-	-	-
A区	SI01	J7	隅丸方形	3.50	3.35	0.12	奈良・平安/8c末～9c前	須恵器(杯A・椀A・杯B・蓋等)・土師器(甕・小型甕等)/竪穴建物	図9・19
A区	SI01-P1	J7	不整形	1.20	0.50	0.07	-	-	-
A区	SI01-P2	J7	円形	0.42	0.36	0.37	-	-	-
A区	SI01-P3	J7	円形	0.28	0.25	0.08	-	-	-
A区	SI01-P4	J7	円形	0.31	0.26	0.06	-	-	-
A区	SI01-P5	J7	円形	0.30	0.27	0.04	-	-	-
A区	SI01-P6	J7	円形	0.24	0.24	0.02	-	-	-
A区	SI01-P7	J7	円形	0.17	0.15	0.06	-	-	-
A区	SI01-P8	J7	円形	0.26	0.21	0.12	-	-	-
A区	SI01-P9	J7	円形	0.41	0.40	0.17	-	-	-
A区	SI01-P10	J7	円形	0.33	0.29	0.14	-	-	-
A区	SI01-P11	J7	(不整長方形)	0.50	(0.37)	0.04	-	-	-
A区	SI03	K7・L7	(方形)	2.86	(1.28)	0.23	平安/9c後～10c初	須恵器(壺・杯B)・土師器(鍋・杯A・椀A)/竪穴建物	図10・19・20
A区	SD01	H7	南北方向	(0.80)	(0.63)	0.11	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD02	H7	南北方向	(1.60)	0.37	0.15	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD03	H7・I7	東西方向	4.66	0.85	0.08	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD04	H7・I7	東西方向	(1.19)	0.25	0.04	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD05	I7	南北方向	(2.64)	0.20	0.15	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD06	I7	南北方向	(3.00)	0.23	0.15	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD07	I7	南北方向	2.63	0.33	0.12	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD08	I7	南北方向	2.62	0.45	0.19	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD09	I7・J7	南北方向	(6.15)	0.28	0.21	平安/9c末～10c初	須恵器(杯B)/溝	図11・20
A区	SD10	I7	南北方向	(3.77)	0.31	0.16	(奈良・平安)/	なし/溝	図11・20
A区	SD11	I7・J7	南北方向	(4.02)	0.26	0.18	(奈良・平安)/	なし/溝	図11
A区	SD13	J7	南北方向	(3.74)	0.54	0.15	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD14	J7	東西方向	(1.32)	0.30	0.08	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD15	K7	南北方向	(0.64)	0.23	0.08	平安/9c後～10c初	須恵器(甕)/溝	図11・20
A区	SD16	L7	南北方向	5.14	0.30	0.09	平安/9c後～末	土師器(小型甕)/溝	図8・19
A区	SD17	L7	南北方向	(3.94)	0.33	0.05	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD18	L7	南北方向	2.88	0.26	0.05	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD19	L7	南北方向	(1.58)	0.36	0.09	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SD20	L7・M7	東西方向	(9.06)	0.40	0.07	平安/9c中～後	土師器(椀A)/溝	図20
A区	SD21	M7	南北方向	(5.78)	0.60	0.28	(奈良・平安)/	なし/溝	-
A区	SK01	H7	円形	0.51	0.51	0.25	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK02	H7	(円形)	0.67	(0.49)	0.30	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK03	H7	楕円形	0.53	0.40	0.12	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK04	H7	不整楕円形	0.83	0.53	0.13	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK05	H7	円形	0.90	0.85	0.20	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK06	H7	楕円形	0.64	0.53	0.27	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK07	H7	円形	0.60	0.60	0.34	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK08	H7	不整長方形	1.94	1.15	0.11	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK09	H7	楕円形	0.81	0.53	0.07	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK10	H7・I7	不整円形	0.89	0.78	0.08	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK11	I7	細長不整楕円形	0.99	0.65	0.08	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK12	I7	(細長楕円形)	(0.75)	0.40	0.17	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK13	I7	楕円形	1.03	0.66	0.09	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK14	I7	円形	0.76	0.71	0.21	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK15	I7	楕円形	1.00	0.89	0.28	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK16	I7	不整方形	0.93	0.80	0.20	(奈良・平安)/	なし/土坑	-
A区	SK17	J7	楕円形	0.81	0.52	0.29	平安/9c前～中	土師器(鍋)/土坑	図12・20
A区	SK18	I7・J7	(円形)	0.79	(0.56)	0.14	(奈良・平安)/	なし/土坑	-

表1　調査遺構一覧表(2)

地区	遺構番号	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
A区	SK19	J7	(楕円形)	(1.18)	(0.54)	0.23	平安/9c後	須恵器(双耳瓶)/土坑	図12・20
A区	SK20	J7	(円形)	(0.70)	0.59	0.16	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK22	I7	不整円形	1.18	(1.03)	0.20	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK23	I7	楕円形	1.12	0.92	0.23	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK24	J7	(細長不整楕円形)	(1.12)	0.82	0.16	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK25	J7	楕円形	1.12	0.65	0.20	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK26	J7	細長楕円形	1.60	0.72	0.11	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK27	J7	双円形	1.20	0.68	0.27	奈良/8c後～末	須恵器(杯A・杯B・蓋等)/土坑	図12・20
A区	SK28	L7	(楕円形)	(0.58)	0.48	0.07	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK29	M7	(細長楕円形)	0.74	(0.25)	0.10	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK30	M7	(細長不整楕円形)	(0.92)	0.58	0.08	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK31	L7	楕円形	0.90	0.64	0.21	平安/9c後～10c初	須恵器(甕)・土師器(椀A)/土坑	図12・20・21
A区	SK32	K7	楕円形	0.88	0.64	0.22	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK33	I7	(不整方形)	(0.97)	0.87	0.13	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK34	M7	細長不整楕円形	1.30	0.72	0.09	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK35	M7	細長楕円形	0.74	0.41	0.12	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK36	M7	不整方形	1.68	1.21	0.27	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK46	M7	円形	0.84	(0.67)	0.21	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SK47	I7	楕円形	0.80	0.59	0.14	(奈良・平安)/	なし/土坑	−
A区	SP01	H7	楕円形	0.20	0.17	0.18	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP02	H7	楕円形	0.18	0.15	0.07	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP03	H7	楕円形	0.39	0.33	0.18	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP04	H7	円形	0.27	0.27	0.30	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP05	H7	(円形)	(0.53)	(0.31)	0.37	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP06	H7	(不整楕円形)	(0.79)	0.52	0.20	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP07	I7	円形	0.27	0.25	0.05	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP08	I7	楕円形	0.47	0.43	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP09	H7	(円形)	0.37	(0.27)	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP10	H7	楕円形	0.33	0.29	0.08	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP11	H7・I7	楕円形	0.57	0.49	0.05	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP12	I7	円形	0.50	0.45	0.11	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP13	I7	楕円形	0.38	0.28	0.10	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP14	I7	(楕円形)	(0.26)	0.20	0.08	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP15	I7	(楕円形)	(0.45)	0.35	0.18	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP16	I7	円形	0.24	0.22	0.04	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP17	I7	円形	0.25	0.23	0.04	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP18	I7	円形	0.39	0.37	0.06	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP19	I7	円形	0.31	0.31	0.18	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP20	I7	(楕円形)	(0.40)	(0.20)	0.08	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP21	I7	円形	0.43	0.42	0.22	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP22	I7	円形	0.14	0.14	0.03	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP23	I7	(円形)	0.32	(0.17)	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP24	I7	楕円形	0.46	0.38	0.06	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP25	I7	楕円形	0.24	0.21	0.06	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP26	I7	円形	0.16	0.16	0.04	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP27	I7	円形	0.16	0.15	0.04	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP28	I7	楕円形	0.57	0.39	0.19	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP29	I7	不整円形	0.44	0.39	0.06	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP30	I7	(円形)	0.45	(0.27)	0.23	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP31	I7	円形	0.26	0.24	0.25	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP32	I7	円形	0.28	0.25	0.10	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP33	I7	円形	0.25	0.23	0.14	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP34	I7	円形	0.36	0.32	0.30	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP35	I7	楕円形	0.40	0.33	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP36	I7	(楕円形)	(0.38)	0.30	0.08	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP37	I7	円形	0.29	0.27	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP38	I7	円形	0.25	0.21	0.11	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP39	I7	(円形)	0.42	(0.30)	0.19	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP40	I7	円形	0.30	0.28	0.16	(奈良・平安)/	なし/ピット	−
A区	SP41	I7	円形	0.23	0.20	0.12	(奈良・平安)/	なし/ピット	−

表1　調査遺構一覧表(3)

地区	遺構番号	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
A区	SP42	I7	(楕円形)	(0.33)	0.33	0.21	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP43	I7	楕円形	0.78	0.62	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP44	I7	(方形)	0.43	(0.24)	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP45	I7	円形	0.29	0.25	0.15	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP46	I7	(楕円形)	0.44	(0.22)	0.07	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP47	I7	楕円形	0.72	0.55	0.04	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP48	I7	円形	0.27	0.27	0.18	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP49	I7	楕円形	0.19	0.16	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP50	I7	楕円形	0.15	0.11	0.07	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP51	I7	(円形)	0.20	(0.15)	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP52	J7	楕円形	0.82	0.51	0.29	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP53	J7	楕円形	0.84	0.55	0.19	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP54	J7	(楕円形)	(0.43)	(0.37)	0.18	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP55	J7	楕円形	(0.40)	0.37	0.05	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP57	J7	円形	0.21	0.20	0.04	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP58	I7	(楕円形)	0.56	(0.27)	0.08	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP59	J7	(楕円形)	(0.80)	0.51	0.16	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP60	J7	(楕円形)	(0.54)	0.47	0.22	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP61	J7	(楕円形)	(0.55)	0.40	0.20	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP62	J7	細長不整楕円形	0.86	0.34	0.15	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP63	J7	(円形)	0.62	(0.28)	0.16	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP64	J7	(方形)	0.70	(0.40)	0.15	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP65	J7	楕円形	0.41	0.36	0.08	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP66	J7	楕円形	0.51	0.34	0.16	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP67	J7	不整楕円形	0.75	0.50	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP68	J7	楕円形	0.34	0.29	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP69	J7	楕円形	0.41	0.27	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP70	J7	楕円形	0.37	0.33	0.20	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP71	J7	楕円形	0.28	0.24	0.26	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP72	J7	(円形)	0.46	(0.21)	0.14	奈良・平安/8c後～9c前	なし/ピット	図12
A区	SP73	J7	円形	0.33	(0.27)	0.33	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP74	J7	円形	0.33	0.31	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP75	J7	楕円形	0.42	0.20	0.18	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP76	J7・K7	(楕円形)	(0.50)	0.42	0.27	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP77	J7	円形	0.20	0.18	0.16	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP78	J7	楕円形	(0.58)	0.48	0.33	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP79	K7	(楕円形)	0.33	0.14	0.22	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP80	J7	楕円形	(0.50)	0.40	0.21	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP81	J7	(不整楕円形)	0.52	(0.30)	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP82	J7	円形	0.27	0.24	0.27	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP83	J7	円形	0.49	0.44	0.30	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP84	J7	楕円形	0.53	0.45	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP85	J7	不整楕円形	0.80	0.51	0.07	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP86	J7	円形	0.42	0.39	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP87	L7	円形	0.20	0.18	0.29	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP88	L7	楕円形	0.42	0.29	0.13	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP89	L7	円形	0.52	0.47	0.22	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP90	L7	不整楕円形	0.54	0.32	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP91	L7	円形	0.21	0.21	0.16	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP92	L7	楕円形	0.50	0.43	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP93	L7	楕円形	0.37	0.27	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP94	L7	楕円形	0.29	0.26	0.46	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP95	L7	円形	0.21	0.21	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP96	L7	円形	0.23	0.19	0.18	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP97	L7	円形	0.25	0.21	0.12	平安/9c後～10c初	なし/ピット	図12
A区	SP98	L7・M7	楕円形	0.49	0.39	0.21	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP99	M7	楕円形	0.39	0.28	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP100	M7	楕円形	0.21	0.15	0.08	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP101	M7	楕円形	(0.34)	0.27	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP102	M7	楕円形	0.35	(0.24)	0.06	(奈良・平安)／	なし/ピット	−

表1　調査遺構一覧表(4)

地区	遺構番号	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
A区	SP103	M7	円形	0.18	0.15	0.07	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP104	L7・M7	楕円形	0.28	0.20	0.28	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP105	M7	(楕円形)	0.28	(0.23)	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP106	M7	楕円形	0.54	0.42	0.17	平安/9c後～10c初	土師器(椀A)/ピット	図12・21
A区	SP107	M7	円形	0.31	0.29	0.29	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP108	M7	円形	0.22	0.19	0.05	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP109	L7	楕円形	0.22	0.18	0.13	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP110	L7	円形	0.28	0.25	0.25	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP111	L7	円形	0.24	0.22	0.12	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP114	K7	円形	0.23	0.21	0.08	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP118	L7	楕円形	0.30	0.24	0.23	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP119	K7	円形	0.21	0.19	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP120	K7	円形	0.18	0.18	0.05	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP121	K7	楕円形	0.25	(0.18)	0.04	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP122	K7	円形	0.24	0.21	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP125	K7	円形	0.35	0.35	0.20	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP126	K7	楕円形	0.21	0.16	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP127	L7	円形	0.30	0.27	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP128	L7	円形	0.26	0.22	0.15	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP129	L7	円形	0.29	0.26	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP130	L7	楕円形	0.31	0.25	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP131	L7	楕円形	0.27	0.17	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP132	L7	円形	0.25	0.23	0.23	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP133	L7	楕円形	0.41	0.29	0.28	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP134	L7	円形	0.23	0.21	0.15	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP135	K7	楕円形	0.24	0.18	0.15	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP136	K7	楕円形	0.29	0.21	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP137	K7	円形	0.38	0.34	0.04	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP138	L7	楕円形	0.47	0.39	0.16	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP139	L7	(楕円形)	0.52	(0.18)	0.18	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP140	L7	楕円形	0.50	0.40	0.13	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP141	L7	楕円形	0.74	0.39	0.26	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP142	L7	不整楕円形	0.60	0.40	0.28	平安/9c後～10c初	土師器(杯Aor椀A)/ピット	図12・21
A区	SP143	L7	(円形)	(0.40)	(0.14)	0.29	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP144	L7	円形	0.22	0.20	0.24	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP145	L7	楕円形	0.37	0.30	0.06	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP146	L7	楕円形	0.30	0.24	0.04	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP147	L7	円形	0.24	0.24	0.24	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP148	M7	円形	0.32	0.28	0.27	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP149	M7	円形	0.24	0.20	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP150	M7	不整楕円形	0.91	0.52	0.12	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP151	L7	楕円形	0.36	0.29	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP152	L7	楕円形	0.37	0.29	0.16	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP154	L7	楕円形	0.28	0.24	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP155	L7	円形	0.30	0.26	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP156	M7	楕円形	0.35	0.30	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP157	M7	円形	0.21	0.21	0.08	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP158	M7	楕円形	0.34	0.24	0.35	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP159	M7	(円形)	0.55	(0.41)	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP160	M7	楕円形	0.50	0.44	0.12	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP161	M7	楕円形	0.43	0.34	0.22	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP162	M7	楕円形	0.23	0.19	0.23	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP163	M7	楕円形	0.39	0.27	0.07	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP164	M7	楕円形	0.34	0.27	0.15	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP165	M7	円形	0.37	0.35	0.39	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP166	M7	双円形	0.63	0.26	0.08	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP167	M7	円形	0.27	0.25	0.06	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP168	J7	(楕円形)	0.70	(0.18)	0.05	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP176	L7	楕円形	0.28	0.19	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
A区	SP177	L7	(細長楕円形)	(0.52)	0.42	0.24	奈良・平安/8c末～9c前	土師器(小型甕)/ピット	図12・21

表1　調査遺構一覧表(5)

地区	遺構番号	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
A区	SP250	K7	楕円形	0.23	0.19	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP251	L7	円形	0.21	0.19	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP252	I7	楕円形	0.25	0.19	0.04	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP253	J7	楕円形	0.38	0.33	0.12	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP254	M7	円形	0.20	0.17	0.27	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP255	K7	楕円形	0.32	0.24	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP257	L7	楕円形	0.37	0.27	(0.30)	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SP258	M7	円形	0.28	0.25	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	−
A区	SX01	I7	不整形	1.75	1.03	0.08	(奈良・平安)／	なし/不明遺構	−
A区	SX02	I7	(隅丸方形)	0.88	0.80	0.04	平安/9c中～後	土師器(甕)/不明遺構	図12・21
A区	SX03	I7	細長楕円形	1.17	0.63	0.18	奈良/8c末	須恵器(蓋)/不明遺構	図13・21
A区	SX04	I7	細長不整楕円形	0.97	0.50	0.11	(平安/9c頃)	なし/不明遺構	−
A区	SX05	J7	細長不整楕円形	0.97	0.47	0.15	(奈良・平安)／	なし/不明遺構	図12
A区	SX06	J7	(長方形)	(1.34)	0.60	0.23	奈良/8c後	須恵器(杯A)・石製品(砥石)/不明遺構	図13・21・25
A区	SX07	J7	(不整方形)	1.15	(0.77)	0.14	(奈良・平安)／	なし/不明遺構	−
A区	SX08	J7	(不整方形)	1.85	(1.04)	0.09	(奈良・平安)／	なし/不明遺構	−
A区	SX09	I7	(細長楕円形)	(1.02)	0.58	0.14	奈良・平安/8c後～9c前	土師器(甕・小型甕)/不明遺構	図13・21・22
A区	SX10	L7	不整楕円形	1.63	0.71	0.07	平安/9c末～10c初	土師器(鍋)/不明遺構	図13・22
A区	SX11	L7	(不整長方形)	(3.68)	3.40	0.21	平安/9c後	須恵器(壺・杯B)・土師器(甕・小型甕・椀A等)/不明遺構	図14・22・23
A区	SX11-P1	L7	楕円形	0.50	0.41	0.07	−	−	−
A区	SX11-P2	L7	楕円形	0.46	0.44	0.14	−	−	−
A区	SX11-P3	L7	楕円形	0.41	0.35	0.18	−	−	−
A区	SX11-P5	L7	円形	0.20	0.19	0.07	−	−	−
A区	SX11-P6	L7	円形	0.27	0.27	0.09	−	−	−
A区	SX11-P7	L7	円形	0.27	0.25	0.12	−	−	−
A区	SX11-P8	L7	円形	0.20	0.18	0.08	−	−	−
A区	SX17	L7・M7	方形	2.65	2.55	0.10	平安/9c中～後	土師器(椀A)/竪穴状遺構	図14・23
A区	SX17-P1	L7	円形	0.28	0.26	0.22	−	−	−
A区	SX17-P2	L7	円形	0.22	0.20	0.05	−	−	−
A区	SX17-P3	L7	不整形	1.60	0.40	0.10	−	−	−
A区	SX17-P4	L7	円形	0.23	0.20	0.05	−	−	−
A区	SX17-P5	L7	円形	0.28	0.22	0.06	−	−	−
A区	SX17-P6	L7	円形	0.19	0.18	0.03	−	−	−
A区	SX17-P7	L7	円形	0.27	0.24	0.08	−	−	−
A区	SX17-P8	L7	円形	0.21	0.19	0.05	−	−	−
A区	SX17-P9	L7	円形	0.34	0.30	0.07	−	−	−
A区	SX17-P10	L7	円形	0.27	0.25	0.10	−	−	−
A区	SX18	M7	不明	(1.98)	(1.80)	(0.65)	奈良/8c後～末	須恵器(杯A・杯B・蓋等)・土師器(小型甕等)/不明遺構	図13・23
A区	SX21	K7・L7	不整方形	4.66	4.20	0.18	奈良・平安/8c末～9c前	須恵器(杯A・蓋等)・土師器(甕・小型甕・鍋等)/竪穴状遺構	図15・24
A区	SX21-P1	K7	円形	0.26	0.24	0.11	−	−	−
A区	SX21-P2	K7	円形	0.24	0.21	0.11	−	−	−
A区	SX21-P3	K7	円形	0.31	0.31	0.18	−	−	−
A区	SX21-P4	K7	不整形	1.48	1.05	0.09	−	−	−
A区	SX21-P5	L7	(円形)	0.26	0.25	0.09	−	−	−
A区	SX21-P6	L7	(楕円形)	0.35	0.22	0.06	−	−	−
A区	SX21-P7	L7	細長楕円形	0.45	0.25	0.04	−	−	−
A区	SX21-P8	L7	(楕円形)	0.30	(0.26)	0.11	−	−	−
A区	SX21-P9	K7・L7	不整形	1.00	0.74	0.13	−	−	−
A区	SX21-P10	K7・L7	細長不整楕円形	0.61	0.21	0.07	−	−	−
A区	SX21-P11	K7	楕円形	0.21	0.15	0.10	−	−	−
A区	SX21-P12	K7	楕円形	0.37	0.28	0.12	−	−	−
A区	SX21-P13	K7	円形	0.58	0.52	0.06	−	−	−
A区	SX21-P14	K7	楕円形	0.34	0.25	0.04	−	−	−
A区	SX21-P15	L7	円形	0.34	0.30	0.04	−	−	−
A区	SX21-P16	K7	不整円形	0.26	0.24	0.05	−	−	−
A区	SX21-P17	K7	不整形	1.32	0.88	0.05	−	−	−
A区	SX21-P18	K7	円形	0.20	0.18	0.07	−	−	−
A区	SX21-P19	K7	円形	0.21	0.19	0.09	−	−	−
A区	SX21-P20	K7	円形	0.28	0.28	0.07	−	−	−
A区	SX21-P21	K7	細長不整楕円形	0.63	0.25	0.14	−	−	−

表1　調査遺構一覧表(6)

地区	遺構番号	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
A区	SX21-P22	K7	楕円形	(0.28)	0.22	0.09	－	－	－
A区	SX22	J7	南北方向	1.92	(0.48)	0.18	(奈良・平安)／	なし/不明遺構	－
B区	SI05	K11・L11	(隅丸方形)	3.11	(1.71)	0.16	奈良/8c後～末	須恵器(杯B・蓋等)・土師器(鍋)/竪穴建物	図17・26
B区	SI05-P1	K11	(円形)	(0.60)	(0.23)	0.16	－	－	－
B区	SI05-P2	K11	円形	0.49	0.43	0.23	－	－	－
B区	SI05-P3	K11	円形	0.37	0.31	0.06	－	－	－
B区	SI05-P4	K11	円形	0.30	0.30	0.22	－	－	－
B区	SI05-P5	L11	円形	0.44	0.34	0.22	－	－	－
B区	SD22	M11	南北方向	(1.68)	0.30	0.08	(奈良・平安)／	なし/溝	－
B区	SD23	L11	南北方向	(2.40)	0.58	0.16	平安/9c後～10c初	土師器(椀A)/溝	図18・26
B区	SD24	L11	東西方向	3.04	0.24	0.15	(奈良・平安)／	なし/溝	－
B区	SD25	K11	南北方向	(2.21)	0.30	0.08	(奈良・平安)／	なし/溝	－
B区	SD26	K11	東西方向	2.42	0.20	0.15	平安/9c中～後	土師器(椀A)/溝	図18・26
B区	SD27	K11	東西方向	2.75	0.33	0.05	(奈良・平安)／	なし/溝	－
B区	SD28	K11	南北方向	(1.09)	0.35	0.08	奈良/8c後	須恵器(杯A・蓋)/溝	図17・26
B区	SD29	J11	南北方向	(0.44)	0.40	0.07	(奈良・平安)／	なし/溝	－
B区	SD30	J11	東西方向	2.64	0.43	0.14	奈良/8c末	須恵器(甕)・土師器(小型甕)/溝	図26
B区	SD31	J11	東西方向	1.23	0.26	0.08	(奈良・平安)／	なし/溝	－
B区	SD32	K11	南北方向	(2.60)	1.70	0.17	奈良/8c後～末	須恵器(甕・大甕・壺・杯A・杯B・蓋)・土師器(鍋)/溝	図17・26・27
B区	SK37	L11	細長楕円形	0.66	0.35	0.15	(奈良・平安)／	なし/土坑	－
B区	SK38	K11	細長楕円形	1.00	0.48	0.11	(奈良・平安)／	なし/土坑	－
B区	SK39	K11	細長楕円形	0.95	0.40	0.09	(奈良・平安)／	なし/土坑	－
B区	SK40	K11	細長楕円形	1.29	0.39	0.24	奈良・平安/8c後～9c前	須恵器(杯B)/土坑	図17・27
B区	SK41	K11	細長楕円形	1.26	0.57	0.16	奈良・平安/8c後～9c前	須恵器(蓋)・土師器(小型甕)/土坑	図17・27
B区	SK42	J11	(円形)	0.78	(0.39)	0.23	(奈良・平安)／	なし/土坑	－
B区	SK43	J11	細長楕円形	0.83	0.49	0.09	(奈良・平安)／	なし/土坑	－
B区	SK44	J11	楕円形	0.67	0.59	0.18	(奈良・平安)／	なし/土坑	－
B区	SK45	I11・J11	楕円形	0.64	0.55	0.16	(奈良・平安)／	なし/土坑	－
B区	SP169	M11	円形	0.23	0.23	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP170	M11	円形	0.36	0.32	0.23	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP171	M11	楕円形	0.39	0.27	0.23	(奈良/8c後)	なし/ピット	図17
B区	SP172	M11	楕円形	0.35	0.28	0.19	奈良・8c後	須恵器(杯B)/ピット	図17・27
B区	SP173	M11	楕円形	0.32	0.25	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP174	M11	円形	0.26	0.24	0.05	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP175	M11	円形	0.30	0.28	0.18	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP178	M11	円形	0.27	0.25	0.06	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP179	L11	楕円形	0.26	0.20	0.22	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP180	L11	円形	0.18	0.18	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP181	L11	楕円形	0.34	0.27	0.09	平安/9c後～10c初	土師器(椀A)/ピット	図17・27
B区	SP182	L11	円形	0.26	0.26	0.14	(平安/9c後～10c初)	なし/ピット	図17
B区	SP183	L11	楕円形	0.29	0.24	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP184	L11	楕円形	0.23	0.19	0.11	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP185	L11	楕円形	0.24	0.20	0.23	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP186	L11	円形	0.33	0.30	0.23	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP187	L11	(楕円形)	0.54	(0.38)	0.32	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP188	L11	円形	0.37	0.33	0.10	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP189	L11	(円形)	0.40	(0.30)	0.20	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP190	L11	楕円形	0.35	0.25	0.13	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP191	L11	楕円形	0.36	0.26	0.14	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP192	L11	楕円形	0.39	0.30	0.15	(奈良/8c後～末)	なし/ピット	図18
B区	SP193	L11	楕円形	0.45	0.34	0.21	奈良/8c後～末	土師器(甕)/ピット	図18・27
B区	SP194	L11	円形	0.36	0.33	0.20	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP195	L11	円形	0.28	0.24	0.09	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP196	L11	円形	0.27	0.27	0.12	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP197	L11	円形	0.26	0.22	0.04	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP198	L11	円形	0.27	0.27	0.17	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP199	L11	円形	0.34	0.30	0.16	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP200	L11	円形	0.26	0.24	0.12	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP201	L11	円形	0.22	0.20	0.13	(奈良・平安)／	なし/ピット	－
B区	SP202	L11	円形	0.25	0.22	0.18	(奈良・平安)／	なし/ピット	－

表1　調査遺構一覧表(7)

地区	遺構番号	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
B区	SP203	L11	円形	0.27	0.25	0.12	平安/9c末～10c初	土師器(椀A)/ピット	図18・27
B区	SP204	L11	楕円形	0.37	0.30	0.27	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP205	K11	円形	0.24	0.22	0.14	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP206	K11	円形	0.23	0.23	0.18	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP207	K11	円形	0.21	0.21	0.12	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP208	K11	円形	0.19	0.19	0.11	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP209	K11	楕円形	0.22	0.17	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP210	K11	(楕円形)	(0.18)	0.17	0.07	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP211	K11	円形	0.14	0.12	0.07	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP212	K11	円形	0.39	0.36	0.13	(奈良/8c後～末)	なし/ピット	図18
B区	SP213	K11	円形	0.39	0.33	0.05	奈良/8c後～末	須恵器(杯A)/ピット	図18・27
B区	SP214	K11	楕円形	0.28	0.24	0.07	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP215	K11	円形	0.29	0.27	0.06	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP216	K11	楕円形	0.24	(0.16)	0.12	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP217	K11	円形	0.27	0.24	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP218	K11	円形	0.31	0.27	0.12	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP219	K11	円形	0.17	0.15	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP220	L11	円形	0.29	0.27	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP221	L11	円形	0.26	0.22	0.18	平安/9c中～後	須恵器(壺)/ピット	図18・27
B区	SP222	K11	(円形)	0.32	(0.25)	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP223	K11	(円形)	0.34	(0.26)	0.10	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP224	K11	円形	0.26	0.23	0.16	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP225	K11	楕円形	0.32	0.26	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP226	K11	円形	0.34	0.32	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP227	K11	円形	0.27	0.27	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP228	K11	円形	0.44	0.39	0.23	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP229	K11	円形	0.29	0.27	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP230	J11	円形	0.25	0.24	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP231	J11	円形	0.41	0.37	0.11	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP232	J11	円形	0.24	0.22	0.15	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP233	J11	円形	0.33	0.32	0.23	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP234	J11	円形	0.28	0.26	0.08	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP235	J11	楕円形	0.26	0.14	0.11	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP236	J11	(円形)	0.32	(0.29)	0.17	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP237	J11	(不整楕円形)	0.56	(0.44)	0.14	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP238	J11	(円形)	0.72	(0.30)	0.10	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP239	J11	楕円形	0.32	0.26	0.11	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP240	J11	楕円形	0.40	0.34	0.15	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP241	J11	円形	0.28	0.28	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP242	J11	円形	0.40	0.38	0.11	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP243	J11	(円形)	0.22	(0.11)	0.08	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP244	J11	(楕円形)	(0.34)	0.34	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP245	J11	円形	0.24	0.21	0.13	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP246	J11	円形	0.17	0.15	0.06	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP247	J11	円形	0.25	0.23	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP248	J11	円形	0.26	0.26	0.09	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP249	J11	円形	0.41	0.38	0.08	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP256	K11	(円形)	0.41	(0.28)	0.24	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP259	K11	円形	0.21	0.21	0.15	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SP260	K11	円形	0.27	0.27	0.10	(奈良・平安)/	なし/ピット	-
B区	SX12	M11	楕円形	0.85	0.68	0.06	平安/9c末～10c初	土師器(椀A・皿B)・石製品(凹石)/不明遺構	図18・27・28
B区	SX13	M11	(隅丸方形)	3.50	(0.48)	0.28	奈良/8c後～末	須恵器(杯A・蓋等)/(不明遺構or竪穴状遺構)	図18・27
B区	SX14	M11	(方形)	(2.13)	(0.45)	0.20	(奈良)/	なし/(不明遺構or竪穴状遺構)	図18
B区	SX16	J11	(細長不整楕円形)	(1.25)	1.21	0.15	(奈良・平安)/	なし/不明遺構	-
B区	SX20	L11	不明	(1.10)	(0.28)	0.25	(奈良・平安)/	なし/不明遺構	-

表2　土器等観察表(1)

報告No.	地区	種類 器種	遺構番号 層位	法量(cm) ( )内:復元	成形・調整・装飾等 内面	成形・調整・装飾等 外面	胎土	焼成	色調	残存部 残存率	備考
1	A	土師器 小型甕	SB01 SP116	口径:-、器高:(3.1) 底径:-	ナデ	カキメ、煤付着	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:10YR5/3にぶい黄褐 外面:2.5Y3/2黒褐	胴部(頸部付近) -	
2	A	土師器 小型甕	SB01 SP124	口径:-、器高:(6.0) 底径:(4.9)	ロクロナデ、煤付着	ロクロナデ、煤付着 底:ヘラケズリ	密 雲母・石英・海綿骨針・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR7/2にぶい黄橙	胴～底部 -	
3	A	土師器 椀A	SB01 SP124	口径:(11.9)、器高:4.3 底径:(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転糸切り	密 石英・長石・白色粒	不良	内面:7.5YR7/6橙 外面:5YR7/6橙	口～底部 30%	
4	A	土師器 小型甕	SD16	口径:(10.0)、器高:(5.4) 底径:-	ロクロナデ、煤付着	ロクロナデ、ケズリ、黒斑	密 石英、海綿骨針、白色粒	良好	内面:10YR7/2にぶい黄橙 外面:2.5YR7/4淡赤橙	口～胴部 10%	
5	A	須恵器 杯A	S101 カマド	口径:(11.2)、器高:3.5 底径:(7.7)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り	密 長石・白色粒	良好	内面:5Y6/1灰 外面:2.5Y6/1黄灰	口～底部 10%	
6	A	須恵器 杯A	S101	口径:(12.6)、器高:3.1 底径:(6.5)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り	密 雲母・白色粒・赤色粒	良好	内面:2.5Y8/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	口～底部 35%	
7	A	須恵器 杯A	S101 P2	口径:(12.2)、器高:3.4 底径:(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り	粗 長石・白色粒	やや良好	内面:10Y6/1灰 外面:5Y6/1灰	口～底部 25%	
8	A	須恵器 杯A	S101	口径:(13.0)、器高:(3.2) 底径:(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ、墨痕 底:ヘラ切り	密 石英・白色粒	良好	内面:5Y6/1灰 外面:5Y6/1灰	口～底部 20%	
9	A	須恵器 杯Aor椀A	S101 P10	口径:-、器高:(1.1) 底径:(6.1)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転糸切り	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	底部 10%	底:墨書「□□(作ヵ)」
10	A	須恵器 杯B	S101	口径:(10.3)、器高:4.1 底径:(6.1)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り高台貼付	密 白色粒	良好	内面:5Y7/1灰白 外面:2.5Y6/1黄灰	口～底部 30%	
11	A	須恵器 杯B	S101 P9	口径:(11.7)、器高:3.3 底径:(7.5)	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り高台貼付	密 白色粒	良好	内面:5Y7/1灰白 外面:5Y7/1灰白	口～底部 40%	
12	A	須恵器 蓋	S101	口径:(12.5)、器高:(2.1) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:2.5Y5/1黄灰	天～口縁部 10%	
13	A	須恵器 蓋	S101	口径:12.4、器高:(2.1) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	密 海綿骨針・白色粒	良好	内面:7.5Y7/1灰白 外面:5Y7/1灰白	天～口縁部 50%	外:墨書「□(中ヵ)田」
14	A	須恵器 蓋	S101	口径:(12.9)、器高:(1.6) 底径:-	ロクロナデ、ナデ、墨痕	ロクロナデ、ヘラケズリ	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:2.5Y6/1黄灰	天～口縁部 20%	転用硯
15	A	土師器 甕	S101	口径:(27.0)、器高:(5.1) 底径:-	ロクロナデ、煤付着 摩耗、剥離	ロクロナデ、カキメ	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:10YR7/2にぶい黄橙 外面:10YR8/3浅黄橙	口縁部 5%以下	
16	A	土師器 甕	S101 P9	口径:(23.2)、器高:(4.8) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ	密 長石・赤色・白色粒	良好	内面:10YR7/4にぶい黄橙 外面:7.5YR8/4浅黄橙	口縁部 5%以下	
17	A	土師器 小型甕	S101	口径:(10.7)、器高:(6.0) 底径:-	ナデ、煤付着	ナデ、煤付着	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:10YR8/3浅黄橙 外面:10YR6/2灰黄褐	口～胴部 10%	
18	A	土師器 小型甕	S101	口径:(13.9)、器高:(6.7) 底径:-	ロクロナデ、煤付着	ロクロナデ、煤付着	密 雲母・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR6/3にぶい黄橙	口～胴部 20%	
19	A	土師器 小型甕	S101	口径:-、器高:(1.0) 底径:(7.0)	調整不明	ロクロナデ、赤彩 底:ヘラ切り	密 雲母・長石・白色粒	不良	内面:7.5YR7/2明褐灰 外面:7.5Y6/1灰	胴～底部 10%	赤彩色調 2.5YR5/3にぶい赤褐
20	A	弥生土器 壺	S101	口径:-、器高:- 底径:-	ナデ	ナデ	密 雲母・白色粒	良好	内面:10YR6/4にぶい黄橙 外面:10YR6/3にぶい黄橙	口縁部 5%以下	
21	A	須恵器 壺	S103	口径:(13.3)、器高:(8.8) 底径:-	ロクロナデ 白濁色の付着物	ロクロナデ 白濁色の付着物	密 白色粒	良好	内面:7.5GY4/1暗緑灰 外面:N4/灰	口～頸部 40%	
22	A	須恵器 杯B	S103	口径:-、器高:(2.2) 底径:(6.9)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り高台貼付	密 雲母・石英・白色粒・黒色粒	良好	内面:2.5Y8/1灰白 外面:2.5Y7/2灰黄	底部 5%	
23	A	土師器 鍋	S103	口径:-、器高:(3.1) 底径:-	ロクロナデ、煤付着	ロクロナデ、煤付着	密 雲母・石英・白色粒・海綿骨針	良好	内面:10YR6/2灰黄褐 外面:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部 5%以下	
24	A	土師器 杯A	S103	口径:-、器高:(3.0) 底径:5.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転糸切り	密 石英	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR8/2灰白	体～底部 50%	底:墨書「中田」
25	A	土師器 椀A	S103	口径:(12.6)、器高:4.5 底径:6.5	(ミガキ)、油煙付着	ロクロナデ、油煙付着 底:右回転糸切り	密 雲母・長石・白色粒	良好	内面:7.5YR8/4浅黄橙 外面:7.5YR8/4浅黄橙	口～底部 90%	
26	A	土師器 椀A	S103	口径:12.4、器高:4.4 底径:6.0	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ 底:右回転糸切り	密 雲母・長石・白色粒・赤色粒	良好	内面:7.5YR7/4にぶい橙 外面:7.5YR7/3にぶい橙	口～底部 99%	
27	A	土師器 椀A	S103	口径:(12.6)、器高:4.6 底径:5.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底:左回転糸切り	密 雲母・白色粒	良好	内面:2.5Y8/4淡黄 外面:10YR7/3にぶい黄橙	口～底部 30%	
28	A	須恵器 杯B	SD09・10	口径:(11.1)、器高:4.8 底径:(7.0)	ロクロナデ 摩耗	ロクロナデ 摩耗、底:ヘラ切り高台貼付	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:2.5Y8/1灰白 外面:2.5Y8/1灰白	口～底部 45%	
29	A	須恵器 甕	SD15	口径:-、器高:(11.8) 底径:-	当て具痕	タタキ	密 雲母・白色粒	良好	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:2.5Y6/1黄灰	胴部 5%以下	
30	A	土師器 椀A	SD20	口径:-、器高:(1.4) 底径:(5.6)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:左回転糸切り	密 石英・白色粒	良好	内面:10YR8/3浅黄橙 外面:10YR8/3浅黄橙	体～底部 5%	
31	A	土師器 鍋	SK17	口径:-、器高:(5.6) 底径:-	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:7.5YR7/6橙 外面:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部 5%以下	
32	A	須恵器 双耳瓶	SK19	口径:-、器高:(15.6) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ、ケズリ	密 長石・砂粒	良好	内面:N6/灰 外面:N6/灰	肩～胴部 -	
33	A	須恵器 杯A	SK27	口径:11.0、器高:3.3 底径:7.2	ロクロナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り	密 白色粒	良好	内面:N6/灰 外面:N6/灰	口～底部 20%	
34	A	須恵器 杯A	SK27	口径:12.1、器高:(4.1) 底径:(8.4)	(ロクロナデ) 摩耗	(ロクロナデ) 摩耗、(底:ヘラ切り)	密 石英・白色粒	不良	内面:2.5Y7/3淡黄 外面:2.5Y6/1黄灰	口～底部 30%	
35	A	須恵器 杯B	SK27	口径:(12.6)、器高:4.1 底径:8.5	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、自然釉付着 底:ヘラ切り高台貼付	密 石英・白色粒	良好	内面:10YR7/1灰白 外面:N7/灰白	口～底部 30%	
36	A	須恵器 蓋	SK27	口径:-、器高:2.3 底径:-	ロクロナデ	回転ケズリ	密 白色粒	良好	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:2.5Y5/1黄灰	天井部 20%	
37	A	須恵器 甕	SK31	口径:25.2、器高:(9.8) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y6/1黄灰	口～頸部 10%	
38	A	土師器 椀A	SK31	口径:12.6、器高:4.4 底径:5.2	(ナデ)、赤彩	ロクロナデ、赤彩 底:右回転糸切り	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:10YR8/4浅黄橙 外面:2.5Y8/2灰白	口～底部 99%	底:墨書「中田」
39	A	土師器 椀	SK31	口径:13.0、器高:(3.8) 底径:-	ロクロナデ、赤彩	ロクロナデ、赤彩	密 雲母・長石・白色粒	良好	内面:10YR8/4浅黄橙 外面:10YR8/3浅黄橙	口～体部 20%	赤彩色調(7.5YR7/6橙)
40	A	須恵器 蓋	SP72	口径:-、器高:(1.1) 底径:-	ロクロナデ、ナデ、墨痕	ロクロナデ、ヘラケズリ	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y6/1黄灰	天井部 30%	転用硯
41	A	土師器 椀A	SP97	口径:-、器高:(1.8) 底径:(5.6)	ロクロナデ、油煙付着	ロクロナデ 底:右回転糸切り	密 白色粒	良好	内面:5YR6/4にぶい橙 外面:10YR6/2灰黄褐	体～底部 5%	
42	A	土師器 椀A	SP106	口径:(12.0)、器高:4.1 底径:(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 右回転糸切り	密 石英・白色粒	良好	内面:7.5YR7/3にぶい橙 外面:10YR7/2にぶい黄橙	口～底部 40%	外・底:墨書(不明)
43	A	土師器 椀Aor杯A	SP142	口径:-、器高:(1.0) 底径:(5.0)	ロクロナデ、赤彩	ロクロナデ、赤彩 底:右回転糸切り	密 長石・白色粒	良好	内面:2.5Y8/2灰白 外面:10YR8/2灰白	底部 5%以下	底:墨書「□(中ヵ)田」 赤彩色調(7.5YR7/6橙)
44	A	土師器 小型甕	SP177	口径:-、器高:(6.0) 底径:5.9	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ、煤付着 剥離、底:未調整	密 雲母・長石・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR7/2にぶい黄橙	胴～底部 30%	
45	A	土師器 甕	SX02	口径:(20.9)、器高:(7.4) 底径:-	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ、油煙付着	密 雲母・海綿骨針・白色粒	良好	内面:10YR7/2にぶい黄橙 外面:10YR8/2灰白	口～胴部 10%	
46	A	土師器 甕	SX02	口径:(20.0)、器高:(16.1) 底径:-	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ、ケズリ	密 雲母・石英・長石・白色粒	良好	内面:10YR8/2灰白 外面:10YR8/3浅黄橙	口～胴部 10%	
47	A	須恵器 蓋	SX03	口径:-、器高:(1.2) 底径:-	ナデ	ケズリ、墨痕	密 雲母・石英・長石・白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y6/1黄灰	天井部 5%以下	
48	A	須恵器 杯A	SX06	口径:(13.2)、器高:2.8 底径:(9.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:静止ヘラ切り	密 石英・白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	口～底部 10%	
49	A	土師器 甕	SX09	口径:(18.0)、器高:(15.3) 底径:(10.4)	カキメ、ハケメ、ナデ、煤付着	カキメ、ケズリ、煤付着	密 雲母・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR7/4にぶい黄橙	口～胴部 30%	
50	A	土師器 甕	SX09	口径:(23.8)、器高:(8.2) 底径:-	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ、カキメ	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:10YR8/3浅黄橙 外面:10YR8/4浅黄橙	口～胴部 5%以下	
51	A	土師器 小型甕	SX09	口径:(12.8)、器高:14.6 底径:(7.8)	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ、赤彩 底:ヘラケズリ	密 雲母・長石・海綿骨針・白色粒	良好	内面:2.5Y8/2灰白 外面:10YR7/2にぶい黄橙	口～底部 40%	

表2　土器等観察表(2)

報告No.	地区	種類 器種	遺構番号 層位	法量(cm) (　)内:復元	成形・調整・装飾等 内面	成形・調整・装飾等 外面	胎土	焼成	色調	残存部 残存率	備考
52	A	土師器 小型甕	SX09	口径:(14.0)、器高:(8.0) 底径:-	ロクロナデ、煤付着	ロクロナデ、煤付着 剥離	密 石英・白色粒	良好	内面:10YR6/3にぶい黄橙 外面:7.5YR6/4にぶい橙	口縁部 60%	
53	A	土師器 小型甕	SX09	口径:-、器高:(7.9) 底径:6.9	ロクロナデ、ナデ、煤付着	ロクロナデ、ケズリ、煤付着 底:右回転糸切り	粗 雲母・石英・白色粒	良好	内面:10YR8/1灰白 外面:2.5YR7/4淡赤橙	胴～底部 40%	
54	A	土師器 鍋	SX10	口径:(38.0)、器高:(4.3) 底径:-	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ、カキメ	密 雲母・石英・海綿骨針・白色粒	良好	内面:2.5Y8/2灰白 外面:2.5Y8/3淡黄	口～胴部 5%以下	
55	A	須恵器 壺(瓶)	SX11	口径:-、器高:(7.1) 底径:(9.8)	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り高台貼付	密 石英・白色粒	良好	内面:N6/灰 外面:N6/灰	胴～底部 20%	
56	A	須恵器 杯B	SX11	口径:(11.2)、器高:4.1 底径:(7.0)	ロクロナデ、油煙付着	ロクロナデ、油煙付着 底:ヘラ切り高台貼付	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:7.5Y6/1灰 外面:N6/灰	口～体部 50%	
57	A	土師器 甕	SX11	口径:20.4、器高:(7.5) 底径:-	ナデ、ハケメ、煤付着	ナデ、カキメ、煤付着	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:10YR6/4にぶい黄橙 外面:10YR6/4にぶい黄橙	口縁部 10%	
58	A	土師器 甕	SX11 P2	口径:(24.6)、器高:- 底径:-	ロクロナデ、当て具痕、煤付着	ロクロナデ、カキメ、タタキ、煤付着 底:タタキ	密 長石・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:2.5Y7/3浅黄	口～底部 35%	
59	A	土師器 小型甕	SX11	口径:(14.6)、器高:(7.0) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ 剥離	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:10YR4/1褐灰 外面:10YR7/3にぶい黄橙	口～胴部 20%	
60	A	土師器 小型甕	SX11	口径:-、器高:(7.4) 底径:6.0	ナデ、油煙付着	ロクロナデ、ケズリ、油煙付着 底:調整不明	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい橙 外面:7.5YR7/4にぶい橙	胴～底部 30%	
61	A	土師器 椀A	SX11	口径:12.6、器高:4.2 底径:5.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転糸切り	密 雲母・石英・白色粒・赤色粒	良好	内面:7.5YR8/4浅黄橙 外面:7.5YR8/4浅黄橙	口～底部 95%	
62	A	土師器 椀A	SX17	口径:(15.0)、器高:4.7 底径:(7.2)	ロクロナデ、赤彩	ロクロナデ、赤彩 (底:回転糸切り)	密 雲母・石英・長石・白色粒	良好	内面:10YR8/2灰白 外面:10YR8/2灰白	口～底部 10%	
63	A	須恵器 杯A	SX18	口径:(11.6)、器高:4.0 底径:8.2	ロクロナデ 摩耗	ロクロナデ 摩耗、底:右回転ヘラ切り	密 石英・白色粒	やや良好	内面:5Y8/1灰白 外面:5Y8/1灰白	口～底部 60%	
64	A	須恵器 杯A	SX18	口径:12.1、器高:3.7 底径:8.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り	密 石英・海綿骨針・白色粒	良好	内面:7.5Y6/1灰 外面:7.5Y6/1灰	口～底部 80%	底:墨書「□□(中ヵ)」
65	A	須恵器 杯A	SX18	口径:(12.0)、器高:3.2 底径:(9.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り	密 雲母・白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	口～底部 65%	底:墨書(不明)
66	A	須恵器 杯A	SX18	口径:(12.0)、器高:3.4 底径:(9.0)	ロクロナデ、煤・油煙付着	ロクロナデ 底:ヘラ切り	密 雲母・白色粒	良好	内面:2.5Y8/1灰白 外面:2.5Y8/1灰白	口～底部 40%	
67	A	須恵器 杯A	SX18	口径:(11.9)、器高:4.2 底径:(9.2)	ロクロナデ、油煙付着	ロクロナデ、油煙付着 底:右回転ヘラ切り	密 海綿骨針・白色粒	良好	内面:5Y8/1灰白 外面:5Y8/1灰白	口～底部 65%	底:墨書 「□(阿ヵ)/□」
68	A	須恵器 杯A	SX18	口径:(11.7)、器高:3.9 底径:(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り、剥離	密 雲母・長石・白色粒	不良	内面:10YR8/1灰白 外面:10YR8/1灰白	口～底部 40%	
69	A	須恵器 杯B	SX18	口径:(9.8)、器高:(3.1) 底径:(6.9)	調整不明、自然釉(緑色)付着	ロクロナデ、自然釉付着 底:ヘラ切り高台貼付	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y6/1黄灰	口～底部 30%	
70	A	須恵器 杯B	SX18	口径:(11.9)、器高:4.3 底径:8.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り高台貼付	密 長石・白色粒	良好	内面:N4/灰 外面:N4/灰	口～底部 80%	
71	A	須恵器 杯B	SX18	口径:(13.5)、器高:4.6 底径:8.9	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り高台貼付	密 石英・白色粒	不良	内面:7.5YR8/4浅黄橙 外面:5Y5/1灰	口～底部 70%	
72	A	須恵器 杯B	SX18	口径:-、器高:(1.5) 底径:(7.6)	(ロクロナデ)	ロクロナデ 底:ヘラ切り後高台貼付	密 白色粒	良好	内面:2.5Y5/1黄灰 外面:N6/灰	底部 50%	
73	A	須恵器 蓋	SX18	口径:(13.9)、器高:1.6 底径:-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	密 長石・白色粒	良好	内面:5B5/1青灰 外面:5B5/1青灰	天～口縁部 85%	
74	A	須恵器 蓋	SX18	口径:(13.4)、器高:(2.0) 底径:-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、静止ヘラ切り	密 長石・白色粒	良好	内面:5Y7/1灰白 外面:5Y6/1灰	天～口縁部 50%	
75	A	須恵器 蓋	SX18	口径:(12.9)、器高:3.1 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	密 長石・白色粒	良好	内面:5Y6/1灰 外面:5Y7/1灰白	天～口縁部 50%	
76	A	土師器 小型甕	SX18	口径:(11.2)、器高:(4.8) 底径:-	ロクロナデ、ヘラナデ、煤付着	ロクロナデ、ヨコナデ、煤付着	密 雲母・石英・長石	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR6/2灰黄褐	口縁部 25%	
77	A	土師器 小型甕	SX18	口径:14.0、器高:(9.3) 底径:-	ロクロナデ、ハケメ 摩耗	ナデ、ケズリ 摩耗	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:10YR8/3浅黄橙 外面:10YR8/3浅黄橙	口～胴部 20%	
78	A	弥生土器 高杯	SX18	口径:-、器高:(7.3) 底径:-	ナデ、赤彩	ナデ、赤彩	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:2.5Y7/2灰黄 外面:5YR6/6橙(赤彩)	脚部 40%	
79	A	須恵器 杯A	SX21	口径:(11.1)、器高:3.5 底径:7.2	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り	密 石英・白色粒	良好	内面:2.5Y7/3浅黄 外面:2.5Y7/2灰黄	口～底部 80%	
80	A	須恵器 杯A	SX21	口径:(12.0)、器高:3.4 底径:(7.9)	ロクロナデ、油煙付着	ロクロナデ 底:ヘラ切り	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	口～底部 25%	
81	A	須恵器 蓋	SX21	口径:(13.8)、器高:2.9 底径:-	ロクロナデ後不定方向のナデ	ロクロナデ、ヘラ切り	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	天～口縁部 40%	
82	A	土師器 甕	SX21	口径:-、器高:(3.5) 底径:-	ナデ	ナデ	密 雲母・長石・海綿骨針	良好	内面:2.5Y8/2灰白 外面:2.5Y8/2灰白	口縁部 5%以下	
83	A	土師器 甕	SX21	口径:(20.8)、器高:(6.5) 底径:-	ナデ	ナデ、ケズリ	粗 雲母・石英・白色粒	良好	内面:2.5Y7/3浅黄 外面:2.5Y7/3浅黄	口～頸部 5%以下	
84	A	土師器 小型甕	SX21	口径:(12.7)、器高:(6.0) 底径:-	ロクロナデ、油煙付着	ロクロナデ	密 雲母・石英・長石	良好	内面:7.5YR8/4浅黄橙 外面:2.5Y5/2暗灰黄	口～胴部 25%	
85	A	土師器 小型甕	SX21	口径:(9.0)、器高:(5.7) 底径:-	ナデ、煤付着	ナデ、煤付着 剥離	粗 石英・長石・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:2.5Y5/2暗灰黄	口～胴部 10%	
86	A	土師器 小型甕	SX21	口径:(14.4)、器高:(6.2) 底径:-	ロクロナデ、煤付着	ロクロナデ	密 雲母・白色粒	良好	内面:2.5Y7/3浅黄 外面:10YR6/2灰黄褐	口～胴部 25%	
87	A	土師器 鍋	SX21	口径:-、器高:(5.9) 底径:-	ナデ	ナデ、カキメ、煤付着	密 雲母・石英・長石・白色粒	良好	内面:10YR6/3にぶい黄橙 外面:10YR5/2灰黄褐	口～頸部 5%以下	
88	A	須恵器 杯A	検出面 I7	口径:(11.8)、器高:3.3 底径:6.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/2灰黄 外面:2.5Y7/1灰白	口～底部 70%	外:墨書(不明)
89	A	須恵器 杯B	検出面 J7	口径:-、器高:(3.0) 底径:(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:ヘラ切り高台貼付	密 白色粒	良好	内面:N6/灰 外面:N5/灰	体～底部 10%	底:刻書土器(不明)
90	A	土師器 甕	検出面 M7	口径:(21.2)、器高:(13.5) 底径:-	ロクロナデ、カキメ、ハケメ	ロクロナデ、カキメ、煤付着	密 雲母・海綿骨針・白色粒・砂粒	良好	内面:10YR8/4浅黄橙 外面:10YR7/3にぶい黄橙	口～胴部 10%	
91	A	須恵器 杯A	包含層 L7	口径:(11.0)、器高:3.6 底径:8.1	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り	密 海綿骨針・白色粒	良好	内面:7.5Y7/1灰白 外面:10Y6/1灰	口～底部 90%	
92	A	須恵器 杯B	包含層 I7	口径:(11.0)、器高:4.0 底径:(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り高台貼付	密 長石・白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	口～底部 50%	底:墨書「大□」
93	A	須恵器 杯B	包含層 M7	口径:(13.0)、器高:4.6 底径:(8.8)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り高台貼付	密 長石・白色粒	良好	内面:N7/灰白 外面:N6/灰	口～底部 40%	
94	A	須恵器 杯B	包含層 M7	口径:-、器高:(5.0) 底径:(6.9)	ロクロナデ、油煙付着	ロクロナデ (回転糸切り)高台貼付	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	体～底部 45%	灯明皿
95	A	須恵器 蓋	包含層 H7	口径:16.4、器高:3.0 底径:-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、左回転ケズリ	密 長石・白色粒	良好	内面:N6/灰 外面:5Y6/1灰	完形 100%	
96	A	須恵器 蓋	包含層 L7	口径:(11.6)、器高:2.3 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り	密 長石・白色粒	良好	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:2.5Y7/2灰黄	- 85%	
97	A	土師器 鍋	包含層 I7	口径:33.1、器高:(7.1) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ、煤付着	密 雲母・石英	良好	内面:10YR8/3浅黄橙 外面:10YR6/3にぶい黄橙	口～胴部 20%	
98	A	土師器 (椀A)	包含層 I7	口径:-、器高:(2.7) 底径:(5.7)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:ケズリ	密 雲母・白色粒	良好	内面:2.5YR7/6橙 外面:2.5YR6/6橙	体～底部 10%	外:墨書「□(半ヵ)」
99	A	土師器 皿B	包含層 M7	口径:(14.6)、器高:5.6 底径:(9.5)	ロクロナデ、赤彩、油煙付着	ロクロナデ、煤付着 底:右回転糸切り高台貼付	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR8/2灰白	口～底部 60%	
100	A	灰釉陶器 (椀)	包含層 H7	口径:12.0、器高:(1.9) 底径:(10.2)	ロクロナデ、灰釉	ロクロナデ、灰釉	密 -	良好	内面:5Y7/1灰白 外面:5Y8/1灰白	口縁部 5%以下	
101	A	須恵器 杯A	表土	口径:12.2、器高:3.7 底径:(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラケズリ	密 白色粒	良好	内面:5Y7/1灰白 外面:10Y7/1灰白	口～底部 50%	底:墨書「中□(村ヵ)」
102	A	土師器 椀A	撹土	口径:(13.2)、器高:(3.5) 底径:(5.4)	ロクロナデ、赤彩、煤付着	ロクロナデ、ケズリ、赤彩	密 石英・白色粒・砂粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR7/4にぶい黄橙	口～底部 40%	赤彩色調 内面:7.5YR6/6橙 外面:7.5YR6/8橙

表2　土器等観察表(3)

報告No.	地区	種類 器種	遺構番号 層位	法量(cm) ( )内:復元	成形・調整・装飾等 内面	成形・調整・装飾等 外面	胎土	焼成	色調	残存部 残存率	備考
103	A	緑釉陶器 (椀B)	表採	口径:-、器高:(2.0) 底径:-	摩耗のため調整不明、緑釉	摩耗のため調整不明、緑釉 底:高台貼付	密 白色粒	良好	内面:2.5Y8/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	底部 5%以下	
110	B	須恵器 杯B	S105	口径:(11.0)、器高:3.9 底径:6.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り高台貼付	密 白色粒	良好	内面:5Y6/1灰 外面:N5/灰	口～底部 90%	
111	B	須恵器 杯B	S105	口径:(11.0)、器高:5.0 底径:(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:高台貼付	密 白色粒	良好	内面:N7/灰白 外面:N6/灰	口～底部 45%	
112	B	須恵器 蓋	S105	口径:(11.6)、器高:(2.1) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ	密 長石・白色粒	不良	内面:10YR8/1灰白 外面:2.5Y8/1灰白	天～口縁部 40%	
113	B	須恵器 蓋	S105	口径:-、器高:(1.8) 底径:-	ロクロナデ、ナデ	調整不明、自然釉付着	密 白色粒	良好	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:7.5Y8/1灰白	天井部 5%	
114	B	土師器 鍋	S105	口径:-、器高:(5.4) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ、煤付着	密 石英・長石・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR4/2灰黄褐	口縁部 5%以下	
115	B	土師器 鍋	S105	口径:-、器高:(4.5) 底径:-	調整不明	(ロクロナデ、カキメ)	密 石英・長石・砂粒	良好	内面:10YR7/2にぶい黄橙 外面:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 5%以下	
116	B	(土製品)	S105	口径:-、器高:(4.0) 底径:(15.2)	手ごね	ナデ、指オサエ 底:未調整	粗 石英・長石・砂粒	不良	内面:10R6/6赤橙 外面:10YR8/3淡黄橙	底部 5%以下	
117	B	土師器 椀A	SD23	口径:-、器高:(0.7) 底径:(4.8)	(ナデ)、赤彩	ロクロナデ、赤彩 底:回転糸切り	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/2灰黄 外面:7.5YR7/6橙	底部 60%	
118	B	土師器 椀A	SD26	口径:-、器高:(1.2) 底径:(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切り	密 -	良好	内面:2.5Y7/2灰黄 外面:2.5Y7/2灰黄	底部 20%	底:墨書(不明)
119	B	須恵器 杯A	SD28	口径:(12.4)、器高:3.4 底径:(8.7)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り	密 長石・白色粒	良好	内面:N6/灰 外面:N6/灰	口～底部 25%	
120	B	須恵器 杯A	SD28	口径:(11.8)、器高:3.6 底径:7.5	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り	密 雲母・白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:5Y6/1灰	口～底部 60%	
121	B	須恵器 蓋	SD28	口径:(13.0)、器高:(1.1) 底径:-	ロクロナデ、ナデ、自然釉付着	ロクロナデ、回転ヘラ切り	密 -	良好	内面:N6/灰 外面:N6/灰	天～口縁部 20%	
122	B	須恵器 甕	SD30	口径:(32.3)、器高:(6.5) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ	密 石英・白色粒	良好	内面:7.5Y6/1灰 外面:7.5Y6/1灰	口縁部 5%以下	
123	B	土師器 小型甕	SD30	口径:(13.1)、器高:(4.3) 底径:-	ロクロナデ、煤付着	ロクロナデ、煤付着	密 石英・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:7.5YR6/2灰褐	口縁部 10%	
124	B	須恵器 甕	SD32	口径:-、器高:(16.9) 底径:-	当て具痕	タタキ	密 白色粒	良好	内面:N3/暗灰 外面:N4/灰	胴部 5%以下	(大甕)
125	B	須恵器 甕	SD32	口径:-、器高:(7.8) 底径:-	当て具痕	タタキ、カキメ	密 長石・白色粒	良好	内面:5GY5/1オリーブ灰 外面:N4/灰	胴部 5%以下	
126	B	須恵器 壺	SD32	口径:-、器高:(8.0) 底径:-	当て具痕、自然釉付着	カキメ、自然釉付着	密 -	良好	内面:2.5Y7/2灰黄 外面:2.5Y7/1灰白	胴部 5%以下	
127	B	須恵器 杯A	SD32	口径:(11.8)、器高:2.9 底径:(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り	密 雲母・石英・白色粒	良好	内面:7.5Y6/1灰 外面:N5/灰	口～底部 70%	
128	B	須恵器 杯B	SD32	口径:(12.5)、器高:3.9 底径:(8.4)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り高台貼付	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:N6/灰	口～底部 55%	
129	B	須恵器 杯B	SD32	口径:13.1、器高:3.9 底径:9.0	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ 底:右回転ヘラ切り高台貼付	密 白色粒	良好	内面:N7/灰白 外面:N5/灰	口～底部 90%	
130	B	須恵器 蓋	SD32	口径:(13.4)、器高:2.3 底径:-	ロクロナデ、ナデ、墨痕	ロクロナデ、回転ヘラ切り 自然釉付着	密 白色粒	良好	内面:N6/灰 外面:N5/灰	天～口縁部 70%	
131	B	土師器 鍋	SD32	口径:(39.4)、器高:(8.6) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ、煤付着	密 長石	良好	内面:10YR7/2にぶい黄橙 外面:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 5%以下	
132	B	須恵器 杯B	SK40	口径:-、器高:(1.6) 底径:(8.3)	ロクロナデ、ナデ、墨痕	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り高台貼付	密 石英・小石	良好	内面:5Y7/1灰白 外面:5Y7/1灰白	底部 25%	(転用硯)
133	B	須恵器 蓋	SK41	口径:(15.9)、器高:(1.0) 底径:-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、自然釉付着	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y6/1黄灰	天～口縁部 25%	
134	B	土師器 小型甕	SK41	口径:(13.0)、器高:(5.1) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ	密 石英・砂粒	良好	内面:10YR7/2にぶい黄橙 外面:2.5Y6/2灰黄	口縁部 10%	
135	B	須恵器 杯B	SP172	口径:(12.8)、器高:(4.3) 底径:(7.9)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:高台貼付	密 石英・長石・白色粒・砂粒	不良	内面:2.5Y8/2灰白 外面:2.5Y8/3淡黄	口～底部 40%	
136	B	土師器 椀A	SP181	口径:-、器高:(1.8) 底径:(5.2)	ナデ	(ロクロナデ) 底:右回転糸切り	密 雲母・石英・長石	良好	内面:2.5Y7/2灰黄 外面:10YR6/2灰黄褐	底部 30%	底:墨書(不明)
137	B	土師器 甕	SP193	口径:-、器高:(8.5) 底径:-	ハケメ、ナデ	カキメ、ケズリ、墨痕	密 長石・白色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:2.5Y7/3淡黄	胴部 5%以下	
138	B	土師器 椀A	SP203	口径:-、器高:(1.3) 底径:(5.0)	調整不明	調整不明 底:回転糸切り	密 -	良好	内面:10YR8/2灰白 外面:10YR8/2灰	底部 20%	底:穿孔あり
139	B	須恵器 杯A	SP213	口径:(12.0)、器高:3.7 底径:(7.2)	ロクロナデ ヘラ記号	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り	密 白色粒	良好	内面:N6/灰 外面:N6/灰	口～底部 30%	
140	B	須恵器 壺	SP221	口径:(10.0)、器高:(4.3) 底径:-	ロクロナデ、自然釉付着	ロクロナデ、カキメ、自然釉付着	密 -	良好	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:2.5Y5/1黄灰	口頸部 10%	
141	B	土師器 椀A	SX12	口径:-、器高:(2.7) 底径:(5.4)	調整不明 摩耗	調整不明 底:回転糸切り、摩耗	密 石英・白色粒	良好	内面:10YR6/1褐灰 外面:10YR7/2にぶい黄橙	体～底部 5%	
142	B	土師器 椀	SX12	口径:-、器高:(2.0) 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ	密 -	良好	内面:7.5YR8/4淡黄橙 外面:7.5YR8/4淡黄橙	口～体部 5%以下	外:墨書「十又は記号」
143	B	土師器 (皿B)	SX12	口径:-、器高:(1.6) 底径:(8.4)	ロクロナデ 摩耗	ロクロナデ、赤彩 底:回転糸切り高台貼付、摩耗	密 白色粒・赤色粒・黒色粒	良好	内面:10YR7/3にぶい黄橙 外面:10YR8/3淡黄橙	底部 40%	
144	B	土器	SX12	口径:-、器高:(4.6) 底径:-	ナデ	(ナデ、ケズリ)	粗 石英・海綿骨針・赤色粒	良好	内面:7.5YR6/1褐灰 外面:7.5YR6/6橙	- -	(鋳型)
145	B	須恵器 杯A	SX13	口径:(12.2)、器高:2.8 底径:(9.2)	ロクロナデ、ナデ、煤付着	ロクロナデ、煤付着 底:回転ヘラ切り	密 白色粒	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:5Y6/1灰	口～底部 35%	(転用硯)
146	B	須恵器 蓋	SX13	口径:-、器高:(2.0) 底径:-	ロクロナデ 摩耗	ロクロナデ、ケズリ 摩耗	密 石英・長石・砂粒	不良	内面:2.5Y7/2灰黄 外面:2.5Y8/1灰白	天井部 5%以下	
147	B	土師器 椀A	検出面 I11	口径:(12.9)、器高:3.8 底径:(5.9)	ロクロナデ、赤彩	ロクロナデ、赤彩 底:右回転糸切り	密 -	良好	内面:7.5YR7/4にぶい橙 外面:7.5YR7/6橙	口～底部 60%	外:墨書「口(阿ヵ又は町ヵ)畠」
148	B	土師器 椀A	検出面 J11	口径:-、器高:(2.2) 底径:(6.5)	ナデ	ロクロナデ、墨痕 底:右回転糸切り	密 石英・長石・赤色粒	良好	内面:10YR8/3淡黄橙 外面:7.5Y7/3にぶい橙	体～底部 10%	
149	B	須恵器 杯A	包含層 J11	口径:14.2、器高:3.3 底径:6.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り	密 長石	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y6/1黄灰	口～底部 50%	外:墨書(不明)
150	B	須恵器 杯B	包含層 K11	口径:(11.4)、器高:4.7 底径:(6.9)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:回転ヘラ切り高台貼付	密 白色粒	良好	内面:2.5GY6/1オリーブ灰 外面:2.5GY6/1オリーブ灰	口～底部 40%	底:墨書「口(神ヵ)」
151	B	須恵器 蓋	包含層 L11	口径:(14.0)、器高:2.6 底径:-	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ ロクロナデ	密 白色粒	良好	内面:N5/灰 外面:N5/灰	天～口縁部 30%	TK217併行
152	B	土師器 椀B	包含層 M11	口径:-、器高:(1.9) 底径:5.9	ミガキ、黒色処理	ロクロナデ、赤彩 底:高台貼付	密 石英・長石	良好	内面:N3/暗灰 外面:10YR8/2灰白	底部 30%	
153	B	緑釉陶器 椀B	包含層 K11	口径:-、器高:(2.0) 底径:(7.6)	ロクロナデ、緑釉	ロクロナデ、緑釉 底:高台貼付	密 -	良好	内面:N6/灰 外面:N6/灰	底部 15%	
154	B	緑釉陶器 椀B	包含層 L11	口径:-、器高:(1.4) 底径:-	ロクロナデ、緑釉	ロクロナデ、緑釉 底:高台貼付	密 -	良好	内面:5Y6/1灰 外面:5Y6/1灰	底部 -	
155	B	灰釉陶器 (椀)	包含層 M11	口径:(12.6)、器高:(2.7) 底径:-	ロクロナデ、灰釉	ロクロナデ、灰釉	密 -	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	口縁部 5%以下	
156	B	須恵器 蓋	排土	口径:(12.6)、器高:(2.2) 底径:-	ロクロナデ、墨痕	ロクロナデ、回転ヘラ切り、墨痕	密 長石・白色粒	良好	内面:N6/灰 外面:N5/灰	天～口縁部 10%	
157	B	灰釉陶器 底部片	排土	口径:-、器高:(2.1) 底径:(9.8)	ロクロナデ	ロクロナデ 底:高台貼付	密 -	良好	内面:2.5Y7/1灰白 外面:2.5Y7/1灰白	底部 20%	

表3　墨書土器・刻書土器一覧表

報告No.	地区	分別	出土地点	種　類	器種	釈文	墨書部位
9	A区	墨書	SI01-P10	須恵器	坏Aor 埦A	□□（作ヵ）	底部底面
13	A区	墨書	SI01	須恵器	蓋	□（中ヵ）田	口縁部外面
24	A区	墨書	SI03	土師器	坏A	中田	底部底面
38	A区	墨書	SK31	土師器	埦A	中田	底部底面
42	A区	墨書	SP106	土師器	埦A	不明	体部外面 底部底面
43	A区	墨書	SP142	土師器	坏Aor 埦A	□（中ヵ）田	底部底面
64	A区	墨書	SX18	須恵器	坏A	□□（中ヵ）	底部底面
65	A区	墨書	SX18	須恵器	坏A	不明	底部底面
67	A区	墨書	SX18	須恵器	坏A	□（阿ヵ）／□	底部底面
88	A区	墨書	検出面 I7	須恵器	坏A	不明	体部外面
92	A区	墨書	包含層 I7	須恵器	坏B	大□	底部底面
98	A区	墨書	包含層 I7	土師器	(埦A)	□（半ヵ）	底部外面
101	A区	墨書	表土	須恵器	坏A	中□（村ヵ）	底部底面
118	B区	墨書	SD26	土師器	埦A	不明	底部底面
136	B区	墨書	SP181	土師器	埦A	不明	底部底面
142	B区	墨書	SX12	土師器	埦	十又は記号	口縁部外面
147	B区	墨書	検出面 I11	土師器	埦A	□（阿ヵ又は町ヵ）畠	底部外面
149	B区	墨書	包含層 J11	須恵器	(坏A)	不明	口縁部外面
150	B区	墨書	包含層 K11	須恵器	坏B	□（神ヵ）	底部底面
89	A区	刻書	検出面 J7	須恵器	坏B	不明	底部底面

表4　土錘観察・計測表(1)

報告No.	地区	形状	遺構番号	長(cm)	幅(cm)	孔(cm)	重(g)	色　調
104	A区	寸胴形a	SB0 1-SP124	6.5	1.3	0.4	10.1	10YR4/1 褐灰
	A区	樽形a	SB0 1-SP124(1)	7.3	1.3	0.4	12.8	10YR5/1 褐灰
	A区	樽形a	SB0 1-SP124(2)	1.4	1.2	0.4	6.6	10YR6/1 褐灰
	A区	樽形b	SI03	5.3	3.3	1.1	5.3	2.5Y8/2 灰白
	A区	(卵形b)	SK31(1)	5.6	2.4	0.5	(29.7)	10YR6/2 灰黄褐
	A区	卵形b	SK31(2)	4.7	2.1	0.6	19.7	10YR6/1 褐灰
	A区	(卵形c)	SP152	(4.3)	(4.1)	(1.9)	(60.7)	10YR8/1 灰白
	A区	寸胴形b	SX18	3.8	2.0	0.5	16.2	2.5Y8/1 灰白
	A区	(樽型a)	検出面 L7	(4.1)	(1.2)	(0.4)	(6.4)	10YR4/1 褐灰
	A区	樽型a	包含層 H7	5.2	2.0	0.4	23.0	10YR8/1 灰白
	A区	(樽形a)	包含層 H7	(3.8)	(1.3)	(0.4)	(6.5)	10YR8/1 灰白
105	A区	寸胴形b	包含層 I7(1)	6.4	3.0	1.4	56.2	10YR8/1 灰白
106	A区	寸胴形b	包含層 I7(2)	6.6	3.2	1.6	60.3	10YR8/1 灰白
107	A区	寸胴形b	包含層 I7(3)	6.5	3.2	1.4	59.8	10YR8/3 浅黄橙
	A区	寸胴形c	包含層 J7	4.3	3.8	1.4	68.9	5Y8/1 灰白
108	A区	卵形c	包含層 M7	6.3	5.6	1.6	183.3	2.5Y7/2 灰黄
	A区	卵形b	北壁	5.1	1.8	0.5	18.8	10YR8/1 灰白
	A区	(樽形a)	表土(1)	6.5	2.2	0.5	(29.1)	2.5Y6/1 黄灰
	A区	卵形b	表土(2)	4.1	1.8	0.3	13.1	2.5Y6/3 にぶい黄
	A区	(樽型c)	排土	(6.2)	3.1	1.2	(86.7)	7.5YR8/6 浅黄橙
	A区	(樽形c)	表採　北側	(4.4)	(4.3)	(1.8)	(65.4)	10YR8/2 灰白
	B区	(卵形c)	SX13	(2.5)	(2.0)	0.6	(16.5)	7.5YR8/3 浅黄橙
158	B区	寸胴形c	検出面 J11	6.0	4.8	1.9	124.7	10YR8/3 浅黄橙
159	B区	樽形b	検出面 M11	7.1	4.0	1.3	106.0	10YR8/2 灰白
	B区	(樽形b)	包含層 K11	(5.5)	3.8	1.4	(55.4)	2.5Y8/2 灰白

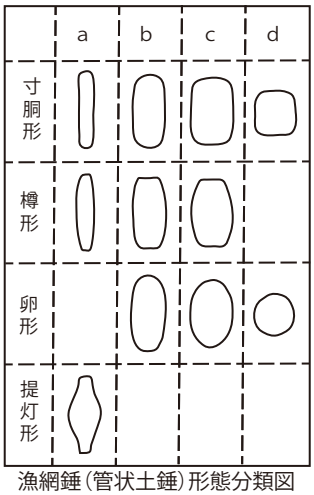
表4　土錘観察・計測表(2)

報告No.	地区	形状	遺構番号	長(cm)	幅(cm)	孔(cm)	重(g)	色　調
	B 区	(卵形d)	包含層 K11	3.1	4.4	1.8	49.2	10YR8/3 浅黄橙
	B 区	卵形c	包含層 L11	3.7	2.8	0.5	23.8	7.5YR8/4 浅黄橙
	B 区	(卵形 c)	包含層 M11(1)	(5.6)	4.6	1.8	(91.5)	10YR8/1 灰白
	B 区	卵形 c	包含層 M11(2)	5.6	4.6	1.7	86.4	10YR8/4 浅黄橙
	B 区	樽形c	包含層 M11	3.5	2.7	0.6	22.3	10YR8/1 灰白
	B 区	樽形c	包含層 M11	5.4	4.5	1.7	98.8	10YR8/2 灰白
	B 区	(寸胴形b)	表土(1)	(6.9)	3.0	1.8	(53.5)	10YR8/3 浅黄橙
	B 区	卵形 c	表土(2)	5.4	4.6	1.6	102.5	10YR8/4 浅黄橙
	B 区	(卵形c)	排土(1)	(6.2)	(4.7)	1.8	(108.5)	10YR8/1 灰白
	B 区	卵型c	排土(2)	3.2	2.7	0.6	20.5	10YR8/2 灰白
	B 区	卵型d	排土(3)	3.1	2.9	0.5	22.0	10YR8/2 灰白
	B 区	樽形c	排土	3.2	3.8	1.8	65.7	10YR8/2 灰白
160	B 区	提灯形 a	排土	4.4	2.6	0.5	24.7	2.5Y8/2 灰白
	B 区	卵形c	表採(1)	5.7	4.8	1.6	123.9	10YR8/1 灰白
	B 区	卵形c	表採(2)	5.9	4.7	1.6	123.7	2.5Y8/1 灰白
	B 区	卵形c	表採(3)	5.2	4.4	1.7	96.8	2.5Y8/2 灰白
	B 区	卵形c	表採(4)	4.8	4.2	1.8	7.6	2.5Y8/2 灰白
	B 区	(樽形c)	表採	5.3	4.4	1.5	(89.5)	2.5Y8/2 灰白
	B 区	卵形 c	表採	2.9	2.4	0.5	14.5	7.5YR8/4 浅黄橙

表5　石製品観察・計測表

報告No.	地区	種類	遺構番号 層位	長(cm)	幅(cm)	重(g)	石　材	色　調	備考
109	A 区	砥石	SX06	(9.8)	3.4	168.3	粘板岩	2.5Y7/1 灰白	煤・赤色素付着
161	B 区	凹石	SX12	7.0	7.1	266.4	安山岩	7.5Y6/1 ～ 8/1 灰・灰白	
162	B 区	(凹石)	包含層 M11	(7.8)	(10.2)	319.4	粗粒安山岩	5Y5/2 灰オリーブ	

土錘分類・凡例



漁網錘(管状土錘)形態分類図

※土錘の分類は、富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 2007『任海宮田遺跡発掘調査報告 II』に従って分類した。

第４章　自然科学分析

矢作健二・田中義文・井上智仁・斉藤崇人
馬場健司・齋藤紀行（パリノ・サーヴェイ株式会社）

第１節　はじめに

富山市に所在する黒瀬大屋遺跡は、富山平野南部に広がる神通川の扇状地上に位置し、神通川水系の熊野川右岸の微高地上に位置する。発掘調査では、奈良～平安時代にかけての遺構や遺物が確認されている。ここでは、平安時代とされる掘立柱建物の構築年代の推定を目的として、柱穴から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行う。また、遺物包含層とされた堆積層を対象として微化石分析を行い、当該期の環境に関わる資料を作成する。さらに、蛍光X線分析を行い、出土した須恵器・土師器胎土の化学組成を求め、土器作製に係る資料とする。

第２節　掘立柱建物の年代

１　試料

試料は、A区で検出された掘立柱建物SB01の柱穴SP124掘方から出土した炭化物２点と同遺構の柱穴SP117の柱痕から出土した炭化物１点の計３点である。

２　分析方法

炭化物に付着する土壌を、できるだけ取り除く。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。なお、試料が脆弱で、アルカリ処理の際に試料が溶解する可能性が高いものは、NaOHの濃度を下げて処理する。表中にはAaAと記載する。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等)、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.2（Bronk & Lee ,2013）を用いる。較正曲線はIntcal13（Reimer et al.,2013）を用いる。

３　結果および考察

結果を表6に示す。いずれの試料も年代測定行うのに十分な炭素を回収できた。同位体補正を行った年代測定の結果、SP124掘方南西は1,545±20BP、同北東は1,790±25BP、SP117柱痕北西は1,330

表6　放射性炭素年代測定結果

試料名	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		測定番号
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
A区K7 SB01 SP124 掘方南西	−26.23±0.23	1547±21	1545±20	432−490 cal AD (51.4%) 532−550 cal AD (16.8%)	427−564 cal AD (95.4%)	PLD−35659
A区K7 SB01 SP124 掘方北東	−32.12±0.17	1792±24	1790±25	145−150 cal AD (2.0%) 170−194 cal AD (11.4%) 211−257 cal AD (40.5%) 297−320 cal AD (14.3%)	135−260 cal AD (73.3%) 280−325 cal AD (22.1%)	PLD−35660
A区L7 SB01 SP117 柱痕北西	−27.47±0.19	1329±22	1330±20	657−686 cal AD (68.2%)	651−712 cal AD (84.4%) 745−764 cal AD (11.0%)	PLD−35658

±20BPである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び実際の半減期との違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の14C年代を反映している）等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13（Reimer et ai.、2013）である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが（Stuiver and Polach、1977）、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値（1年単位）も記す（表6）。2σの値は、SP124掘方南西は5世紀前半～6世紀中頃、同北東は2世紀中頃～4世紀前半、SP117柱痕北西は7世紀中頃～8世紀中頃である。

上述したように3点の炭化材から得られた年代は、暦年代にすると2世紀中頃から8世紀中頃までの非常に幅広い年代となった。炭化材の年代が、この幅の中にあることは、ほぼ確実であると考えられるが、その絞り込みには、さらなる分析事例の蓄積とともに土器等の考古資料からの検討も加えて総合的に判断する必要があると考えられる。

第３節　遺物包含層の古環境解析

１　試料

試料は、A区の遺物包含層であるⅢ層から採取された土壌1点とB区の遺物包含層であるⅢ層から採取された土壌1点の計2点である。

A区とB区は南北方向に約30m離れており、基本層序は上位よりⅠ層表土、Ⅱ層遺物包含層、Ⅲ層遺物包含層、Ⅳ層地山、Ⅴ層礫層とされている。Ⅰ層表土からⅣ層地山までの層厚は40～45cmほどとされている。また、Ⅲ層は、発掘調査所見により、平安時代前半（9～10世紀）頃の堆積層とされている。

２　分析方法

本分析では、珪藻、花粉、植物珪酸体の各微化石分析を行う。以下に各分析法について述べる。

(1)珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot（2000）、Hustedt（1930-1966）、Krammer & Lange-Bertalot（1985-1991）、Desikachiary（1987）などを参考にした。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示した。

(2)花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25㎜の篩による篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

(3)植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3　結果

(1)珪藻分析

結果は、表7に示した。珪藻分析を行った2試料からは珪藻化石は極低率にしか産出しなかった。以下、結果を記す。

1)A区K7 南壁;Ⅲ層

本試料からは、堆積物中の絶対量としては少なく、4個体産出した。保存状態は、壊れている殻が多く、多くの殻に溶解の痕跡が認められる為、極不良である。

本試料から産出した種は、淡水～汽水生種の*Nitzschia palea*、淡水生種で流水不明種の*Eunotia* spp.等である。

2)B区L11 南壁;Ⅲ層

本試料からは、堆積物中の絶対量としては少なく、15個体産出した。保存状態は、壊れている殻が多く、多くの殻に溶解の痕跡が認められる為、極不良である。

本試料から産出した種は、淡水生種で陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、

*Pinnularia subcapitata*等である。

(2)花粉分析

結果を表8に示す。分析残渣は50～100μl程度でやや少ない。残渣の多くは、摩耗した黒色の有機物や微粒炭である。シダ類胞子が多少わずかにみられる程度で花粉化石をほとんど含まない。検出された花粉化石は、マツ属、スギ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、イネ科、カヤツリグサ科である。保存状態は堆積物の時代性からみて悪い。

(3)植物珪酸体分析

結果を表9、図29に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

表7　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境		
	塩分	pH	流水	指標種	A区K7 南壁;Ⅲ層	B区L11 南壁;Ⅲ層
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	4
Hantzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk	O,U	1	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	2
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	7
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2
海水生種					0	0
海水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	0
淡水～汽水生種					1	0
淡水生種					3	15
珪藻化石総数					4	15

凡例
塩分・pH・流水に対する適応性
H.R.:塩分濃度に対する適応性
Euh　:海水生種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種
Meh　:汽水生種
Ogh-hil:貧塩好塩性種
Ogh-ind:貧塩不定性種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性
al-bi:真ｱﾙｶﾘ性種
al-il:好ｱﾙｶﾘ性種
ind　:pH不定性種
ac-il:好酸性種
ac-bi:真酸性種
unk　:pH不明種

C.R.:流水に対する適応性
l-bi:真止水性種
l-ph:好止水性種
ind :流水不定性種
r-ph:好流水性種
r-bi:真流水性種
unk :流水不明種

環境指標種
A:外洋指標種　B:内湾指標種　C1:海水藻場指標種　C2:汽水藻場指標種
D1:海水砂質干潟指標種　D2:汽水砂質干潟指標種
E1:海水泥質干潟指標種　E2:汽水泥質干潟指標種　F:淡水底生種群(以上は小杉, 1988)
G:淡水浮遊生種群　H:河口浮遊性種群　J:上流性河川指標種　K:中～下流性河川指標種
L:最下流性河川指標種群　M:湖沼浮遊性種　N:湖沼沼沢湿地指標種　O:沼沢湿地付着生種
P:高層湿原指標種群　Q:陸域指標種群　(以上は安藤, 1990)
S:好汚濁性種　T:好清水性種　U:広適応性種(以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995)
RI:陸生珪藻(RA:A群,RB:B群、伊藤・堀内, 1991)

Ａ区のⅢ層では、栽培植物であるイネ属の産出が目立ち、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、短細胞珪酸体が1,200個/g、機動細胞珪酸体は1,800個/gである。珪化組織片として穎珪酸体や葉部の短細胞列と機動細胞列も検出される。また、タケ亜科やヨシ属、ススキ属も僅かに認められる。この他、イネ科起源（棒状珪酸体と毛細胞起源）も検出される。

Ｂ区のⅢ層でもイネ属の産出が目立ち、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、短細胞珪酸体が2,300個/g、機動細胞珪酸体は3,200個/gである。穎珪酸体や

表8　花粉分析結果

種　類	A区K7 南壁 Ⅲ層	B区L11 南壁 Ⅲ層
木本花粉		
マツ属	1	-
スギ属	3	1
クマシデ属－アサダ属	1	-
ハンノキ属	1	-
ニレ属－ケヤキ属	1	-
草本花粉		
イネ科	7	1
カヤツリグサ科	-	1
シダ類胞子		
他のシダ類胞子	29	2
合　計		
木本花粉	7	1
草本花粉	7	2
シダ類胞子	29	2
合計	43	5

葉部の珪化組織片も検出される。また、A区と同様にタケ亜科やヨシ属、ススキ属も僅かに認められる。この他、イネ科起源（棒状珪酸体,長細胞起源,毛細胞起源）も検出される。

4　考察

(1)珪藻化石の産状から

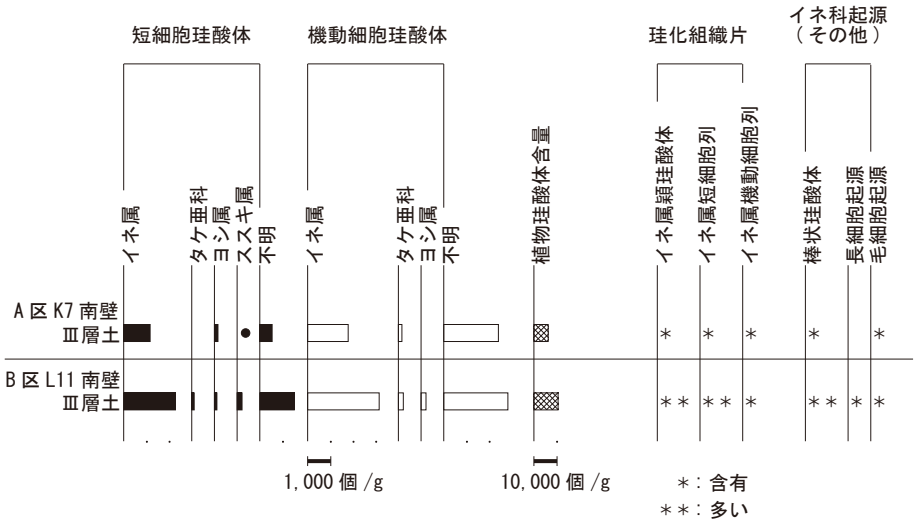
A区K7 南壁Ⅲ層からは4個体の珪藻化石が産出した。産出した種は、淡水～汽水生種の*Nitzschia palea*、淡水生種で流水不明種の*Eunotia* spp.等である。産出した種の生態性を述べると、淡水～汽水生種とした*Nitzschia palea*は、好汚濁性種（Asai &Watanabe、1995）とされ、特に人為的な影響で汚濁した水域に特徴的に認められる種である。流水不明種の*Eunotia* spp.は、数種類で構成されるが、湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

本試料からは産出した珪藻化石は極低率であった。珪藻化石は、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。また、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている（千木良、1995）。

表9　植物珪酸体含量　（個/g）

分類群	A区K7 南壁 Ⅲ層土	B区L11 南壁 Ⅲ層土
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ属	1,200	2,300
タケ亜科	－	100
ヨシ属	200	100
ススキ属	<100	200
不明	500	1,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ属	1,800	3,200
タケ亜科	200	200
ヨシ属	－	200
不明	2,400	2,800
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,900	4,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,400	6,400
植物珪酸体含量	6,300	10,600
珪化組織片		
イネ属頴珪酸体	＊	＊＊
イネ属短細胞列	＊	＊＊
イネ属機動細胞列	＊	＊
イネ科起源(その他)		
棒状珪酸体	＊	＊＊
長細胞起源	－	＊
毛細胞起源	＊	＊

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている
<100:100個/g未満
－:未検出,＊:含有,＊＊:多い



乾土1gあたりの個数で示す。●○は100個未満を定性的に示す。

図29　植物珪酸体含量

以上のことから、取り込まれたほとんどの珪藻化石は、堆積後に分解が進んで消失した可能性が高い。

一方、B区L11 南壁Ⅲ層からは15個体の珪藻化石が産出した。産出した種は、淡水生種で陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Pinnularia subcapitata*等である。

B区にのみ産出した種の生態性について述べると、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Pinnularia subcapitata*等の陸生珪藻は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物

の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1986）である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内、1989；1991）。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70～80%以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。また、本種は塩類を豊富に含んだ水田等に爆発的に出現することが知られている。本種は、経験的には陸生珪藻の側面より、閉鎖的で高塩類の水域に優占種として認められることが多い種である。

本試料から産出した珪藻化石は極低率であったため、詳細な検討を行うことは差し控えたいが、陸生珪藻が産出したことおよび保存状態が悪かったことを考慮すると、好気的な環境に曝されたことにより、取り込まれたほとんどの珪藻化石は分解・消失した可能性が高い。

(2)植生について

分析対象試料からは花粉化石はほとんど検出されない。化石の保存が良好な湿地性の堆積物では、堆積物1gあたり数万個以上検出されることも珍しくないが、今回の結果は多く見積もっても堆積物1gあたり10個未満であり、かなり少ない。花粉化石は好気的環境下での風化に弱く、また針葉樹花粉やシダ類胞子は広葉樹花粉に比べ風化に耐性がある（徳永・山内、1971など）。分析対象試料は、その層相からみて、母材となる土壌は水によって運搬されたと考えられるが、堆積後は定常的に湿った環境ではなく、好気的な環境に曝されたため、花粉化石が分解したと思われる。以上のようなことから、詳細な植生について述べることは難しいが、イネ科の産出は、当時開けた環境であったことを示唆する。また、スギ属が多い傾向は、県内での花粉分析結果ではよく見られる傾向で、扇状地等に生育していたスギに由来すると思われる（田中・千葉、2007）。

植物珪酸体分析の結果では、イネ科の中にタケ亜科、ヨシ属、ススキ属が含まれていた。タケ亜科やススキ属には開けて乾いた場所に生育する種類が多く、ヨシ属は湿潤な場所に生育する。これより、Ⅲ層が形成された頃には調査区の周辺に乾いた場所や湿潤な場所が併存したと思われる。

分析対象試料からは、栽培種であるイネ属も産出した。安定した稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量（植物珪酸体密度）が高くなる。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている（杉山、2000）。A区でのイネ属機動細胞珪酸体の含量は1,800個/g、B区では約3,200個/gであり、ここで挙げた調査例よりも低いと言える。ただし、イネ属の産出が他の分類群よりも目立ったことを考慮すれば、Ⅲ層が堆積したとされる平安時代前半には、本調査地点およびその周辺で稲作が行われた可能性や、何らかの形でイネ属の籾や葉部などの植物体が利用された可能性を想定することができる。これらについては、発掘調査の成果を併せて検討するとともに、周辺に分布する当該期の堆積物でのイネ属の産状を調査し、本分析調査の結果と比較することが望まれる。

第４節　須恵器の胎土分析

１　試料

試料は、A区SX18から出土した2点の土器片である。それぞれ取上No.は298と645とされている。いずれも素焼きの土器であるが、No.298は褐色を呈する土師質の土器であり、No.645は灰色を呈する須恵質の土器である。

2　分析方法

リガク製波長分散型蛍光X線分析装置（ZSX PrimusⅢ+）を用い、ガラスビード法により分析を実施した。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムのFP定量法を使用し、SiO_2, TiO_2, Al_2O_3, Fe_2O_3, MnO, MgO, CaO, Na_2O, K_2O, P_2O_5の主要10元素およびRb, Sr, Y, Zr, Baの微量5元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料（JA-1, JA-2, JA-3, JB-1a, JB-2, JB-3, JCh-1, JF-1, JF-2, JG-1a, JG-2, JG-3, JGb-1, JGb-2, JH-1, JLk-1, JR-1, JR-2, JR-3, JSd-1, JSd-2, JSd-3, JSl-1, JSl-2, JSy-1）を用いた。

1)装置

（株）リガク製　走査型蛍光X線分析装置 ZSX PrimusⅢ+（FP定量法アプリケーション）

表10　ガラスビード作製条件

溶融装置	リガク製卓上型高周波ビードサンプラ(3091A001)
融剤及び希釈率	融剤(Li2B4O7)5.000g:試料0.500g
剥離剤	LiI
溶融温度,時間	1200℃,600sec

2)試料作成

機械乾燥（110℃）した試料を、振動ミル（CMT製TI-100；10ml容タングステンカーバイト容器）で粉砕・混合し、ガラスビードを表10の条件で作成した。

表11　蛍光X線装置条件

ターゲット	Rh
管電圧(kV)	50
管電流(mA)	50
試料マスク	30mmφ
試料スピン	ON
ダイアフラム	30mmφ
測定雰囲気	真空

3)測定条件

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光X線分析装置（(株）リガク製 ZSX PrimusⅢ+）を用い、表11、12の条件で測定を実施した。

表12　蛍光X線定量測定条件

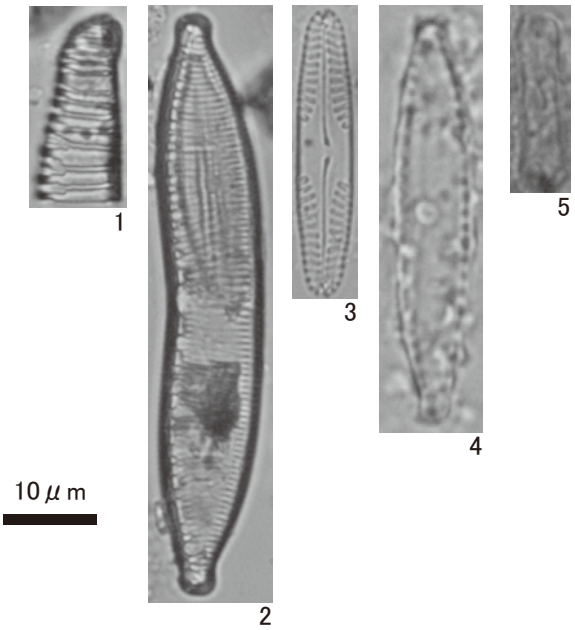
測定元素	測定スペクトル	1次フィルタ	アッテネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		角度(deg)			計測時間(s)	
							LL	UL	Peak	+BG	-BG	Peak	BG
SiO_2	Si-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO_2	Ti-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al_2O_3	Al-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	-	40	20
Fe_2O_3	Fe-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step)	41.50-42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na_2O	Na-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K_2O	K-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	280	136.674	-	142.00	40	20
P_2O_5	P-Kα	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	26.598	25.60-25.80 (0.10step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step)	25.60-25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.30-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-Lα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

3　結果

結果を表13に示す。前述したように2点の試料は、色調の異なる土器片ではあるが、主要元素および微量元素ともに両者間で大きく異なる成分は認められない。ただし、その評価には、一定数以上の試料数の分析を行い、集団としての特性を把握した上で、検討する必要があると考えられる。

表13　蛍光X線分析結果(化学組成)

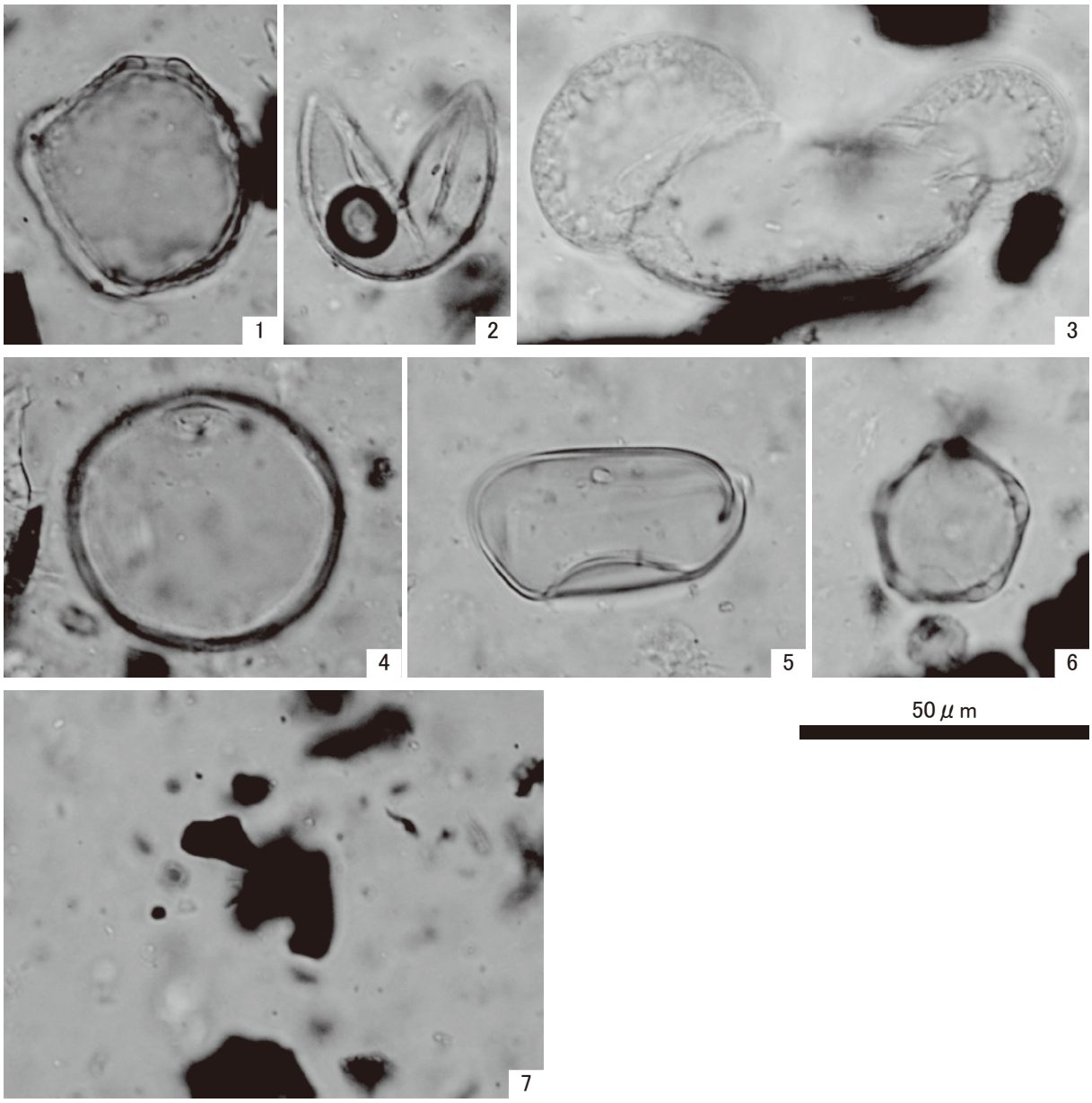
試料名		主要元素										微量元素					Total
		SiO_2 (%)	TiO_2 (%)	Al_2O_3 (%)	Fe_2O_3 (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na_2O (%)	K_2O (%)	P_2O_5 (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)	(%)
1	取上No.298	66.61	0.75	18.78	2.58	0.02	0.50	0.62	1.18	2.56	1.41	125	109	20	211	702	95.13
2	取上No.645	67.47	1.03	22.71	2.47	0.03	0.97	0.37	0.90	2.26	0.05	108	103	20	242	591	98.37



種　　名(試料名)

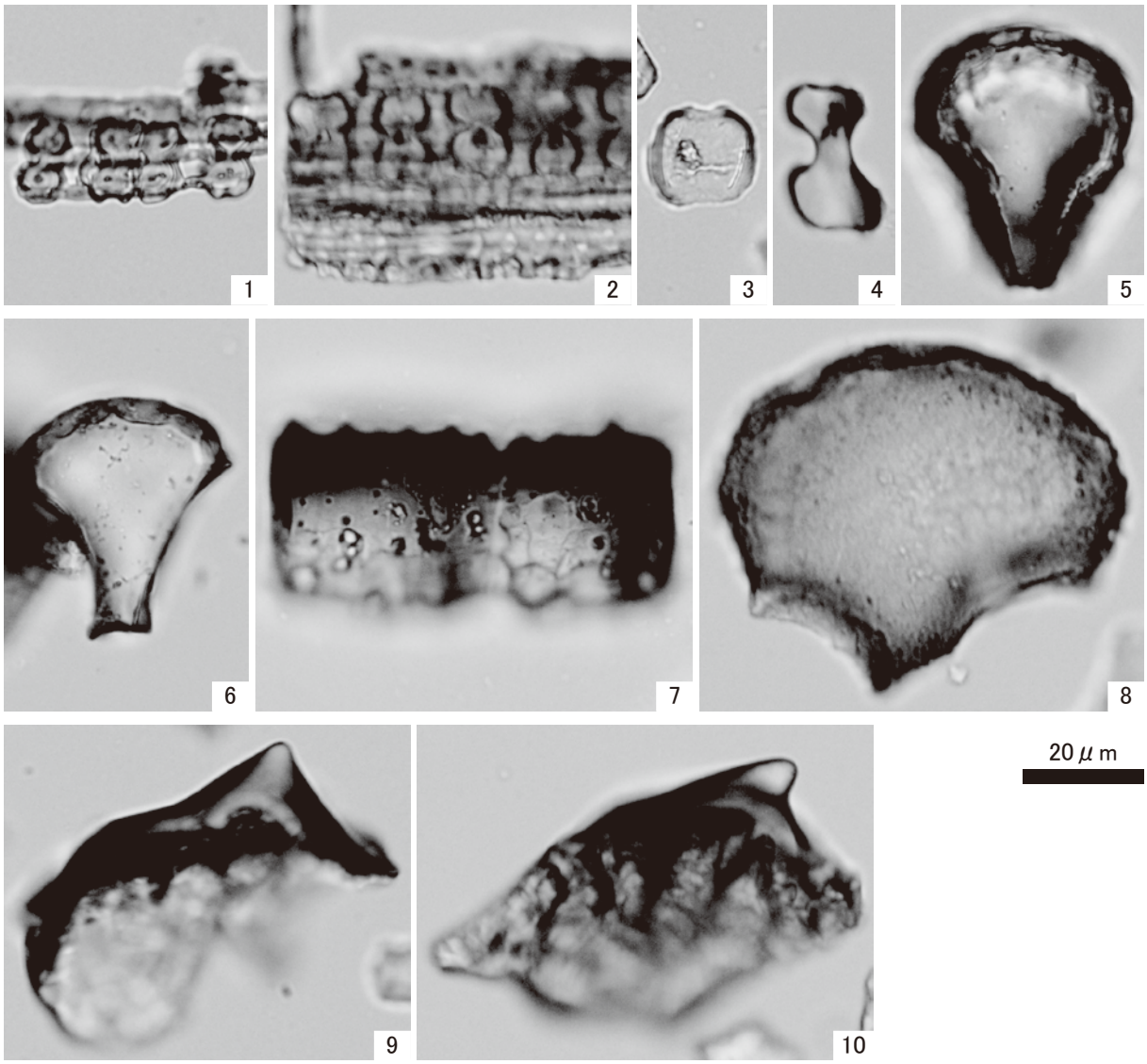
1．*Eunotia* spp.（A区K7 南壁；Ⅲ層）
2．*Hantzschia amphioxys*（Ehr.）Grunow（B区L11 南壁；Ⅲ層）
3．*Navicula contenta* Grunow（B区L11 南壁；Ⅲ層）
4．*Nitzschia palea*（Kuetz.）W.Smith（A区K7 南壁；Ⅲ層）
5．*Pinnularia subcapitata* Gregory（Ⅰ；2B区L11 南壁；Ⅲ層）

図30　珪藻化石



1．ニレ属―ケヤキ属(A区K7 南壁;Ⅲ層)
2．スギ属(A区K7 南壁;Ⅲ層)
3．マツ属(A区K7 南壁;Ⅲ層)
4．イネ科(A区K7 南壁;Ⅲ層)
5．シダ類胞子(A区K7 南壁;Ⅲ層)
6．ハンノキ属(A区K7 南壁;Ⅲ層)
7．状況写真(B区L11 南壁;Ⅲ層)

図31 花粉化石



1．イネ属短細胞列(A区K7 南壁;Ⅲ層)
2．イネ属短細胞列(B区L11 南壁;Ⅲ層)
3．ヨシ属短細胞珪酸体(A区K7 南壁;Ⅲ層)
4．ススキ属短細胞珪酸体(B区L11 南壁;Ⅲ層)
5．イネ属機動細胞珪酸体(A区K7 南壁;Ⅲ層)
6．イネ属機動細胞珪酸体(B区L11 南壁;Ⅲ層)
7．イネ属機動細胞列(B区L11 南壁;Ⅲ層)
8．ヨシ属機動細胞珪酸体(B区L11 南壁;Ⅲ層)
9．イネ属穎珪酸体(A区K7 南壁;Ⅲ層)
10．イネ属穎珪酸体(B区L11 南壁;Ⅲ層)

図32 植物珪酸体

引用文献

安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35－47.

Bronk Ramsey, C., & Lee, S. ,2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.

千木良雅弘,1995,風化と崩壊.近未来社,204p

Desikachiary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation,

Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

Horst Lange-Bertalot., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski,A.,Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925 pgs.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 ――陸生珪藻の細分――.日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌,6, 23-44.

近藤錬三,2010,プラント･オパール図譜.北海道大学出版会,387p.

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究, 1, 9-44.

小杉正人,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27,(1), 1-20.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991a, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Haflidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. ,2013,IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon , 55,1869-1887.

Stuiver Minze and Polach A Henry,1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

杉山真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.

田中義文・千葉博俊,2007,射水平野周辺の古環境変遷.PALYNO,5,34-47.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

第５章　総括

第１節　調査遺構について

１　年代

Ａ区　調査遺構の年代は、出土した土師器・須恵器の器形・技法等の特徴から判断して、概ね①8世紀後半～9世紀前半（SI01、SK27・28、SP72・177、SX03・06・09・18・21等）、②9世紀中頃～後半（SD20、SX02・17等）、③9世紀後半～10世紀初め（SB01、SI03、SD09・15、SK19・31・97・106、SP142、SX10・11等）に相当する。

Ｂ区　調査遺構の年代は、Ａ区同様に出土した土師器・須恵器の器形・技法等の特徴から判断して、概ね①8世紀後半～9世紀前半（SI05、SD28・30・32、SK40・41、SP172・193・213、SX13等）、②9世紀中頃～後半（SD26・SP221等）、③9世紀後半～10世紀初め（SD23、SP181・203、SX12等）に相当する。

今回の調査地点であるＡ区とＢ区を合わせると、概ねⅠ期（8世紀後半～9世紀前半）、Ⅱ期（9世紀中頃～後半）、Ⅲ期（9世紀後半～10世紀初め）の変遷が窺える。なかでもⅠ期とⅢ期が、集落が営まれた最盛期であったと考えられる。

今回の調査遺構は、竪穴建物や溝・土坑等が中心であったが、そのなかで一面廂（片廂）掘立柱建物が1棟確認できた。ここでは、この建物の機能・性格について記しておきたい。

２　一面廂（片廂）掘立柱建物

Ａ区のK7～L7グリッドにかけて確認できた掘立柱建物SB01の年代は、Ⅲ期に相当するものと考えられる。

第3章第3節で記したとおり、溝SD16の範囲から考えて、2間×2間の一面廂（片廂）掘立柱建物と考えられる。本建物については廂付建物という構造から、仏教施設・仏堂（村落内寺院）という機能・性格を考えた（笹生2005、pp.120－158.）が、任海宮田遺跡や向野池遺跡などから出土している瓦塔（富山県埋蔵文化財センター1996、p.93、富山市教育委員会2002b、pp.72－75.）のような仏教関連遺物の出土が皆無であることから、肯定はできない。

SB01・SD16の出土遺物は、土師器の椀と小型甕が中心で、日常什器である。本建物の機能・性格については、小型である点も含めて考えると、高床の倉庫などの収蔵施設ではなく、平地式に近い構造の工房的な機能・性格を有する施設であった可能性が高い。廂の位置から、本建物の正面は、東であったと考えられる。

また、第4章にて本建物の柱穴であるSP117とSP124から出土した炭化物の放射性炭素年代測定による分析結果を示したが、いずれも出土した土師器の型式学的年代よりも、遡る年代結果が得られている。このことから、建築の際に柱穴内の含土として当初から前代の炭化物が含まれていた可能性が高い。

第２節　出土遺物について

１　須恵器・土師器

出土した遺物の大半は須恵器と土師器で、前節で述べたとおり、概ねⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期に相当する日常什器である。

須恵器は、杯・蓋類と壺等の食膳・貯蔵用の器種が多く見られ、土師器は杯類等の食膳用の器種の

他に、甕・鍋等の煮沸用の器種が多く見られる。須恵器杯類は底面ヘラ切り技法で、土師器杯類は底面糸切り技法のものが多く見られ、底面糸切り技法の小型甕（53）もある。また、土師器杯類には、外内面に赤彩の施されたもの（19・38・39・62・102・117・147）や内面に黒色処理を施したもの（152）も認められた。富山県（越中）を中心とした、8世紀後半～10世紀初め頃の、典型的な器種構成と特徴を備えた土器組成といえる。

使用痕跡としては、甕・鍋等の煮沸用の器種の外内面には煤が多く付着しており、煮沸具として使用されていたことがよくわかる。さらに、須恵器や土師器の杯類のうち、内面を中心に油煙の付着が見られるもの（25・41・46・66・67・94・99）については、灯明具として使用されていた可能性が高い。内面が平滑ないしは墨痕が認められたもの（14・132・145）は、転用硯として使用されたと考えられる。須恵器胎土の分析結果は、第4章に示した数値のとおりであった。

次に、今回の調査で出土した須恵器・土師器のうち、特色ある遺物である墨書・刻書土器について、若干詳しく記しておきたい。（基峰）

２　墨書・刻書土器

今回の調査では、墨書土器が計21点、刻書土器が1点出土した。その内訳は墨書土器がA区で13点、B区で8点、刻書土器はA区で出土した。

出土した墨書土器の種類は土師器と須恵器で、器種は甕、杯、高台付き杯、椀、高台付き椀、蓋等である。墨書されている部位は、底部底面が多いが、甕は外面、椀は体部外面にある。杯では体部外面、口縁部外面、底部外面、蓋は口縁部外面にある。

101の墨書は「中□（村ヵ）」であるが、「中村」という文字は、『和名類聚抄』の記載によれば、郷や里の地名として近畿～関東・東北地方にかけて見られる。北陸地方に目をうつすと、加賀国石川郡に「中村郷」、若狭国三方郡に「中村里」という地名が認められる。92は「大□」である。「大」の下に漢字の一部分と判断できるはらいがあり、2文字と思われる。越中国（現在の富山県域）で、「大」のつく地名としては、礪波郡に「大岡郷」、「大野郷」、新川郡に「大荊（藪）郷」、婦負郡に「大桑郷」、「大山郷」がある。「中村」は、地名である可能性も考えられる。98は「半ヵ」と考えられる。欠損しているため、他の文字の可能性もある。147は「□畠」で、「阿畠」や「町畠」の可能性があり、後述する「田」に対して「畠」という文字の意味が、興味深く感じられる。9は「□作」ではないかと考えられるが、欠損しているため不明である。67は「□（阿ヵ）/□」、150は「□（神ヵ）」であるが、双方とも一部が欠けているため、文字の判断は不明である。142は「十もしくは記号」である。平城京跡出土の土師器坏又は皿の墨書に「十」、須恵器杯Ｂの墨書に「×（記号）」とする墨書がある（奈良国立文化財研究所1983、PL17・19.）。石川県小松市荒木田遺跡出土の須恵器杯Ａには「×（記号ヵ）」という墨書がある（石川県埋蔵文化財保存協会1987、p. 196.）。これらを今回出土した142と比較すると、「十」の筆順は縦棒が下から入っていると考えられ、今回の墨書は「十」か「記号」かの判別は分からないといえ、その詳細は不明としかいえない。

また、今回の調査で出土した刻書土器は須恵器で、底部底面に刻書される。半分以上が欠損しているため文字の判読は不明である。文字の状態から、焼成前にヘラ書きがされたものといえる。

今回出土した墨書土器のうち、特徴的なものとして「中田」の文字があげられる。「中田」の文字がほぼ正確に確認できる遺物は、Ａ区出土の13・24・38の計3点である。「田」の文字が確認できるものを合わせると、「中田」の文字が書かれていると考えられる土器は、計4点（墨書土器全体の約20％）となる。

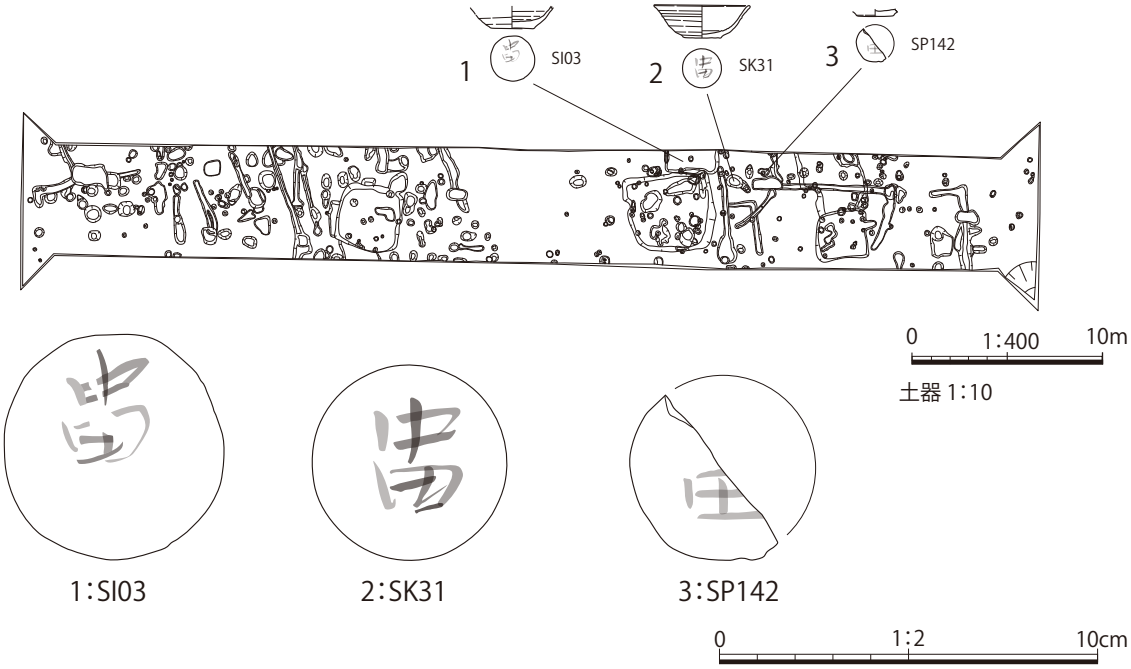


図33　9c後半～末頃の椀類底面に書かれた「中田」

前述したとおり、22点の墨書・刻書土器のうち、「田」の文字が確認できるものを合わせると、「中田」の文字であると考えられる墨書土器は、計4点認められる。そのうちほぼ正確に文字を確認できるものは3点であった。「中田」または「田」の墨書土器が出土した遺構は、図33に示したとおりである。「中田」の墨書土器の出土した地区はＡ区に集中しており、竪穴建物SI01とSI03、土坑SK31、ピットSP142から出土している。特定の遺構に、出土が偏っていることはない。しかしながら、K7～L7グリットという比較的近い位置に遺構が集中している。

SK31から出土した38は土師器杯Ａあるいは椀Ａで、口径12.6㎝、器高4.4㎝を測る。底面は回転糸切りである。池野編年（池野2003）によれば、射水市（旧大島町）北高木遺跡SD100出土の「椀Ｇ」に類するものと考えられ、池野編年の11期に相当するといえる。SI03から出土した24は、土師器杯Ａあるいは椀Ａで、口縁部が欠損しているため口径は不明であるが、これも底面は回転糸切りである。38と同様に池野編年の11期に相当するものと考えられる。双方とも年代は、9世紀後半～末頃である。43の墨書は「中田」の文字と考えられる。43は土師器で、SP142から出土している。底部しか残存していないが、底面は回転糸切りである。24・38と同様に池野編年の11期に相当する可能性が高い。赤彩が施されている点も特徴に当てはまる。よって、年代は9世紀後半～末頃である。

SI01から出土した13は須恵器蓋で、口径12.4㎝、器高は推定2.1㎝を測る。つまみは欠損し、天井部はヘラ削りである。器形・技法の特徴から、年代は8世紀末頃に相当するものと思われる。以上のことから、「中田」の文字であると考えられる土師器3点、須恵器1点は、須恵器が8世紀末頃、土師器はいずれも9世紀後半～末頃と考えられる。

土師器の年代から見ると、24・38・43はいずれも9世紀後半～末頃に相当する。年代から、同一人物が書いたものとも思われたが、24・38の「中田」の「田」の文字をみると、2画目・5画目に特徴があり、43は楷書で書かれたものである。筆跡の特徴からは、2種類に大別できるが、いずれも筆跡は似ているとは言い難く、別人が書いたものと考えられる。平川南氏は、島根県松江市（旧玉湯町）蛇喰遺跡出土の須恵器杯・皿類等の底部底面に施された刻書の「白田」または「由」の筆順について、

「田または由の文字でさえ、一群の中に少なくとも四種類の筆順が想定される。（中略）須恵器工人の文字の習熟度は「田」の筆順さえ習得しえない状況であった」と述べており（平川2000、p. 16・p. 429・p. 471.）、今回の調査で出土した墨書も、蛇喰遺跡と同様に、筆記者の筆順の習得が十分でなかった可能性が考えられる。また、逆から読む「田中」の可能性も考えたが、筆跡からみて、その可能性は考えにくい。

13・24・38は「中田」で、墨書されている部位としては、24・38は底部底面に、13は口縁部外面に書かれている。43は「□田」であり、底面に墨書がある。「中田」という文字は、奈良文化財研究所のデータベースで調べたところ、「中田」の墨書の例は確認できなかった。一方で、「中」と「田」で分けて奈良文化財研究所のデータベースで調べたところ、平城京跡から「中」、「田」に関する墨書が多数出土していることがわかった。「中」の他に「中」の含まれる墨書としては「中衛」や「中井」があった。「田」の他に「田」の含まれる墨書として「岸田」「桑田」「竹田郷」があった。『和名類聚抄』の越中国の項には、「中田」の記述は見られないため、郷名でないことは確かである。

今回の調査で出土した墨書土器「中田」、または「田」は、筆跡を見ると文字の癖がどれも異なるため、別の人物が同じ文字「中田」を墨書した可能性が高い。

当地域では、同じ文字の墨書土器が多量に出土する遺跡について、在地の有力者がその墨書土器を村落の統制のために使用させた可能性が指摘されている（安達1989、p. 4.）。このことについては、その可能性があるという肯定的な意見も述べられている（富山県埋蔵文化財センター1991、p. 70.）。今回の調査では、同じ文字の墨書土器が、多量ではないものの、集中して出土しているといえる。

8世紀末頃に相当する須恵器蓋（13）に墨書「中田」があることから考えて、既に奈良時代末頃に「中田」という名称があったことがわかり、9世紀後半～末頃まで、「中田」という名称が続いていたものと考えられる。今回の調査で出土した土師器の椀類底面に見られた「中田」の意味・解釈としては、郷ないしは里を構成する単位（ムラや地域）に関わりのある名称、またはその構成に関わりのある有力者（氏族）や構成員に由来する名称とも考えられる。（村上）

３　施釉陶器

施釉陶器は、僅かではあるがＡ区・Ｂ区ともに出土した。その内訳は、Ａ区から緑釉陶器1点と灰釉陶器1点、Ｂ区から緑釉陶器2点と灰釉陶器2点、合計で緑釉陶器3点と灰釉陶器3点である。緑釉陶器は、Ａ区出土の103、Ｂ区出土の153・154の3点で、いずれも高台付きの椀である。103は器壁にやや厚みがあって、胎土に白色粒を含んだ軟質な焼成であるが、153・154の胎土は緻密で、硬質な焼成である。103・153は底面以外に緑釉が施されるが、154は底面を含めた外内面に緑釉が施される。153・154はⅡ・Ⅲ層（遺物包含層）からの出土、103は表採遺物で、いずれも遺構に伴うものではない。年代は、9世紀代と考えられ、胎土・焼成等の特徴から、103は京都系、153・154は東海系といえる。

一方、灰釉陶器は、Ａ区出土の100、Ｂ区出土の155・157の3点である。いずれも胎土は緻密で、硬質な焼成である。100・155は椀の口縁部で、器壁が極めて薄くて、外内面ともに灰釉が施されている。157の器種は、高台付きの皿と思われ、外面に灰釉が施される。100・155はⅡ・Ⅲ層（遺物包含層）からの出土、157は排土から出土したもので、いずれも遺構に伴う出土ではない。年代は、9世紀代と考えられ、胎土・焼成等の特徴から、いずれも東海系といえる（表14）。

東海系のものは愛知県（尾張）猿投窯の生産品の可能性が高いが、富山県（越中）出土の9世紀代の緑釉陶器の産地は9割が京都系で、1割が東海系といわれている（内田1999、p. 103.）。

富山市域に目を向けると、中名Ⅴ、長岡杉林、任海宮田、吉倉Ｂの各遺跡から出土した9世紀代の緑釉陶器椀・皿類が、京都系といわれている（内田1999、p. 99表1.）。また、富山県（越中）出土の

緑釉陶器と灰釉陶器の出土割合は、ほぼ同割合で出土している傾向が指摘されており（内田1999、p. 102.）、今回出土した施釉陶器も同様の傾向を示している。

表14　出土した施釉陶器の構成一覧

種類	地区	番号	器種	胎土・焼成	推定産地
緑釉陶器	A区	103	椀B	白色粒含・軟質	京都系
	B区	153	椀B	緻密・硬質	東海系
	B区	154	椀B	緻密・硬質	東海系
灰釉陶器	A区	100	椀	緻密・硬質	東海系
	B区	155	椀	緻密・硬質	東海系
	B区	157	（皿B）	緻密・硬質	東海系

４　土錘

今回の調査でＡ区・Ｂ区ともに数多くの土錘が出土した。形状の把握が可能なものはＡ区から21点、Ｂ区から23点、合計44点で、第４表に示したとおりである。形態分類別に見ると、卵形が最も多く全体の46％を占め、なかでも卵形cが全体の32％を占める。最も少ない形態は、提灯形aと寸胴形aでいずれも全体の2％であった。さらに、欠損品を除いた重量別に見ると、160ｇを超える大型のものは全体の3％で、40ｇまでのものが全体の52％を占め最も多いことがわかる（図34）。100ｇを超える大型土錘の出現は、平安時代以降といわれている（富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2007、p. 108.）。

土錘は、漁網に用いられた錘で、大型や中型である程度の重量のあるものは曳網や巻網、流水域での刺網、小型軽量のものは止水域での刺網に用いられた可能性が高いと指摘されている（大沼1990、p. 289.）。今回の調査で出土した小型軽量の土錘（104など）は、止水域での刺網に用いられていた可能性が高い。

また、土錘は富山市域では、吉倉Ｂ、任海宮田、栗山楮原、金屋南などの各遺跡から数多く出土している。いずれの遺跡も海から離れていることから、川で魚を捕るために使用されたと考えられており、本遺跡でも東に隣接する土川などの周辺の川で漁が行われていたことが想像できる。

漁獲の対象については、古代の漁業は捕獲する対象がごく限られたもので、水産加工品が多いことが指摘されてきた（福島1971、p. 32.）。川を漁場として捕獲する魚については、10世紀に編纂された『延喜式』巻24主計寮上の記載を見ると、北陸道の越中（現在の富山県域）から中男作物として、「鮭楚割（すわやり）、鮭鮨、鮭氷頭（ひず）、鮭背腸（みなわた）、鮭子、雑腊（きたひ）」といった鮭（サケ・マス）や鮒（フナ）の加工品が貢納されている（虎尾編2007、p. 878.）。雑腊は、平城宮跡出土の上部に切込みのある付札木簡に「（表）越中国利波郡川上里鮒雑　（裏）腊一斗五升　和銅三年正月十四日」という記載があり、和銅3（710）年に越中利波郡川上里（現在の富山県南砺市）から、鮒の干物（干肉）が送られたことがわかっている。

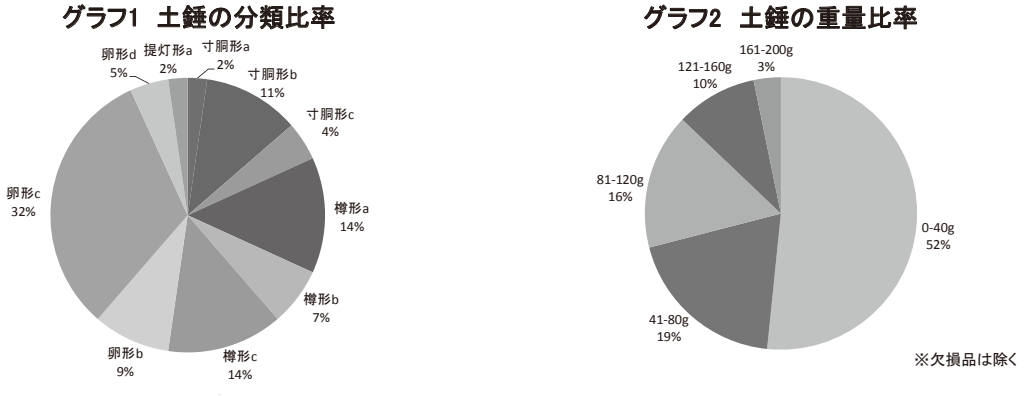


図34　土錘の分類・重量比率

以上から古代の富山県域（越中）は、鮭（サケ・マス）や鮒（フナ）の産地のひとつで、加工物が作られていた。本遺跡においても、鮭（サケ・マス）や鮒（フナ）などを漁獲の対象としていたと考えられる。

第３節　まとめ

本遺跡から南へ約3．5㎞の地点に位置する富山県総合運動公園の付近では、吉倉Ｂ、任海宮田、南中田Ｄ、栗山楮原などの各遺跡において、奈良～平安時代に営まれた集落の調査が行われている。これらの遺跡と、今回の本遺跡での調査成果とを比較することで、まとめとしたい。吉倉Ｂ、任海宮田、南中田Ｄ、栗山楮原などの各遺跡は、神通川とその支流である熊野川に挟まれた扇状地に立地する。本遺跡が、神通川の支流である熊野川と土川に挟まれた地点に立地するのと、よく似た環境といえる。

奈良～平安時代の集落は、当然ながら掘立柱建物、竪穴建物、溝、土坑などによる構成が中心で、吉倉Ｂ遺跡では8世紀初め～前半、任海宮田遺跡と南中田Ｄ遺跡では8世紀後半～10世紀初め、栗山楮原遺跡では10世紀前半に、集落が営まれていたことがわかっている。今回の調査は、限定された調査区のため集落としての全体像は不明であるが、出土した土師器・須恵器の器種構成、施釉陶器の出土のほかに、土錘の出土が多く見られることや、集落の造営年代などを比較すると、任海宮田遺跡の様相に最もよく似ていることが指摘できる。また、限定された調査区にもかかわらず、施釉陶器の出土が認められたことは、公的要素が強い(宇野1991、p.274.)可能性も考えられる。

また、Ｂ区の遺物包含層からではあるが、7世紀中頃に比定される須恵器蓋(151)が出土したことは、平成21(2009)年に行われた本遺跡での調査成果とも合致し、本遺跡から神通川を隔てて西約4㎞の地点に立地する中名Ｖ遺跡の調査成果なども併せて考えると、既に7世紀代には集落の造営が開始されていた可能性がある。（基峰）

引用・参考文献（第４章以外）

安達志津　1989 「富山市内での墨書土器発見から」『富山市考古資料館報』№19、富山市考古資料館、pp.3-6.

池野正男　2003 「越中における古代前半代の土師器食器について」『北陸古代土器研究』第10号、北陸古代土器研究会、pp.24-28.

池邊爾　1966 『和名類聚抄郷名考證』吉川弘文館

池邊爾　1981 『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館

石川県埋蔵文化財保存協会　1987 『石川県出土文字資料集成』

内田亜紀子　1999 「富山県の古代施釉陶磁器」『富山考古学研究』第2号、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、pp.97-104.

宇野隆夫　1991 『律令社会の考古学的研究―北陸を舞台として―』桂書房

大沼芳幸　1990 「正伝寺南遺跡出土の魚網錘について―網漁業の中での位置付け―」『一般国道161号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会、pp.278-300.

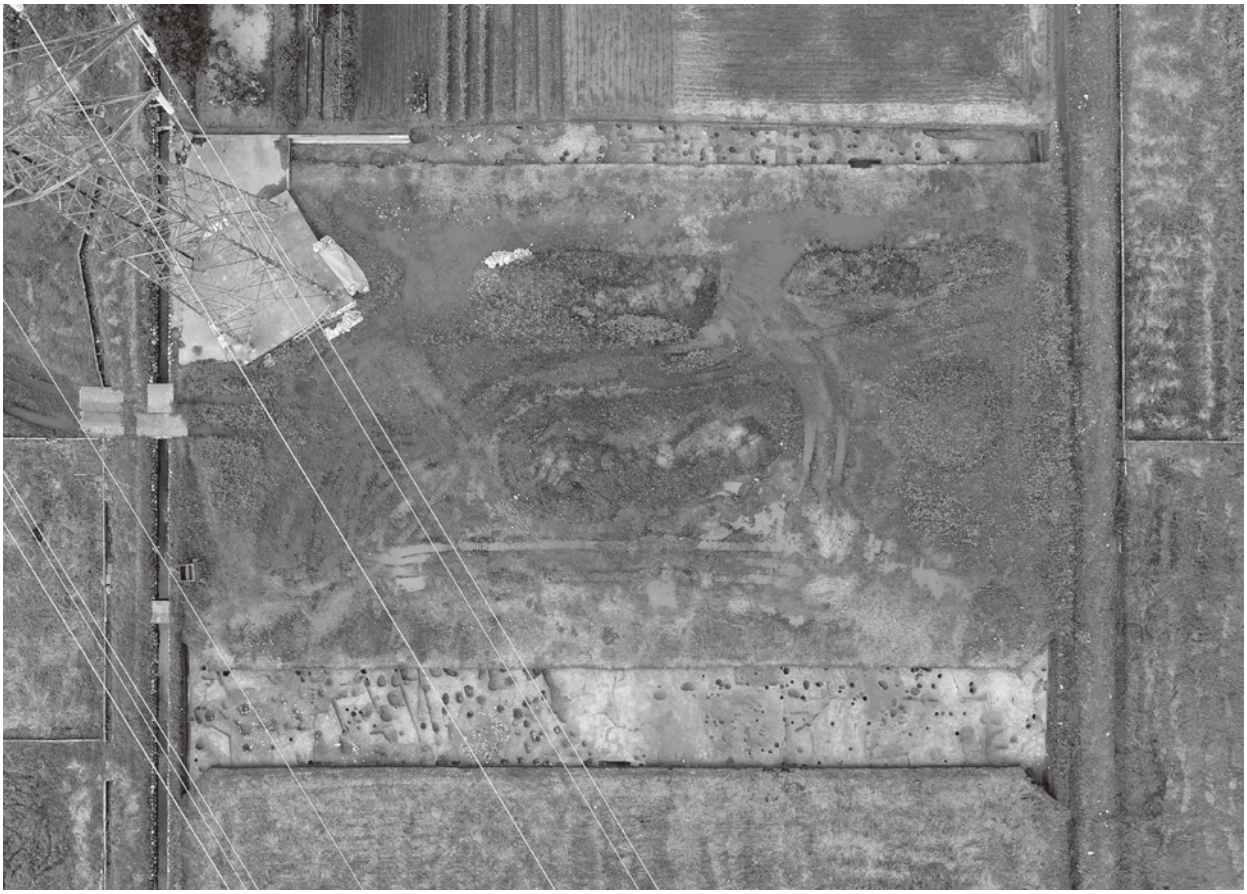
北日本新聞社　1994 「熊野川」『富山大百科事典』

齊藤孝正　2000 『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』至文堂

笹生衛　2005 『神仏と村景観の考古学』弘文堂
島根県八束郡玉湯町教育委員会　1999 『蛇喰遺跡発掘調査報告書』
富山県小杉町教育委員会　2002 『天池Ｃ遺跡・水蔵場Ｇ遺跡・水蔵場Ｈ遺跡発掘調査概要』
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2005ａ 『吉倉Ｂ遺跡発掘調査報告』
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2005ｂ 『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2006 『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2007 『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2008 『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2010 『友杉遺跡発掘調査報告』
富山県埋蔵文化財センター　1990 『栗山楮原遺跡・南中田Ａ遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田Ｃ遺跡』
富山県埋蔵文化財センター　1991 『富山県富山市南中田Ｄ遺跡発掘調査報告書』
富山県埋蔵文化財センター　1996 『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』
富山県埋蔵文化財センター　1997 『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
富山県埋蔵文化財センター　1998 『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
富山県埋蔵文化財センター　2004 『富山県埋蔵文化財センター年報―平成15年度―』
富山県埋蔵文化財センター　2007 『富山県埋蔵文化財センター年報―平成18年度―』
富山市教育委員会　1996 『富山市任海宮田遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会　2000ａ 『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2000ｂ 『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2002ａ 『富山市吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2002ｂ 『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告114
富山市教育委員会　2003 『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 富山市埋蔵文化財調査報告131
富山市教育委員会　2005 『富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告2
富山市教育委員会　2009ａ 『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告30
富山市教育委員会　2009ｂ 『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告37
富山市教育委員会　2014 『富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告63
富山市教育委員会　2015ａ 『富山市千石町遺跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告78
富山市教育委員会　2015ｂ 『富山市千石町遺跡発掘調査報告書　写真図版編』 富山市埋蔵文化財調査報告78-2
虎尾俊哉編　2007 『延喜式（中）』集英社
平川南　2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館
福島好和　1971 「古代諸国貢納水産物の分布について―その歴史地理学的考察―」『人文地理』第23巻第5号、人文地理学会、pp. 29-59.
奈良国立文化財研究所　1983 『平城京出土墨書土器集成Ⅰ』

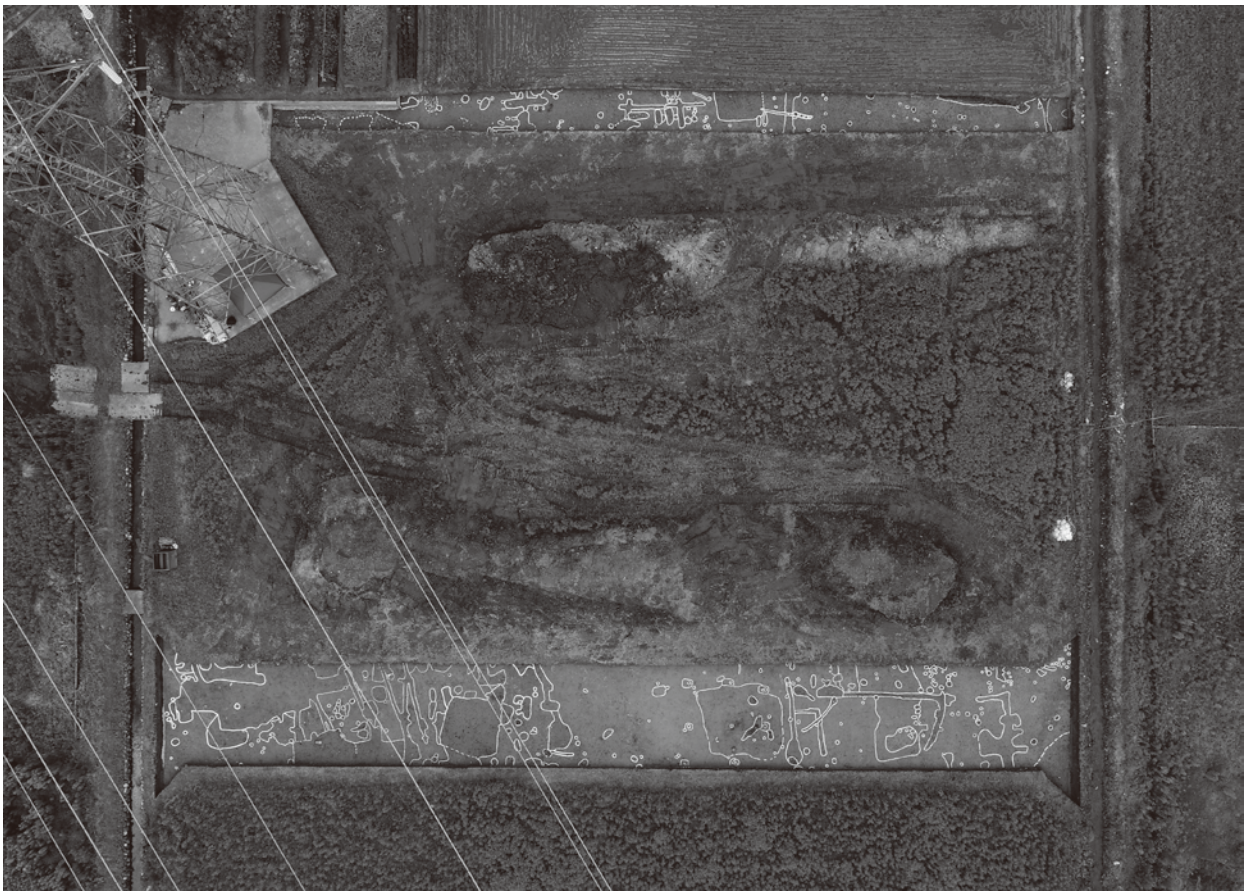
図版1　調査区全景

調査区　全景(南から・A区[手前]　B区[後方])

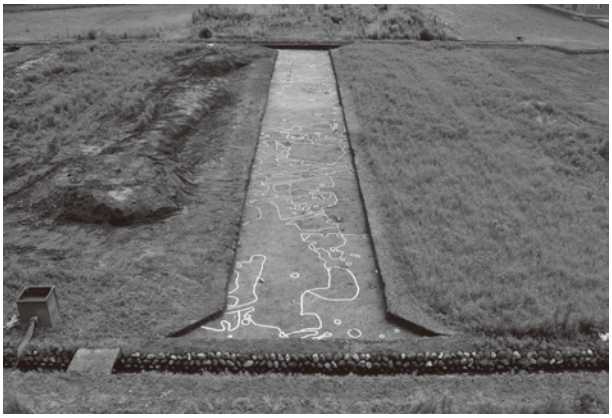


調査区　全景(上から・A区[下]　B区[上])

図版2　調査区遺構検出・基本層序



調査区　遺構検出全景（上から・A区［下］　B区［上］）



A区　遺構検出全景（西から）

B区　遺構検出全景（西から）

A区　南壁基本層序（北から）

B区　南壁基本層序（北から）

図版3　A区　調査遺構・遺物出土状況（1）

A区　全景（東から）

A区　全景（西から）

A区　SP124遺物（2・3）出土状況［SB01］（南から）

A区　SP117全景［SB01］（南から）

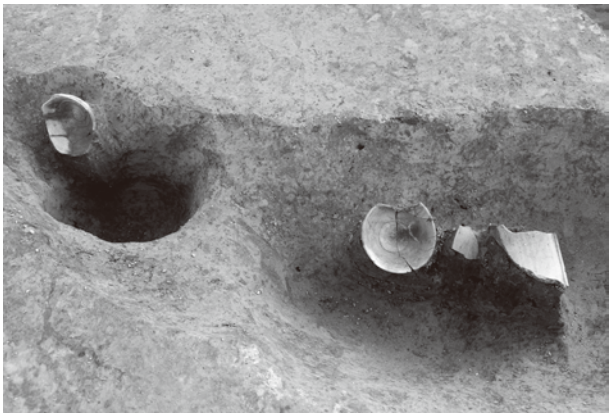
A区　SB01・SD16全景（北から）

図版4　A区　調査遺構・遺物出土状況（2）

A区 SI03全景(上から)

A区 SI03遺物(26)出土状況(東から)

A区 SI01全景(南西から)

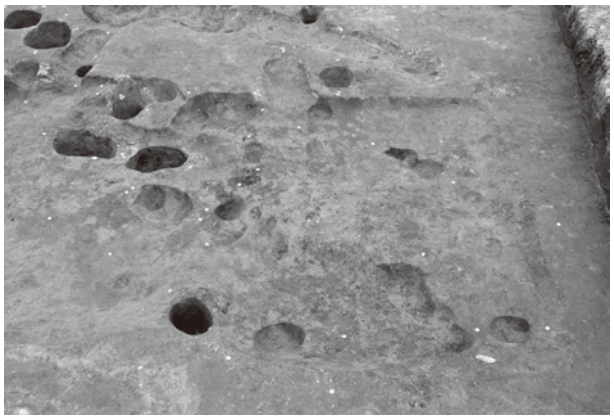


A区 SP177遺物(44)・SK31遺物(37～39)出土状況(北から)

A区 SX11遺物(56・57・60・61)出土状況(西から)

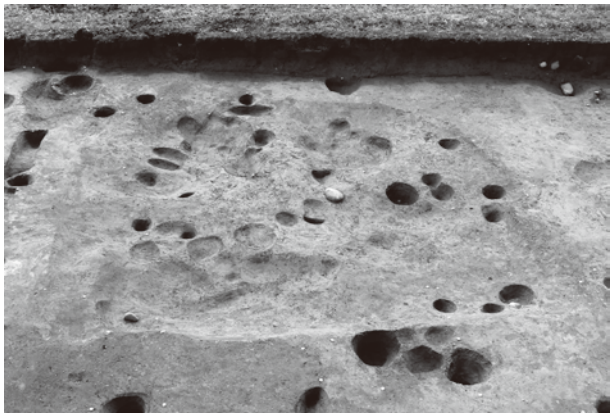
図版5　A区　調査遺構・遺物出土状況（3）

A区　SX11全景(南から)



A区　SX17全景(西から)

A区　SX21土層堆積状況(南から)



A区　SX21全景(北から)

A区　SX21遺物(79)出土状況(東から)

図版6　B区調査遺構・遺物出土状況

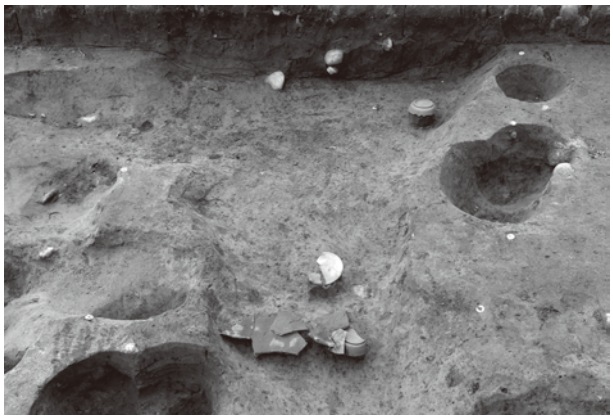
B区　全景(東から)

B区　全景(西から)

B区　SI05全景(南から)

B区　SI05遺物(110)出土状況(東から)

B区　SD23全景(南から)

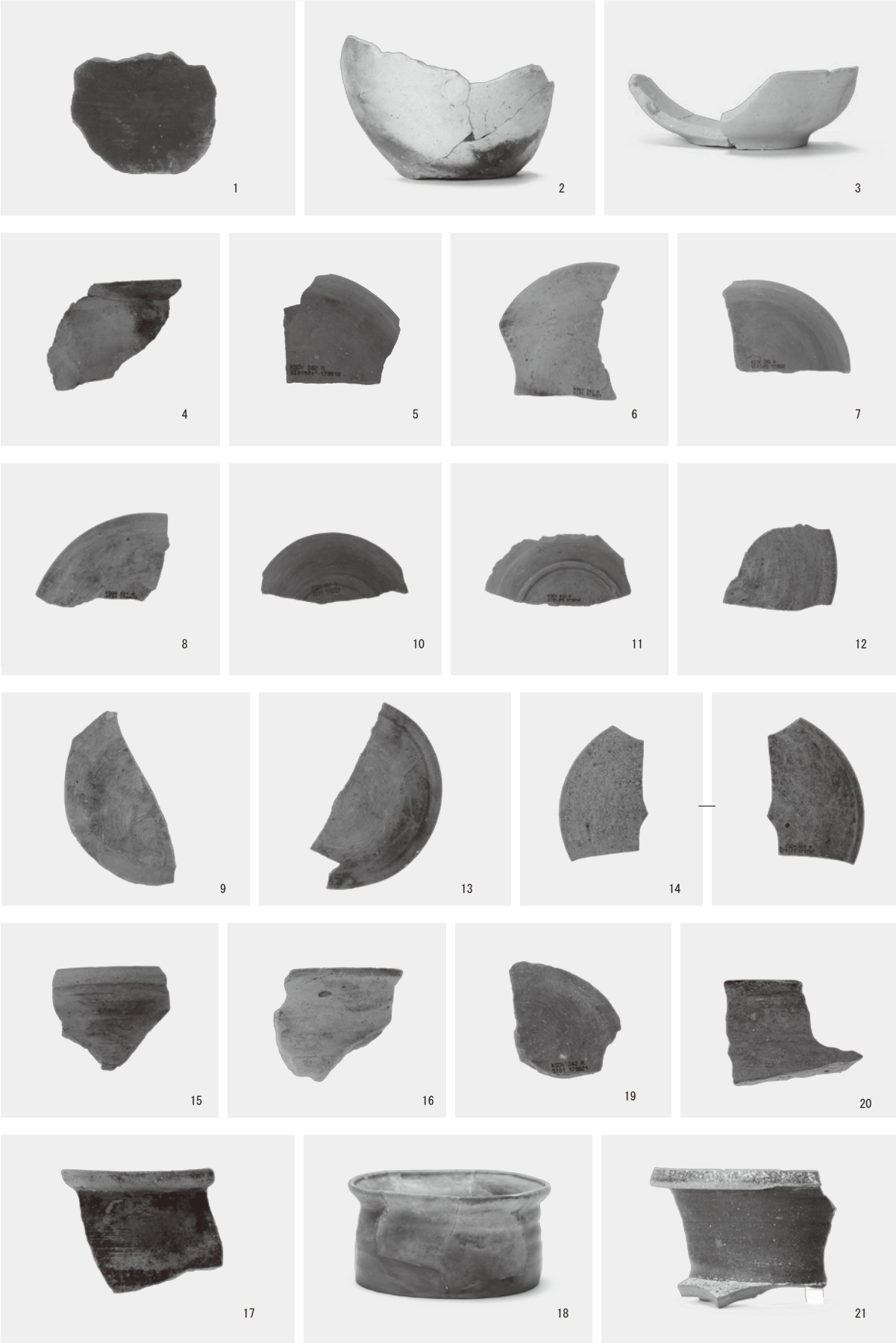


B区　SD32全景(北から)

B区　SD32土層堆積状況(北から)

B区　SD32遺物(129)出土状況(東から)

図版7　A区出土遺物（1）



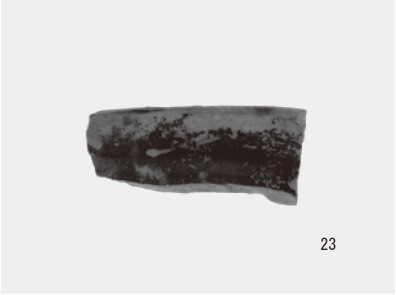
1～3：SB01　4：SD16　5～20：SI01　21：SI03

図版8　A区出土遺物（2）

22

24

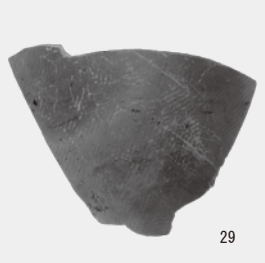
25


23

26

27

28


29

30

31

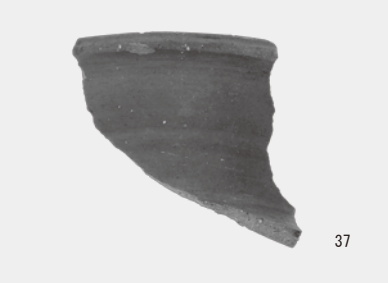
33

34

36

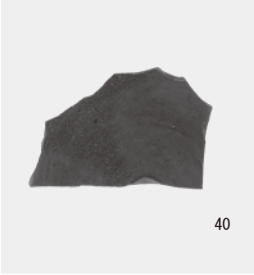
32

35

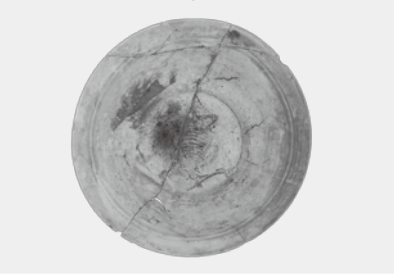

37

38

39

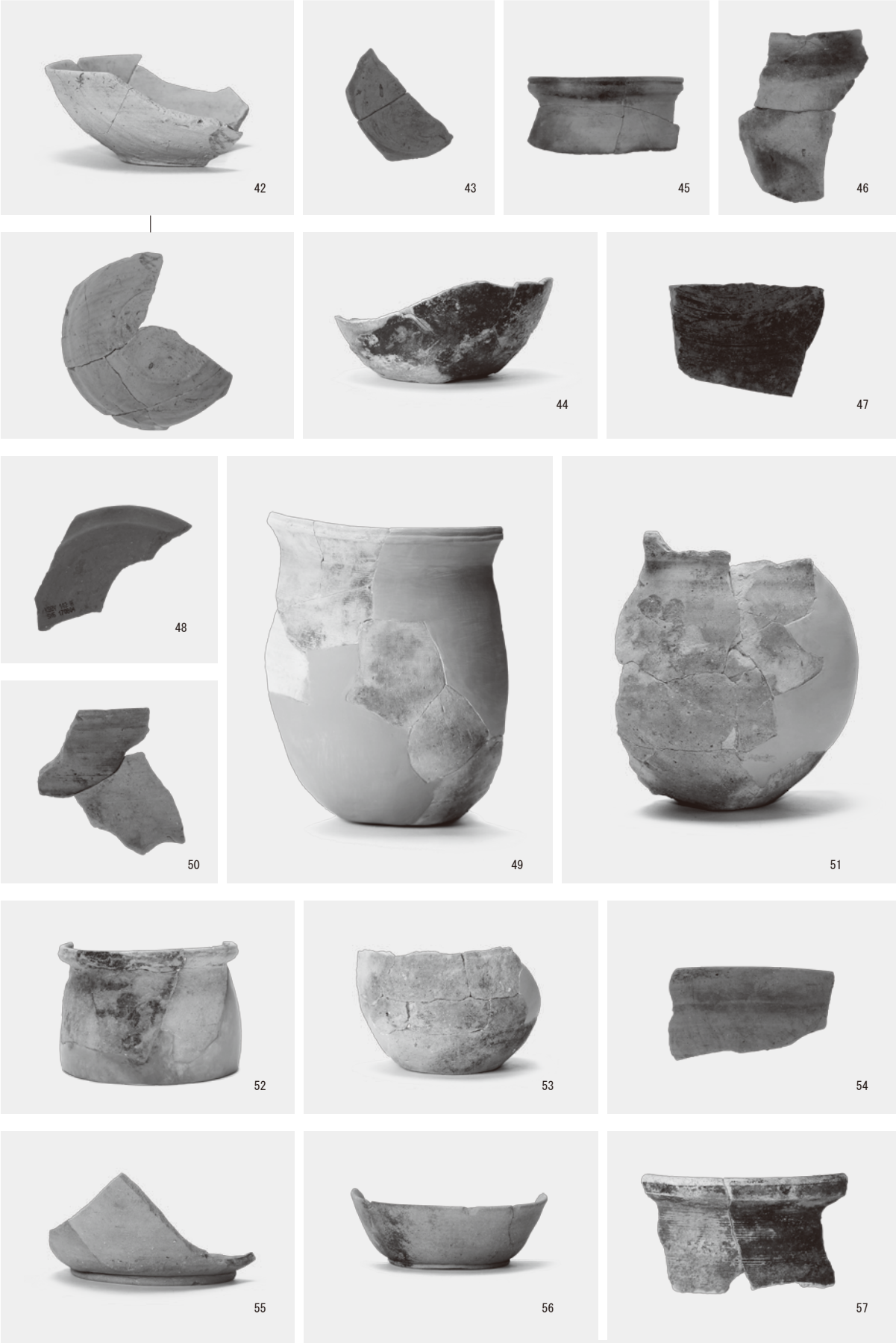

40

41



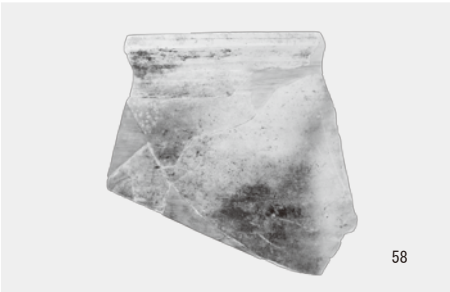
22～27:SI03　28:SD09・10　29:SD15　30:SD20　31:SK17　32:SK19　33～36:SK27　37～39:SK31　40:SP72　41:SP97

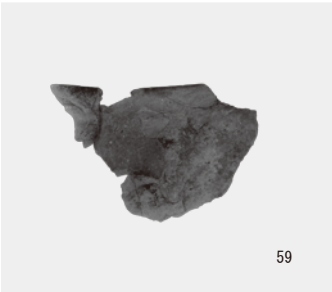
図版9　A区出土遺物（3）



42:SP106　43:SP142　44:SP177　45・46:SX02　47:SX03　48:SX06　49～53:SX09　54:SX10　55～57:SX11

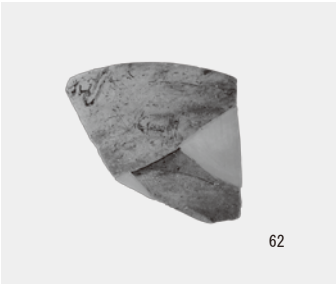
図版10　A区出土遺物（4）


58


59

60

61

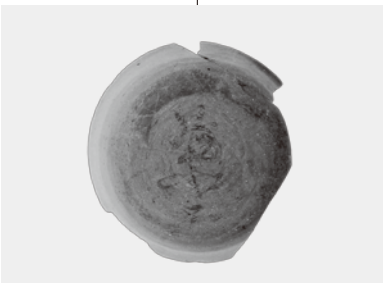

62

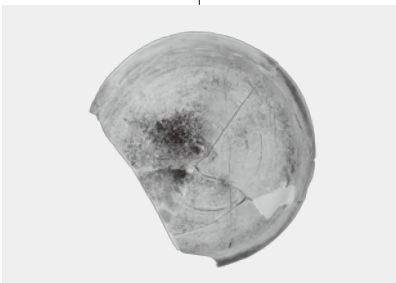
63

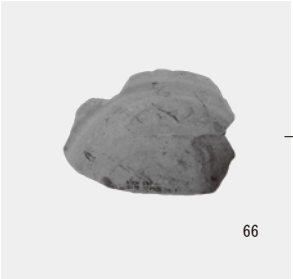
64

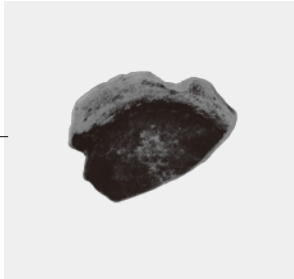
67

65






66



68

72

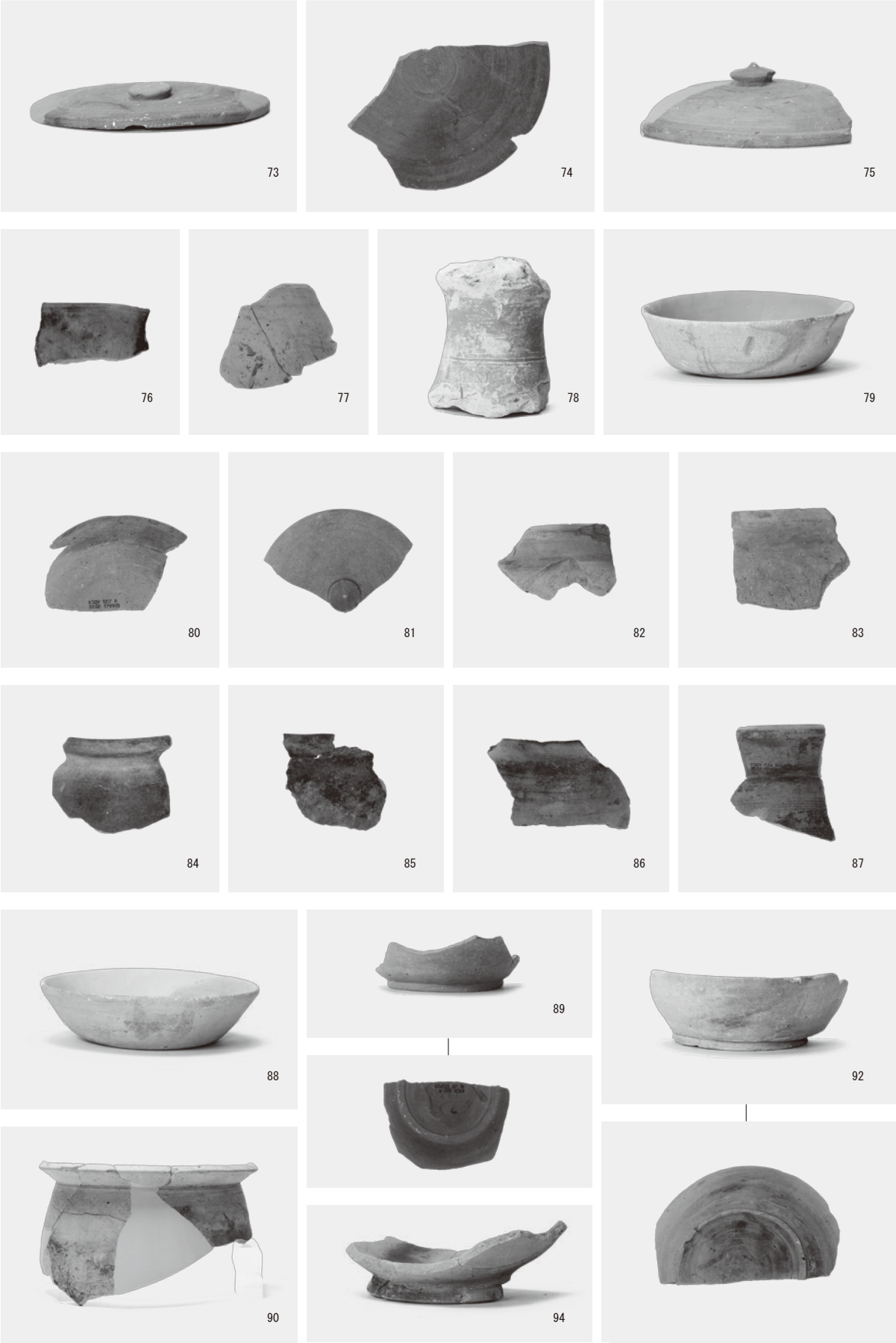
69

70

71

58～61:SX11　62:SX17　63～72:SX18

図版11　A区出土遺物（5）



73～78:SX18　79～87:SX21　88～90:A区検出面　92・94:A区包含層

図版12　A区出土遺物（6）・B区出土遺物（1）

95

96

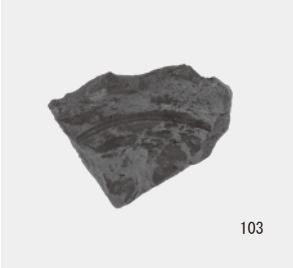
99

97

98

100

101


103

104

105

106

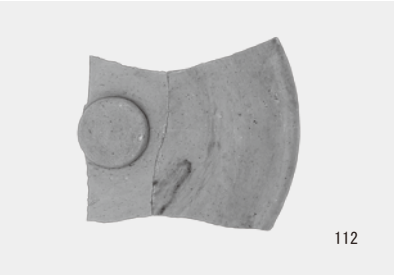
107

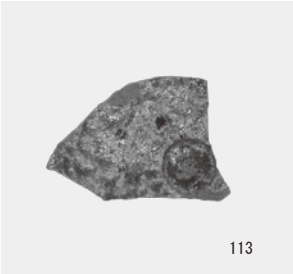
108

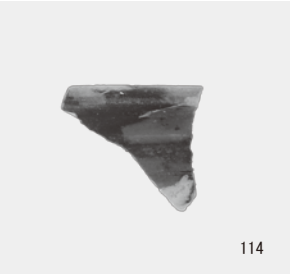
109

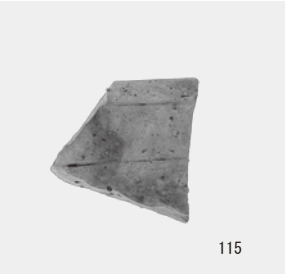
110

111


112


113


114


115

116

95～100・105～108：A区包含層　101：A区表土　103：A区表採　104：SB01　109：SX06　110～116：SI05

図版13　B区出土遺物（2）

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

130

131

127

128

129

132

133

134

135

136

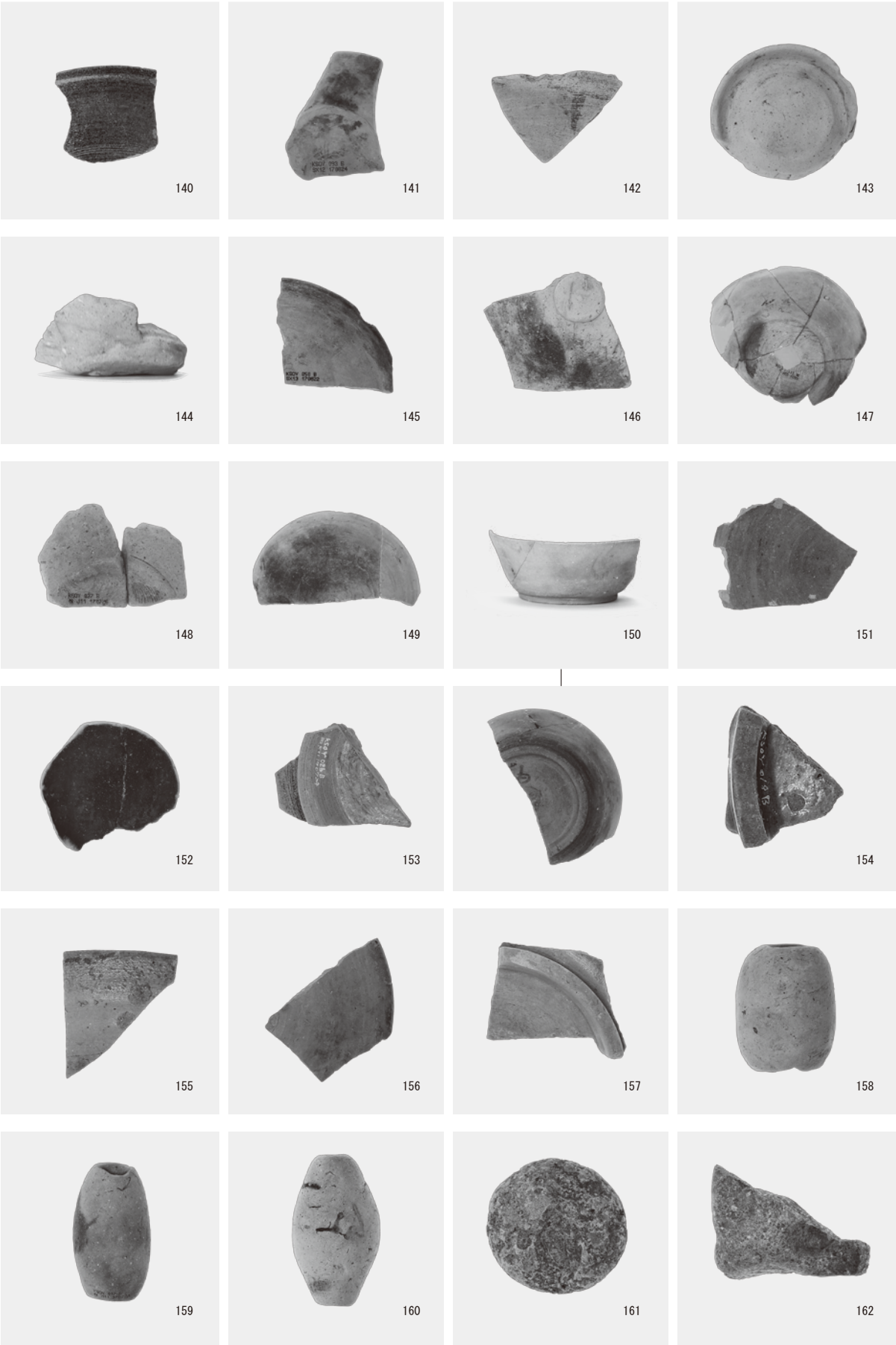
137

138

139

117:SD23　118:SD26　119～121:SD28　122・123:SD30　124～131:SD32　132:SK40　133・134:SK41
135:SP172　136:SP181　137:SP193　138:SP203　139:SP213

図版14　B区出土遺物（3）



140:SP221　141～144:SX12　145・146:SX13　147・148・158・159:B区検出面　149～155・162:B区包含層
156・157・160:B区排土　161:SX12

報　告　書　抄　録

ふりがな	とやましくろせおおやいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書
副書名	宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	94
編著者名	細辻嘉門（富山市教育委員会埋蔵文化財センター） 基峰修、村上佳（株式会社アーキジオ） 矢作健二、田中義文、井上智仁、斉藤崇人、馬場健司、齋藤紀行 (パリノ・サーヴェイ株式会社)
編集機関	株式会社アーキジオ
所在地	〒933-0824　富山県高岡市西藤平蔵581　℡0766-63-8850
発行機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
所在地	〒939-2798 富山県富山市婦中町速星754番地（婦中行政サービスセンター本館3階） ℡076-465-2146
発行年月日	西暦2018年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろせおおやいせき 黒瀬大屋遺跡	とやまけんとやましくろせ 富山県富山市黒瀬	16201	0549	36度39分27秒	137度12分18秒	20170719 ～ 20170927	432.57㎡	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒瀬大屋遺跡	集落	奈良 ～ 平安	掘立柱建物 竪穴建物 溝 土坑 ピット 竪穴状遺構 不明遺構	土師器杯・椀・甕・小型甕・鍋、須恵器杯・椀・甕・壺、緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器（土師器・須恵器）、刻書土器（須恵器）、土錘	掘立柱建物SB01が、廂付建物と考えられる。 墨書土器・刻書土器のほかに、施釉陶器（緑釉陶器・灰釉陶器）の出土が認められた。

要約

黒瀬大屋遺跡は、常願寺川から神通川に向かって西流する土川の西岸、東に熊野川に挟まれた扇状地に立地する奈良～平安時代の集落遺跡である。本調査区（A区・B区）では、一面廂（片廂）掘立柱建物1棟、竪穴建物3棟、溝31条、土坑46基、ピット251基、不明遺構20基を確認した。

遺物は、土師器の坏・椀・甕・小型甕・鍋等、須恵器の杯・椀・蓋・甕・壺等が出土した。遺構外から、施釉陶器（緑釉陶器・灰釉陶器）も僅かであるが出土している。また、土錘が44点出土した。土師器や須恵器の杯・椀を中心に、墨書土器・刻書土器が22点あり、特に「中田」と墨書されたものが推定を含めて4点あった。

限定された調査区のため集落としての全体像は不明であるが、出土遺物から遺構の年代は、概ね8世紀後半～9世紀前半、9世紀中頃～後半、9世紀後半～10世紀初めの3時期の変遷がある。また、包含層からではあるが、7世紀中頃の須恵器蓋が出土しており、7世紀代には集落の造営が開始されていたと考えられる。

富山市埋蔵文化財調査報告 94

富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書

－宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査－

発 行 日 2018（平成30）年３月31日

発行機関 富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
〒939-2798 富山県富山市婦中町速星754番地
（婦中行政サービスセンター本館３階）
TEL ０７６－４６５－２１４６
FAX ０７６－４６５－５０３２
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

編集機関 株式会社アーキジオ
〒933-0824 富山県高岡市西藤平蔵581
TEL ０７６６－６３－８８５０

印　刷　株式会社トーザワ